

国道122号バイパス関係

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告
— III —

鎌 戸 足 利

1984

序

一般国道122号線は、埼玉県における道路網整備の一環として、蓮田市閏戸から岩槻市馬込までのバイパスが建設されることになりました。このバイパスの建設について、埼玉県教育局文化財保護課では、事前に路線内の遺跡確認調査を実施し慎重な協議の結果、やむをえず7個所の遺跡について発掘調査を実施し、記録保存を行うことにいたしました。

昭和54年度の発掘調査は、埼玉県教育委員会が実施し、昭和55年度からは埼玉県の委託を受けて財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施してまいりました。そして昭和57年度には国道122号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰを刊行することができました。

本書は閏戸足利遺跡に関する報告書ですが、本書が今後教育、学術研究等に広く活用されることを期待しております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり埼玉県土木部道路建設課、杉戸土木事務所及び蓮田市教育委員会や地元の方々に御指導、御協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

昭和59年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は一般国道122号バイパスにかかる発掘調査のうち、蓮田市閏戸に所在する閏戸足利遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県の委託を受けて、昭和57年7月から昭和58年3月まで財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成作業は同じく昭和58年度に受託し実施した。
3. 発掘調査における基準点測量はJR中央駅業に依頼し、公共座標は三等三角点「北原」を、標高は水準点No.2767を使用した。B.M. 1のデーターは次の通りである。

X = + 399,582

Y = -16722,707

H = 11,390

4. 出土品の整理及び図の作成は木戸春夫が主にあたった。
5. 発掘調査における写真は橋本勉、水野裕之、木戸春夫が、遺物写真は木戸春夫が撮影した。
6. 本書の執筆は主に木戸春夫があたったがそれ以外のものについては文末に氏名を記した。
7. 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。遺跡全測図(1/1000)、遺構、建物跡(1/80、1/100)、土壤、井戸(1/60)、溝(1/80、1/100)、遺物実測図(1/4、1/6)、土器拓影図(1/6)
8. 本書の編集は調査研究第五課職員があたり、小川良祐、横川好富が監修を行った。
9. 本遺跡出土の鉄滓について金属学的分析を大澤正己氏に依頼し、その結果を付編として巻末に掲げた。
10. 本書を作成するにあたり下記の方々から御指導、御助力を得た。

井上 喜久男、浅野 晴樹

目 次

序

例 言

I	発掘調査に至るまでの経過	1
II	遺跡の立地と還境	2
III	遺跡の概観	6
IV	調査の経過	7
V	遺構と遺物	8
1	遺 構	8
a.	I区	8
b.	II区	21
c.	III区	22
d.	IV区	32
e.	V区	54
2	遺 物	58
a.	土師質土器皿	58
b.	陶磁器	58
c.	金属製品	72
d.	石製品	72
e.	その他	78
VI	結 語	96
VII	付 編	104

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡 S = $\frac{1}{50,000}$	3	溝跡実測図	46	
第2図	周辺の地形 S = $\frac{1}{2,500}$	5	第35図	11号・12号・14号・16号・19号溝跡 実測図	48
第3図	グリッド配置図・全測図		第36図	7号・15号・20号溝跡実測図	49
第4図	I区造構配置図	9	第37図	土壤実測図	51
第5図	1号建物跡実測図	10	第38図	土壤実測図	52
第6図	2号建物跡実測図	11	第39図	V区造構配置図	54
第7図	3号・4号建物跡実測図	12	第40図	溝跡実測図	55
第8図	6号建物跡実測図	13	第41図	井戸跡・土壤実測図	56
第9図	5号・7号・8号建物跡実測図	14	第42図	土師質土器皿・天目・青磁実測図	59
第10図	5号・7号・8号建物跡柱穴断面図	15	第43図	碗類・甕類実測図	61
第11図	1号・2号・3号井戸跡実測図	16	第44図	碗・皿・香炉類実測図	62
第12図	4号・5号井戸跡・溝跡実測図	17	第45図	皿・鉢・甕類実測図	64
第13図	土壤実測図	19	第46図	染付実測図	65
第14図	II区造構配置図	21	第47図	染付実測図	66
第15図	III区造構配置図	22	第48図	手培・その他実測図	68
第16図	III区遺物平面分布図	23	第49図	擂鉢拓影図	70
第17図	建物跡実測図	24	第50図	擂鉢拓影図	71
第18図	井戸跡実測図	26	第51図	焰烙実測図	73
第19図	溝跡実測図	27	第52図	焰烙実測図	75
第20図	土壤実測図	28	第53図	金属製品・瓦・板碑実測図	76
第21図	土壤実測図	29	第54図	古錢拓影図	77
第22図	土壤実測図	31	第55図	砥石実測図	78
第23図	IV区全測図	33	第56図	砥石実測図	79
第24図	遺物分布図	34	第57図	砥石・石製品実測図	80
第25図	1号建物跡実測図	35	第58図	繩文土器拓影図	82
第26図	2号建物跡実測図	37	第59図	石器実測図	84
第27図	3号建物跡実測図	38	第60図	石器実測図	85
第28図	4号建物跡実測図	39	第61図	石器実測図	86
第29図	井戸跡実測図	40	第62図	石器実測図	87
第30図	1号溝跡実測図	42	第63図	石器実測図	88
第31図	2号・13号・18号溝跡実測図	43	第64図	変遷図	98
第32図	3号・22号溝跡実測図	44	第65図	さら遺跡建物跡	99
第33図	4号溝跡実測図	45	第66図	I区 1号建物跡	100
第34図	5号・6号・8号・9号・10号・17号		第67図	I区 5号建物跡	101

写真図版目次

- | | | |
|--|------------------|-------------------------------------|
| 図版1 I区1号建物跡（北から） | I区1号
建物跡（西から） | 図版15 V区3号溝跡・V区2号・4号溝跡 |
| 図版2 I区5号・7号・8号建物跡 | | 図版16 土師質土器皿・瀬戸皿・焙烙 |
| 図版3 I区6号建物跡・I区1号土壤 | | 図版17 碗・蓋・香炉 |
| 図版4 I区2号井戸跡・I区4号井戸跡断面 | | 図版18 染付 |
| 図版5 II区2号・3号溝跡・III区建物跡 | | 図版19 染付・掛け分け茶碗 |
| 図版6 III区6号土壤・III区6号土壤人骨出土
状況 | | 図版20 青磁片・白磁片・天目茶碗片・唐津碗
・志野皿片・菊皿片 |
| 図版7 III区1号土壤・III区17号土壤 | | 図版21 染付片・染付碗底部 |
| 図版8 IV区2号土塁・IV区全景 | | 図版22 唐津片・常滑片 |
| 図版9 IV区4号溝跡・土塁（発掘前）1号建
物跡・13号・18号溝跡 | | 図版23 瀬戸皿・香炉・鎧茶碗・片口・灯明皿
・甕・徳利類 |
| 図版10 IV区20号溝跡・IV区22号溝跡 | | 図版24 金属製品・ガラス製品・土人形・その
他・古鏡 |
| 図版11 IV区3号溝跡遺物出土状況・IV区1号
土壤 | | 図版25 摺鉢片(1)・摺鉢片(2) |
| 図版12 IV区5号土壤・IV区3号土壤 | | 図版26 摺鉢・焙烙底部片・瓦・羽口 |
| 図版13 IV区12号土壤・V区1号・2号土壤 | | 図版27 砥石・球状石製品 |
| 図版14 V区1号溝跡遺物出土状況・V区溝跡 | | 図版28 板碑片・石製品 |

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和57年度）

主 体 者 企画調整	理 事 長	長 井 五 郎
	副 事 長	上 岩 渡 五 郎
	常 務 事 長	辺 岩 渡 五 郎
企画調整 埼玉県教育局文化財保護課 庶務経理	埋 藏 文 化 財 係 長	塩 宮 鈴 佐 五 郎
	管 理 部 長	崎 木 野 佐 五 郎
		朝 秀 長 佐 五 郎
発 掘 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	長 田 朗 佐 五 郎
	調 査 研 究 副 部 長	庄 田 和 啓 五 郎
	調 査 研 究 第 三 課 長	川 田 好 良 五 郎
		横 小 谷 橋 美 子
		井 本 木 野 富 美 子
		橋 木 戸 裕 夫

2. 整理（昭和58年度）

主 体 者 庶務経理	理 事 長	長 井 五 郎
	副 事 長	上 岩 正 長
	常 務 事 長	川 野 長 采
整 理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	野 田 朗 采
		庄 田 和 啓
		川 田 好 良
	調 査 研 究 部 長	横 小 谷 橋 美 子
	調 査 研 究 副 部 長	井 本 木 野 富 美 子
	(兼調査研究第五課長)	橋 木 戸 裕 夫

3. 協 力 者 蓼田市教育委員会、地元区長および地元住民

I 発掘調査に至るまでの経過

東北縦貫自動車道の開通に伴い一般国道122号線の交通量は一段と増加した。特に蓮田市内は渋滞が著しく交通量緩和の対策が要望されている。

埼玉県では、このような状況に対処するために、一般国道122号線蓮田市内のバイパス建設を計画した。道路建設などの開発事業に対して、文化財保護課では、文化財の保護に支障がないよう事前の連絡調整を密接に実施している。

昭和50年10月29日付け道建第543号をもって「一般国道122号線（蓮田市内）建設予定地内の埋蔵文化財の所在について」道路建設課長から文化財保護課長へ照会がなされた。文化財保護課では、遺跡地図と照合し検討した結果を、昭和51年2月4日付け教文第960号をもって大旨下記のとおり回答した。

(1) 建設予定地内には現在7箇所の周知遺跡が所在する。1. 蓼田市№24遺跡 2. 蓼田市№19遺跡 3. 蓼田市№20遺跡 4. 蓼田市№10遺跡 5. 蓼田市№11遺跡 6. 蓼田市№4遺跡 7. 蓼田市№3遺跡

(2) 詳細については、さらに現地調査を実施する必要があること。

その後、両課において現地調査を行いながら、これらの遺跡の扱いについて協議を重ねた結果路線変更が困難であるため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定した。

この決定を受けて、道路建設課長から昭和54年4月19日付け道建第120号をもって「一般国道122号（蓮田市地内）道路改良事業区域内における埋蔵文化財発掘調査について」協議がなされた。文化財保護課では、昭和54年10月1日付け教文第704号により、調査の期間、範囲、経費と文化財保護課が直営で実施することを回答した。

法的手続きを終了した後、昭和54年11月から№7遺跡～№1遺跡と順次発掘調査を実施した。

また、昭和55年からは増大する公共事業に対処するために設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査は引継がれた。

本書で報告する闇戸足利遺跡（№1遺跡）は昭和57年度に発掘調査を実施した遺跡であり、文化庁からは昭和57年8月4日付け委保第5の944号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

遺跡 №	遺跡名称	所 在 地	時 代	種 別	備 考
蓮田市1号	闇戸足利	蓮田市闇戸字足利	中世・近世	館 跡	本報告書
〃 2号	荒川附	〃 闇戸字野久保	弥生・古墳	集 落 跡	
〃 3号	久 台	〃 東2丁目	绳文・近世	集 落 跡	本年度報告
〃 4号	ささら	〃 東3丁目	绳文・弥生	集 落 跡	
〃 5号	帆 立	〃 馬込字八番	弥生・古墳	集 落 跡	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 報告書第24集
〃 6号	馬込新屋敷	〃 馬込字七番	弥生・古墳	集 落 跡	
〃 7号	馬込大原	〃 馬込字七番	弥生・古墳	集 落 跡	

第1表 国道122号線関係遺跡

（宮崎朝雄）

II 遺跡の立地と環境

閔戸足利遺跡は蓮田市大字閔戸字足利2689番地他に所在し、東北線蓮田駅の北方約2.9kmの位置にある。

蓮田市は行政的に、北側を白岡町、菖蒲町と隣接し、西を桶川市・伊奈町に接し、南は上尾市、大宮市そして東を岩槻市に接する。市のはば中央部に東北線と東北新幹線及び東北自動車道と県道大宮栗橋線が横断し、これに国道122号線が交わるようにはば南北に継続する。

地形的には、大宮台地岩槻支台の北半部及び白岡支台の南半部を市域に取り込み、西は綾瀬川によって区切られ、北は元荒川を界とし、東は白岡支台を横断して備前掘低地を含み慈恩寺支台際まで達する。南は岩槻支台中程を横断し、東に流路を変える元荒川に沿って区切られる。これを俯瞰的に見れば西から東に綾瀬川、綾瀬川低地、岩槻支台、元荒川及び元荒川低地、白岡支台、備前掘低地となろう。

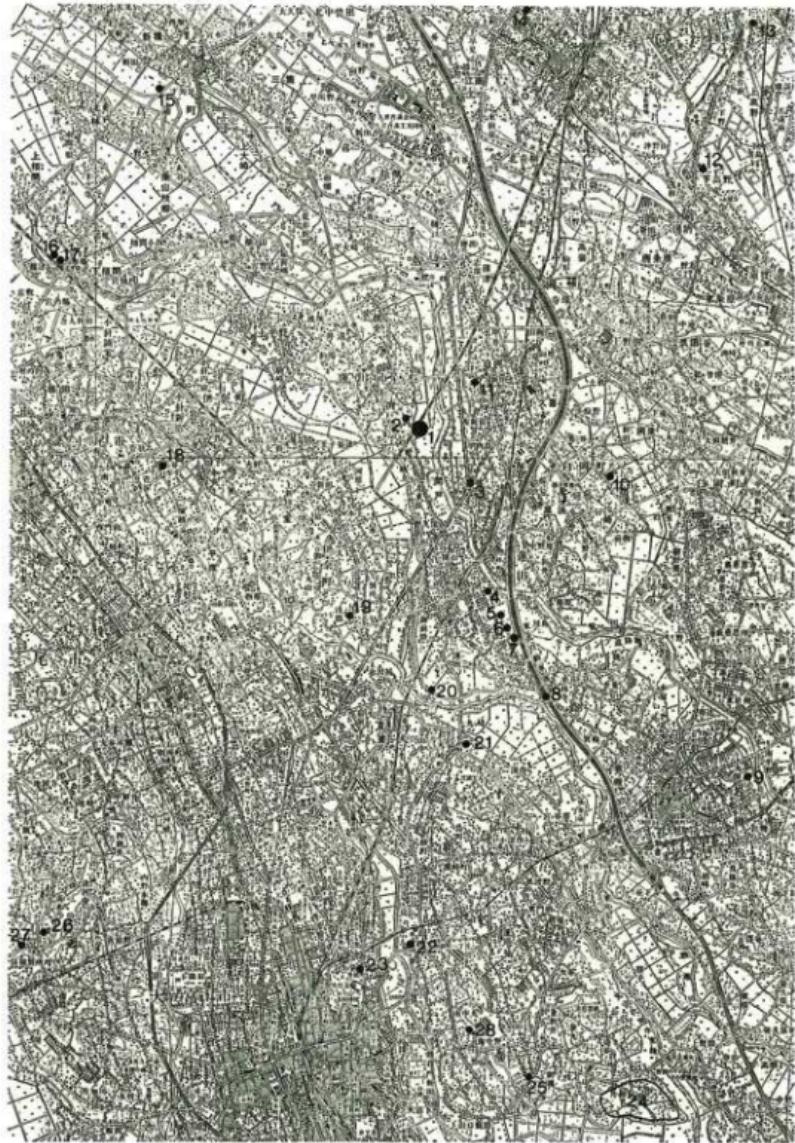
閔戸足利遺跡は上述の岩槻支台上にあり標高は約12mである。岩槻支台の縁辺部は一般的に西側が比較的急崖をなし東側はゆるやかに低地へと連なる。それぞれ開折をうけ谷が入り込むが西側は比高差が大きいため一般的にY字状のような複雑な地形となり、東側は比較的緩やかな地形となる。

地質は火山灰土壌で立川ローム、武藏野ロームからなり、台地上には青山統に区分される黒ボク土壌が広く分布する。また谷地田には腐植土層が発達するが遺跡東方の元荒川低地沿いには上笠塚統に区分されるグライ土壌が発達している。これらの土壌は比較的生産力に富んでいる。

埼玉県は旧武藏国に属し、特に武藏七党の活躍した場所として有名である。蓮田市周辺は野与党的勢力圏内にあった所で鎌倉時代には関東御分国として幕府との結び付きが強く、足利氏の政権となってからは関東管領としての上杉氏の支配のもとにあった。特にこの周辺が大きく変動するのは永享の乱以後の古河公方と上杉氏の対立があってからであろう。特に太田氏が岩槻城に独立してからは河越と岩槻の間で激しい戦いが繰り広げられた。その後も後北条氏との戦いによってこの周辺は戦場となっている。この時期には各地に城館が築造されているが本遺跡周辺においても太田氏の居城であった岩槻城跡、その支城である寿能城跡をはじめ第1図に示す様にいくつかの城館跡が残っている。一方発掘調査によって明らかにされた遺跡も増えつつある。蓮田市内では一連の国道122号バイパスの調査によって中近世に属すると考えられる遺構が検出されている。さらには建物跡と井戸跡が隣接して検出され、建物跡の敷地を区画するように溝が巡っている。帆立遺跡では

1. 閔戸足利遺跡 2. 松原堀之内 3. 城 4. さら遺跡 5. 帆立遺跡 6. 馬込新屋敷遺跡
7. 馬込大原遺跡 8. 平林寺遺跡 9. 岩槻城跡 10. 江ヶ崎城跡 11. 茶屋遺跡 12. 高野城跡
13. 14. 足利政氏館跡及び墓 15. 菖蒲城跡 16. 下相間遺跡 17. 富士塚前遺跡 18. 菅谷北城跡
19. 伊奈氏屋敷跡 20. 堀之内館跡 21. 丸ヶ崎館跡 22. 大和田館跡 23. 寿能城跡 24. 片柳南部遺跡群 25. 松野氏館跡 26. 福田陣屋跡 27. 金子山城跡 28. 春日氏館跡 29. 久台遺跡 30. 大山遺跡

第2表 周辺の遺跡



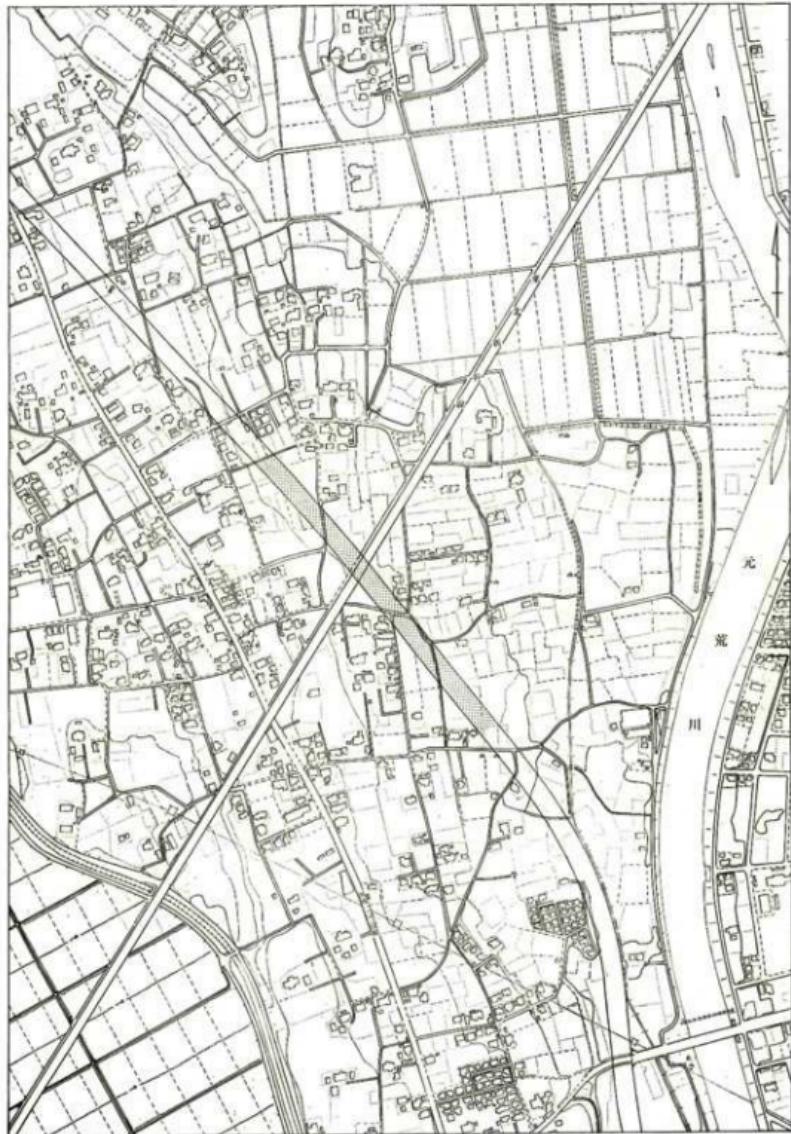
第1図 周辺の遺跡

薬研形の溝から土師質土器皿、陶磁器、板碑等が出土している。馬込新屋敷、馬込大原遺跡においても同様の溝、土壤から陶磁器、内耳土器片が出土し、特に後者からは明応二年、文明十八年銘の板碑が計3点出土している。また久台遺跡においても溝に区画される形で建物跡が検出されており「屋敷」としてのあり方が注目される⁽¹⁾。伊奈町に所在する大山遺跡では、溝状遺構、井戸跡、土壤等から灰釉平碗など陶器類が出土し、井戸中からは寛正五年、天文二年銘の板碑が出土しており周辺には春日山陣屋跡、伊奈氏館跡などが所在する。大宮市片柳南部遺跡群においても溝跡等から陶磁器類が出土している。また東北自動車道の工事に伴なって行なわれた平林寺遺跡の調査では、土壘と堀が検出されており遺構の年代は堀より出土した遺物から少くとも江戸後期以前であることが判明している。蓮田市江ヶ崎にある江ヶ崎城跡は学習院大学によって発掘調査が行なわれており鎌倉時代の遺跡であることがわかっている。隣接の白岡町茶屋遺跡においても一般民家跡と考えられる遺構が検出されており⁽²⁾、菖蒲町富士塚前遺跡、下柏間遺跡においても溝中から近世～近代にかけての遺物が出土している。

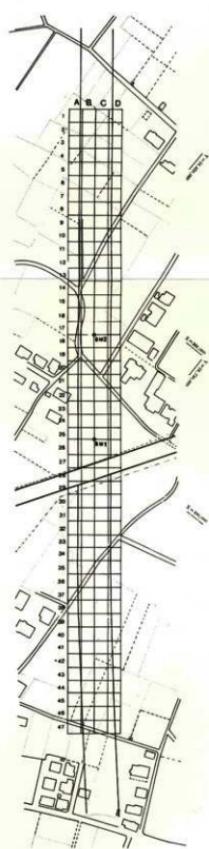
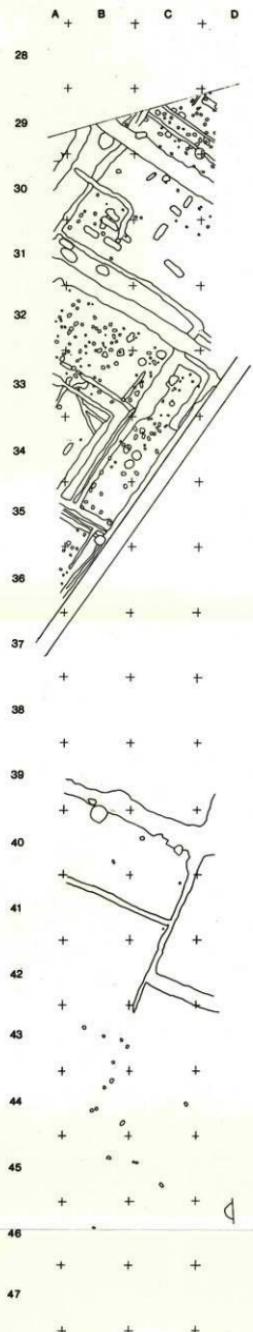
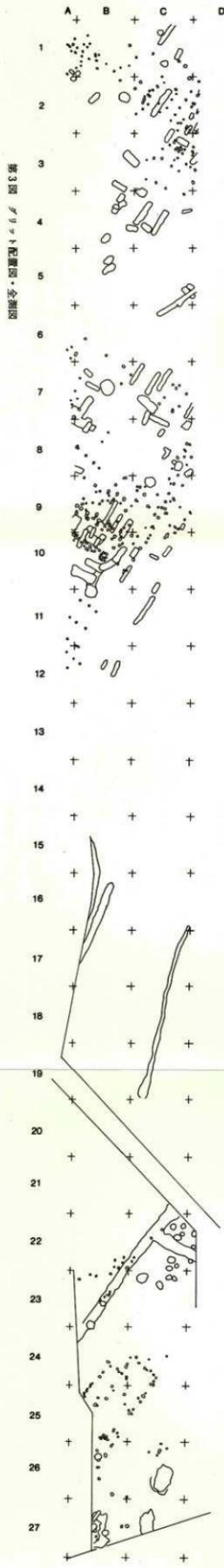
以上、はなはだかいつまんで周辺を見てきたが本遺跡については北方直線距離にして約400mの所に松原堀之内がある。ここは土壘と堀が一部良好な状態で残存している。新編武藏風土記稿によればこの地域はもと閑戸村で岩槻領であったが元禄11年に6村に分割されたという。そのうちの中閑戸村の項に「舊家者興兵衛、氏を黒須と稱す、何れに仕へし士にや詳にせざれど、先祖平内五郎へ永正十六年長謂と云人より興へたる感状、及氏綱と云ものゝ出せし文書を所持したれば、舊き家なることは論なし、……」という記事があり、松原堀之内との関連も想定される。

註1. 「久台遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第36集

2. 「茶屋遺跡」 白岡町 本年度刊行予定



第2図 周辺の地形



III 遺跡の概観

闇戸足利遺跡は元荒川に臨む大宮台地岩槻支台の東側に位置し、事業路線に交差する道路によつてI～V区に分けられる。いずれも台地上にあり標高は平均12mである。I～III、V区は陸田及び畠となつており表土を剥いでローム上面で遺構を確認した。IV区は樹木及び竹が繁茂しており人力で伐採と表土剥ぎを行なつた。

発掘調査は上記の区割りに従つて行ない事業路線の方向に沿つて任意に10m方格のグリッドを設定した。I区から事業路線に沿つて縦に1～47。横にA～Dまでの名称を付け、1Aグリッドのように呼称した。

I区では建物跡8棟、柱穴列2、井戸跡5基、溝跡1条、土壙5基、性格不明遺構69基が検出されている。建物跡については5号、7号、8号建物跡について重複が認められた。また1号、5号建物跡については近世の遺構と考えられ、その間取りとともに近接する井戸跡、建物跡等から敷地の問題についても興味がもたれる。

II区においては溝跡が3条検出されたのみで遺物の出土も皆無に近い状況であったが、この部分については目立った遺構、遺物の出土がないことがまた問題となろう。即ち、北側のIII区及び南側のI区に比べてII区は若干低くなつており、そのような地形的な条件によつても遺構の有無が左右されるであろう。

III区では建物跡1棟、溝跡2条、井戸跡4基、土壙17基、性格不明遺構1基が検出された。土壙については今回は墓壙をも含めて記述することとしたが、III区の土壙には分布の範囲にまとまりが見られ、調査区の南西隅にかたまって検出された。墓壙間の重複関係は認められないが、出土した古錢が永楽通宝のものと寛永通宝のものに限られ、明らかに時期差が認められる。

IV区においては、土壙4基、溝跡22条、建物跡4棟、井戸跡3基、土壙12基、不明遺構11基が検出された。溝はかなり埋まっていたが、土壙とともに調査以前に確認できたものである。調査の結果、溝については新旧関係があることが判明し、少なくとも2時期にわたることが確認されたが、それぞれ形態は基本的に箱築研を呈するものであり、平面形は南北あるいは東西にほぼ直角に曲がるものである。遺物は古い時期の溝の覆土中から貝殻とともに陶磁器片等が比較的まとまって出土している。

V区においては溝跡5条、井戸跡1基、土壙3基が検出された。溝についてはIV区の溝と同様の特徴を備え、方向も一致するものである。遺物は攪乱がかなり及んでいるが1号溝、2号溝を中心とし陶磁器類が出土している。V区においては遺構は南側を中心に検出されており北方に位置する松原堀之内に近い方には、目立った遺構は検出されていない。

本遺跡の時期については、出土遺物中に灰釉平碗や大窯で焼成されたと思われる擂鉢等があることから大略中世後半から近世に渡る期間が考えられよう。

IV 調査の経過

調査はまず重機による表土剥ぎから始まった。調査区の現状は畑及び陸田であり、調査開始時点でもまだ一部畑に作物があったために、表土剥ぎはⅡ区・Ⅲ区から行なうこととした。現場に重機が入ったのは7月20日であった。表土剥ぎを行なう間に発掘器材を現場に搬入した。28日には、Ⅲ区の遺構の確認作業に入った。まず溝と井戸等のプランが確認された。この間、グリッドの杭打ちを行なった。グリッドは、事業路線にそって10m方格に設定し、I区南側からV区北側へ向かって1～47、東から西にA～Dとし、1～Aグリッドのように呼称した。Ⅲ区は南側から順次遺構を掘り始めほとんどの遺構を掘り終わったのは9月の初旬である。その間、図面の作成、遺構の写真撮影を並行して行なった。

Ⅱ区は、Ⅲ区の調査開始からやや遅れて遺構の確認に入った。Ⅱ区では遺物もほとんどなく、検出された遺構も溝跡3条のみであった。全ての図面を作成し、写真の撮影が終わるのはⅢ区の調査より早く8月の下旬であった。

Ⅳ区の調査は人力で樹木を伐採することから始まった。Ⅱ区、Ⅲ区の図面の作成と並行して、伐採と運び出しを行なったが、繁茂する竹林にあとあとまで苦しめられた。地表の樹木の伐採が済んでようやく地形が現われたのは9月中旬を過ぎていた。この間台風18号の通過に伴いⅡ区、Ⅲ区に一面水が入ったため、安全対策を施すなどの措置をおわされた。Ⅳ区の伐採が済んだところで現地表面のコンタ測量を行ない、南側から順次表土剥ぎに入った。最初に検出されたのは30-Cグリッドで東西方向に走る1号溝である。東側の30-Bグリッドはローム面まで深く、他の遺構の存在を推定させたが調査の結果ながらに傾斜し2号溝に続くことが判明した。このようにして北側へ調査を進めていったが、特に2号土塁、4号土塁では竹根が密に張っていて表土剥ぎにかなりの時間をとられた。また調査の後半に入って3号、4号の各土塁下に3号溝が続くことが判明し、新たに4号土塁下から22号溝が、また2号土塁下から20号溝が検出された。4号土塁下の22号溝の覆土中には多量の貝殻とともに内耳土器片等の遺物が一括廃棄と考えられる状態で出土した。貝殻はオオタニシがほとんどで他に二枚貝、海産の巻貝が若干混じる程度であった。このあと航空写真撮影、測量を済ませ必要な図面を作成して調査を終えた。

V区の調査はⅣ区の図面の作成と並行して開始した。V区の南側、37、38グリッド部分は、最近まで墓地で工事路線にかかった部分を移転した所なので調査の対象からはずした。遺構は南寄りに溝跡、土壙が検出されたが、北側には小ピット以外めったな遺構は検出されなかった。南北側ではまばらに縄文土器片が検出されたが縄文時代の遺構は検出されなかった。

遺構の調査については、プラン確認のち半截→土層断面図作成→完掘→平面図作成の順で行い、遺物は全点プロットでとりあげ、適宜写真の撮影を行なった。また井戸、柱穴については、大きく半截した。溝については数か所ベルトを残し掘り込んだ。

写真撮影、図面作成等を済ませ全ての調査を終了したのは3月26日であった。

V 遺構と遺物

1 遺構

本遺跡は道路建設に伴なう調査のため、調査区が狭長である。そのため先述したように調査区を横断する道路によってⅠ区～Ⅴ区に分割して調査を行なった。以下の記述においても調査時点の区割に従って進める。

なお、本遺跡においては、以下に収録できた遺構の他に性格不明の遺構がⅠ区で69基、Ⅲ区で1基、Ⅳ区で11基検出されている。これらのものは基本的に平面形が長方形を呈し、底面は平坦で壁の立ち上がりはほぼ垂直である。深さは殆んどが耕作等の擾乱を受けて10～20cm程度の残存であるが、保存状態が良いⅣ区の2号土壙上で検出されたものは約80cmを計る。覆土は黒色でありしまりがないが中にはロームブロックを含むものもある。長軸の方向は南北方向を指すものと東西方向を指すものがあるが、いずれもその方向から主軸が大きく振れることはなくきれいに並ぶものである。遺物は通常殆んど含まないが希に内耳土器片や縄文土器片などを含むが大部分の遺物は埋没する過程での混入と考えられる。このほかに性格や年代のわかる遺物の出土はないが、本遺跡においてはⅠ区で近世に属すると考えられる建物跡の柱穴に上から重複していることから近世以降の所産であると考えられる。

a Ⅰ区（第4図）

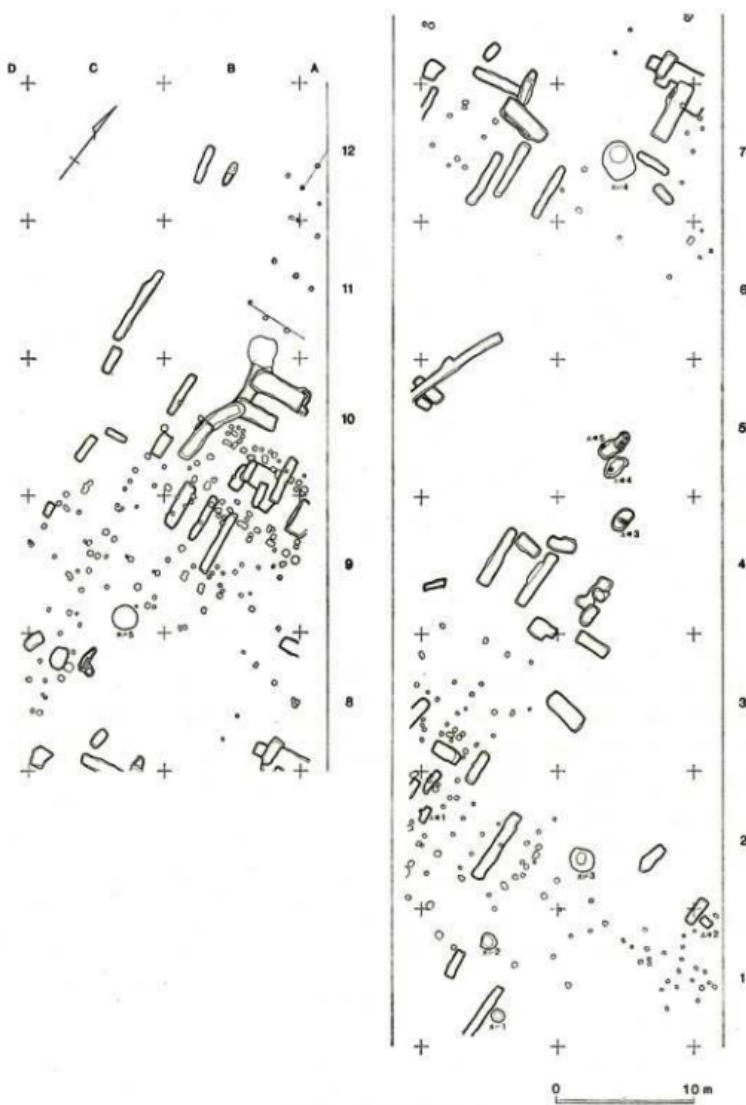
Ⅰ区で検出された遺構は掘立柱建物跡8棟、井戸跡5基、土壙5基、溝1条、柱穴列2である。遺物は出土数がきわめて少なく総数で46点のみであるが内容は碗、擂鉢などの陶器片と、いわゆるカワラケと呼ばれる土師質の皿や内耳土器の破片が主なものであり他に古鏡と縄文土器の破片が若干混じるが縄文時代に属する遺構は検出されなかった。

1号建物跡（第5図）

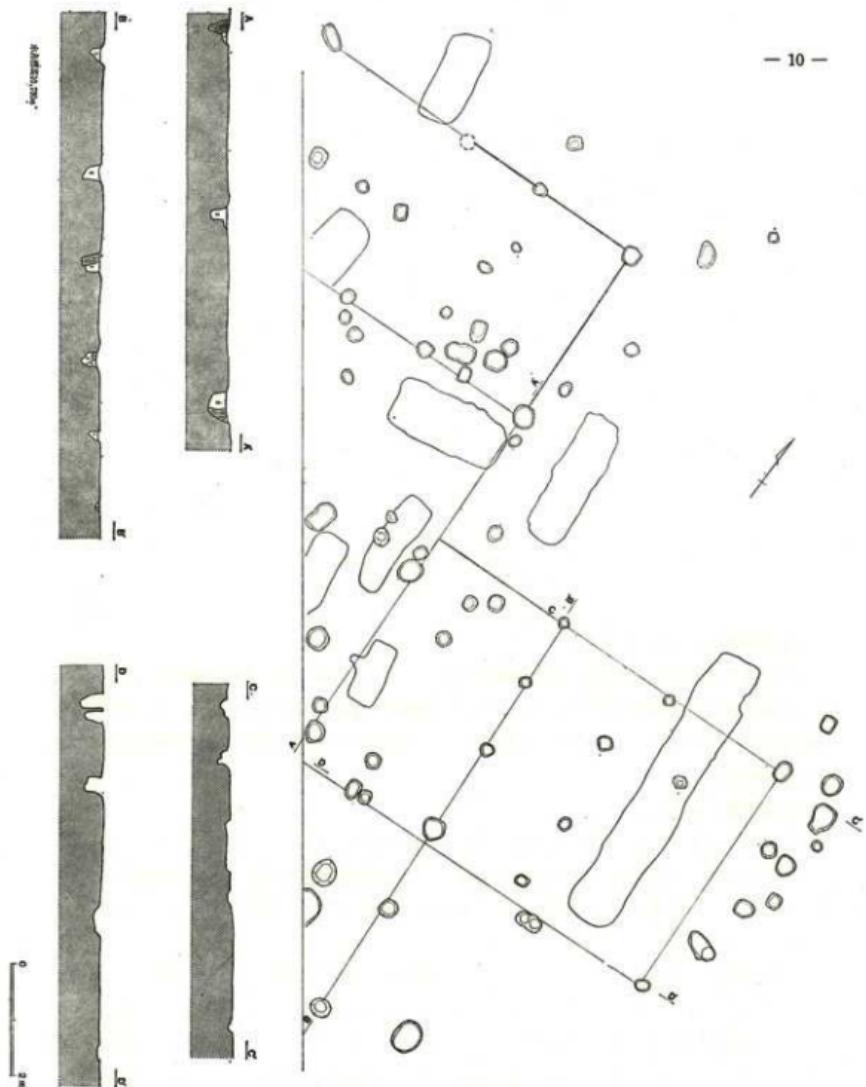
調査区南側において柱穴と考えられる多数のビット群が検出されたが、2C・D、3C・Dグリッドにおいて建物跡と考えられる柱穴の配置が認められる。約半分が調査区外になるため全体の規模は明らかではないが桁行5間以上、梁行5間以上である。柱穴は直径20cm～40cm程の円形で深さは30cm程である。柱穴間の距離は建物南側で1.5m・2.4m・2.4m、中央部で2.1m・1.8m・1.8m・1.3m・1.3mとなる。このような建物はその柱穴の配置から近世以降のものと考えられる。

2号建物跡（第6図）

調査区中央部7Cグリッドに単独で存在する。桁行2間・梁行1間の建物で柱間は桁行が1.8m 2.4mで梁行は約3mである。柱穴は直径25cm程で深さは20cm～30cmを計る。倉庫風の建物と考えられる。



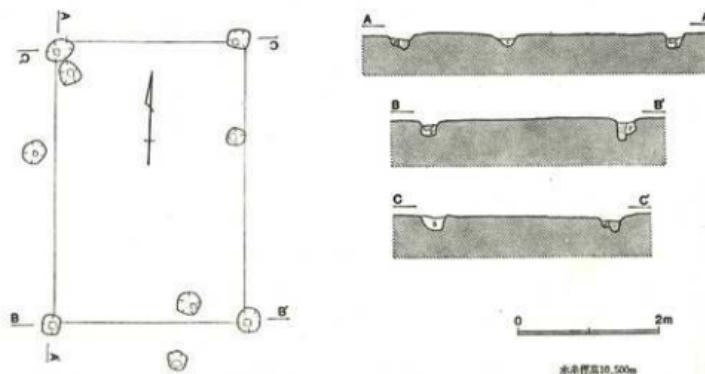
第4図 1区遺構配置図



第5図 1号建物跡実測図

3号建物跡（第7図）

2号建物から東に約13m離れて7A・Bグリッドに位置する。建物のコーナー部分がそれぞれ1間ずつ検出されたのみで大半は調査区外であるため全体の規模を明らかにすることはできなかった。柱穴は円形で直径30~50cm、深さ40~50cm程である。柱穴間の距離は南側が約1.7m西側が約1.8mで6尺が基本と考えられる。



第6図 2号建物跡実測図

4号建物跡（第7図）

調査区北半部に検出された柱穴群の西側で9Cグリッドに位置する。桁行2間梁行2間、の長方形の建物で柱間は建物南側で約2.1m・2.3m。東側で約1.8m・1.8mとなり桁行7尺、梁行6尺が基本となると考えられる。棟方向はほぼ東西に向き約15m程南東に位置する2号建物跡の棟方向とほぼ直角になる。

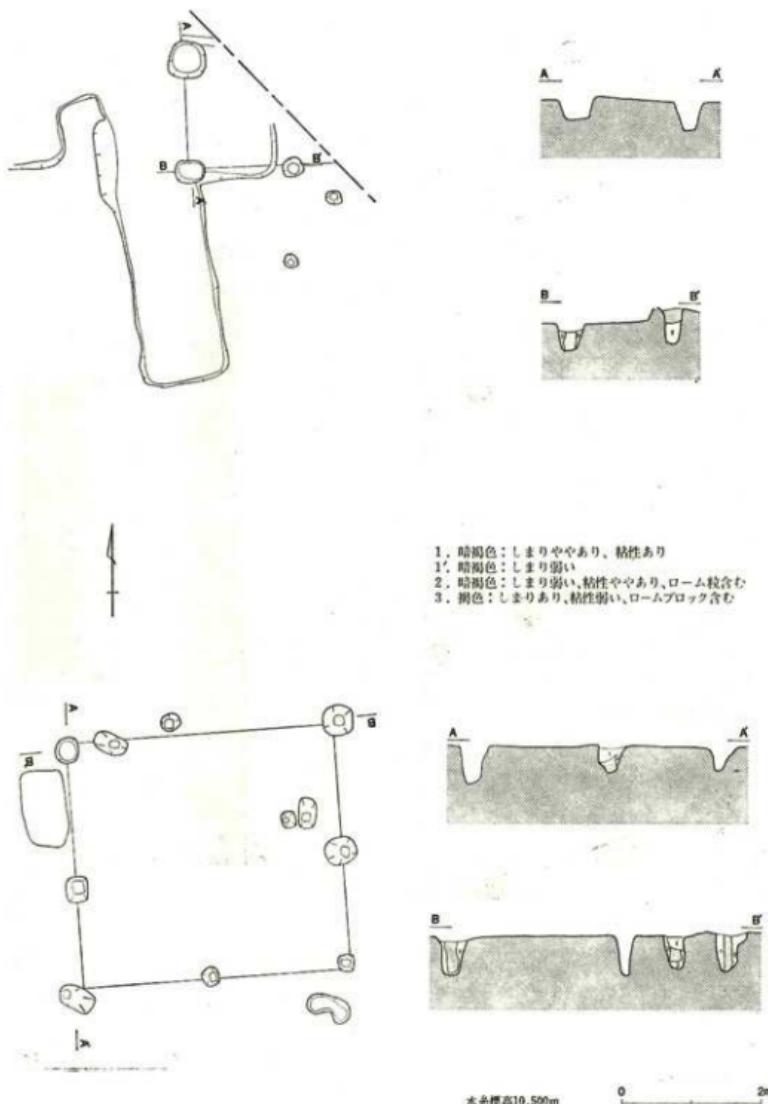
5号建物跡（第9図）

9B・C、10Bグリッドを中心には多数の柱穴が検出された。それぞれの柱穴の大きさにはばらつきがあり柱穴相互の重複もいくつか認められるが、この柱穴群の中でおよそ4棟の建物の存在が考えられる。1棟は前述の4号建物跡であり、他はここで記述する5号建物跡と後述する7号、8号建物跡である。

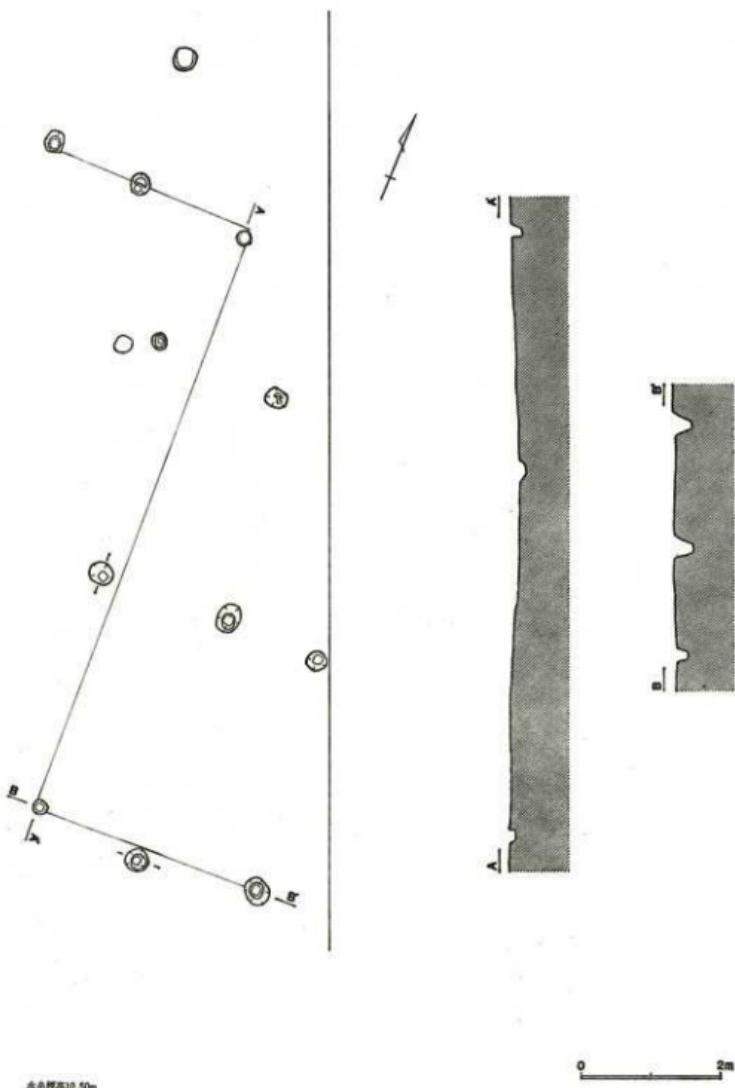
5号建物跡は9B・C、10B・Cグリッドに位置し柱穴の配置状況から1号建物跡と同じく近世における建物と考えられる。全体の規模はおよそ13m×10m程であるが一部調査区外にかかっている。柱穴の配置は複雑であるが一応第9図のように考えておきたい。柱穴の大きさは直径20cm程度のものから40cm程のものまであるが、要になると考へられる柱穴は比較的大きく太い柱を使っていたと考えられる。深さは30~50cm前後で覆土はロームブロックを多く含み比較的しまっている。柱穴間の距離は建物西側が約1.8m・2.1m・2.4m・2.4mとなるが北側では約1.5m・2.4m・2.1m・2.1m・1.2m・2.4mとなりやや不揃いであるが、近世の建築にみられる間取がほぼ成り立つものと考えられる。

6号建物跡（第8図）

11A・B、12A・Bグリッドにおいて検出された。5号建物跡から北に約8m程の位置にあたる。

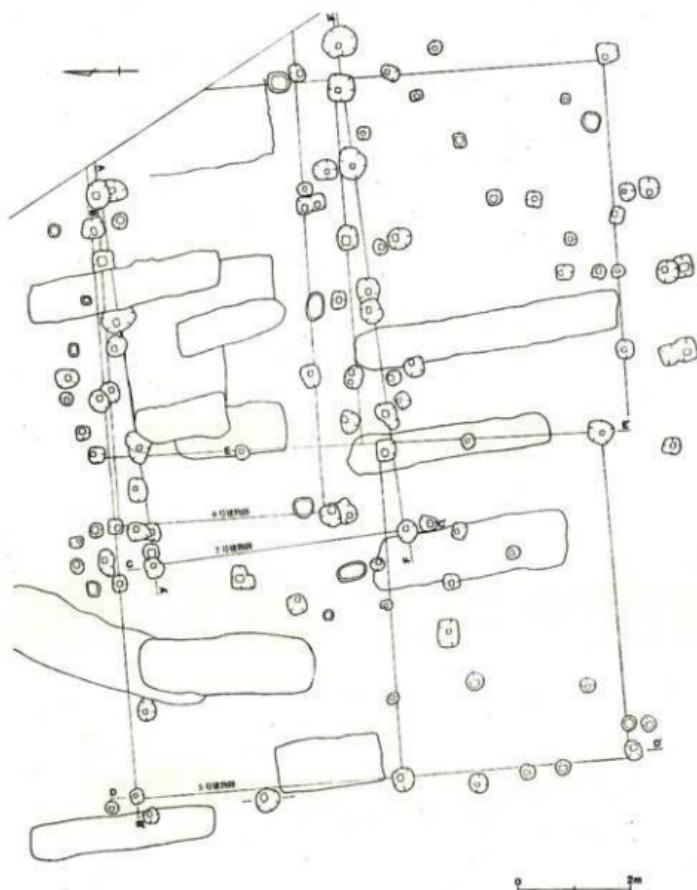


第7図 3号・4号建物跡実測図



水み深さ10.50m

第8図 6号建物跡実測図

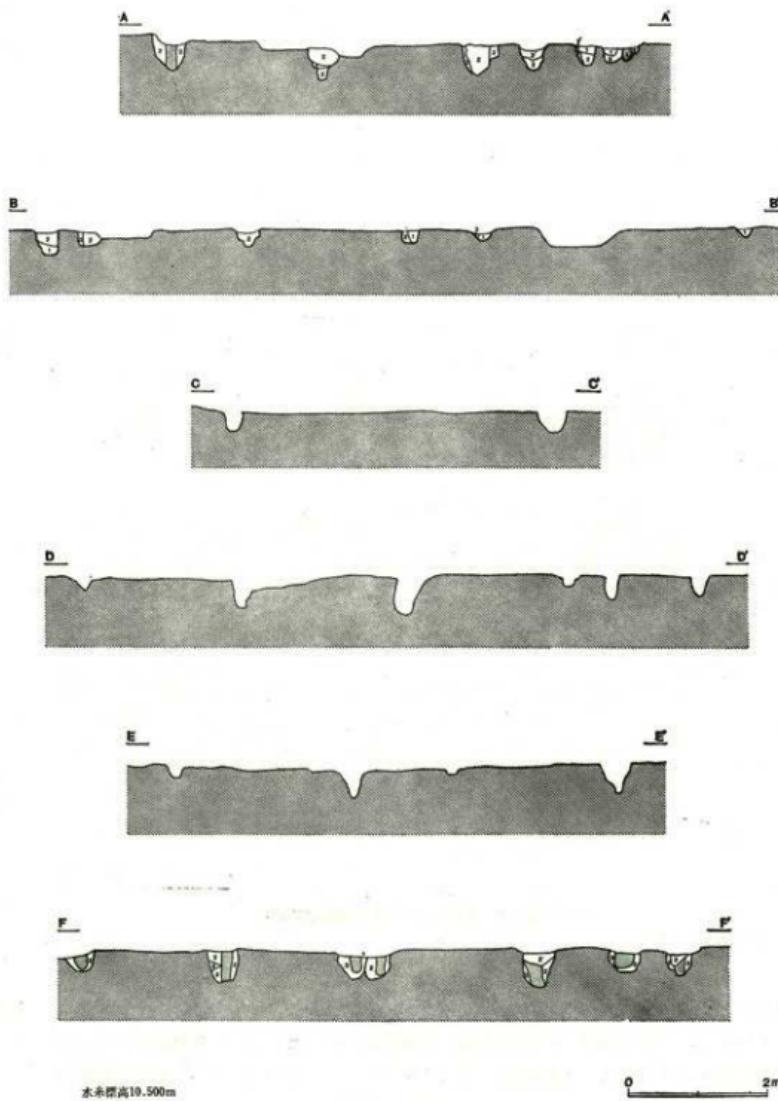


第9図 5号・7号・8号建物跡実測図

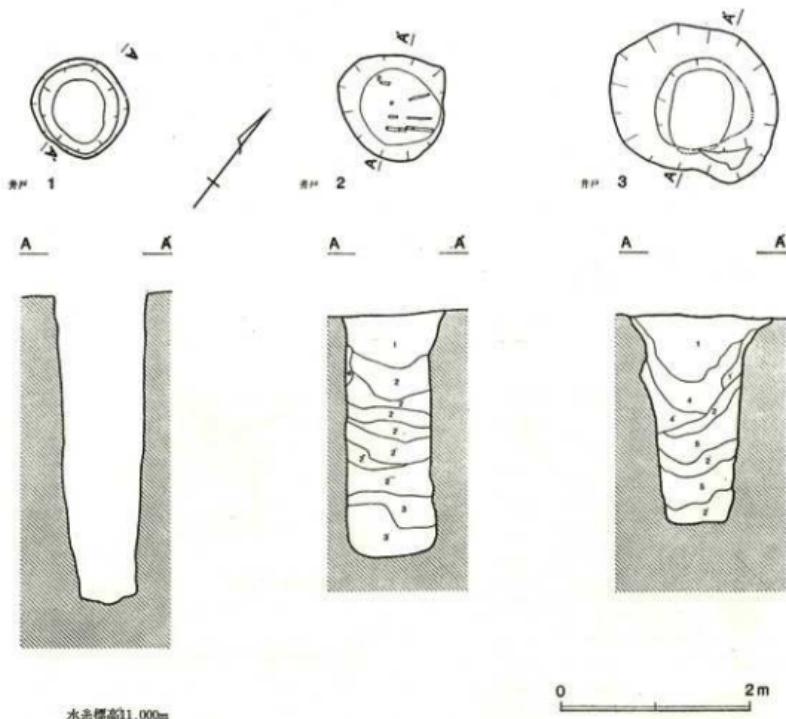
調査区外にかかるため全体の規模は不明であるが、東西2間以上南北4間以上である。柱穴は直径20~40cm、深さ15~30cm程度で柱穴間の距離は建物南側で約1.7m・1.8m、建物西側では約2m・2m・3.3m・3.5mである。本建物跡については柱穴のラインが若干ずれていて他の建物構造あるいは、2棟分とも考えられるがここでは一応図のように考えておきたい。

7号建物跡（第9図）

9A・B、10A・Bグリッドにおいて5号・8号建物跡と重複して検出された。東側が調査区外



第10圖 5号・7号・8号建物跡柱穴断面図



第11図 1号・2号・3号井戸跡実測図

にかかるため全体の規模は不明であるが桁行4間以上、梁行1間の東西棟の建物である。柱穴間の距離は桁行ではほぼ3m間隔、梁行で約3.6mである。柱穴の大きさは他の建物に較べて大きく直径約50cm、深さ40~50cm前後でしっかりしたものである。またいくつかの柱穴に重複が認められ本建物は一度建て替えられたことが考えられる。

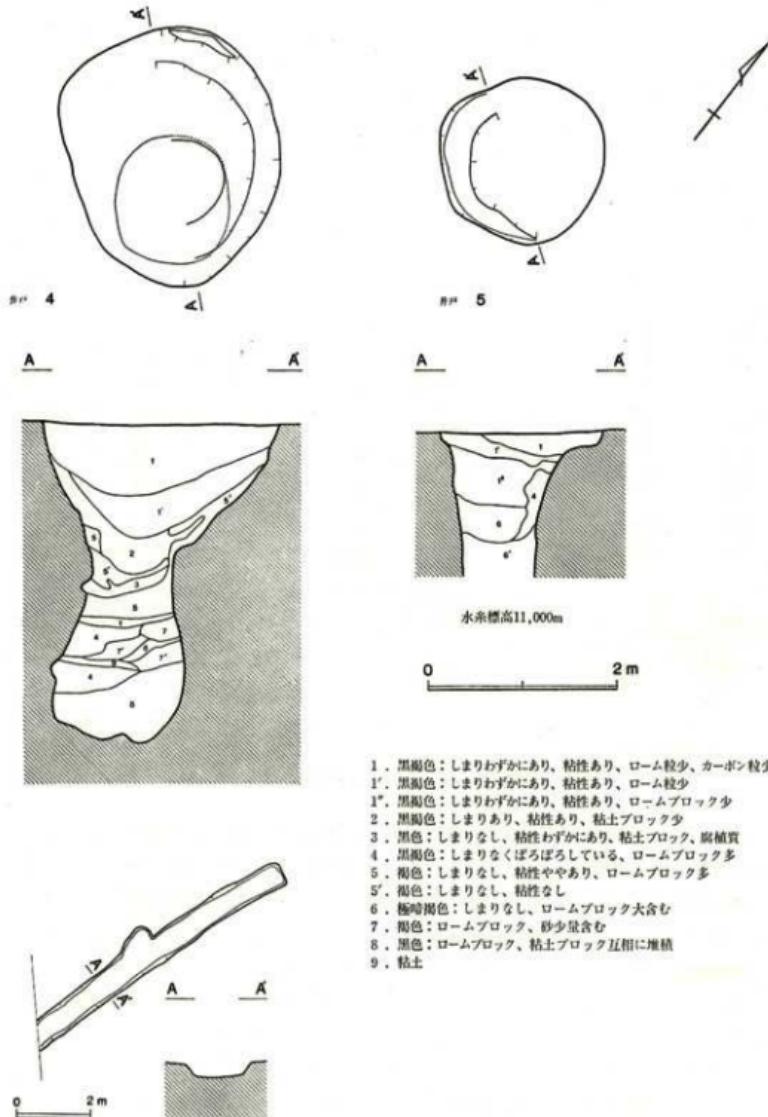
8号建物跡（第9図）

9A・B、10A・Bグリッドにおいて検出された。5号・7号建物跡と重複する。東側の一部が調査区外に出るが桁行3間、梁行1間の建物と考えられる。柱穴間の距離は建物南側で約2.4m・3m・2.4mで中間が広くなっている。西側は約3.6mである。

7号建物跡との新旧関係は不明であるが、7号、8号建物とも柱穴が他の建物跡のものに較べてしっかりしており、また考えられる構造などから比較的古い時期の遺構と考えられる。

柱穴列1（第4図）

6B、7Bグリッドで検出された。東側が調査区外に伸びる可能性がある。柱穴は3個で間隔が



第12図 4号5号井戸跡・溝跡実測図

5m・4mと広いが、5号建物跡を中心とする調査区中央部の柱穴群の南端に位置し、これより南は1号建物跡を中心とする柱穴群まで約30mの間に柱穴が認められないことから、屏などの何らかの区画的施設があったものと考えられる。

柱穴列 2 (第4図)

8A、Bグリッドで検出された。東西方向のもので東側が調査区外に伸びる可能性がある。検出された柱穴は3個で間隔が2m・2mである。5号建物跡の南辺の延長線上から約3mの位置にあり3号建物跡との関係も考えられる。

尚、この他にも1号建物跡の東側及び5号建物跡の南側にも柱穴群が認められる。配列は不規則なものであるが、方向がほぼ一致するので建物跡に伴う何らかの施設があったものと考えられる。

1号井戸跡 (第11図)

1Cグリッドで検出された。素掘りの井戸で平面形は直径1.08mの円形である。深さは3.3mで、底面がやや狭くなる形に掘り込んでいる。遺物は出土しなかった。

2号井戸跡 (第11図)

1Cグリッドで検出された。1号井戸跡から約5m北西に離れている。上面を掘った段階で大きく構造を半截した。平面形は一部崩れているが、直径1.2m程のほぼ円形である。深さは約2.55mで底面は平坦である。壁は検出面下約90cm程の所から垂直に掘り込まれ下方で一方の壁がやや膨らむが殆んど円筒状である。構築方法は素掘りで周辺においても上屋の存在を推定させるようなものは検出されなかった。

遺物は3層及び3'層から木の枝、桃の種子が出土している。他に繩文土器片が2片程検出されたが混入と思われる。

3号井戸跡 (第11図)

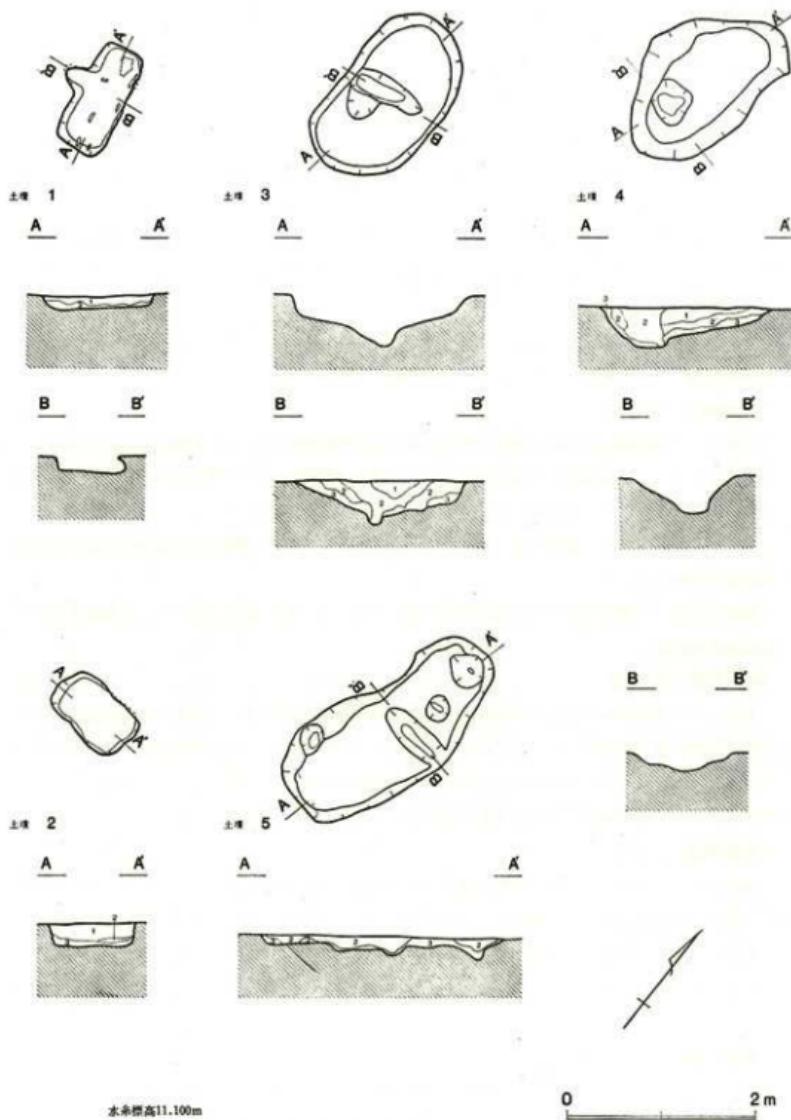
2Bグリッドで検出された。1号建物跡の東約3mの位置にあたる。これも大きく半截した。平面形は長軸約1.9m短軸約1.5mの梢円形で深さは約2.4mである。上面から約80cmのところですぼまり、やや径を減じながらほぼ平坦な底面に至る。壁は上面から1.1mのところでやや大きく凹む。遺物は覆土中から新窓永と思われる破片が出土している。

4号井戸跡 (第12図)

7Bグリッドで検出された。3号建物跡から南西に約5mの位置にあたる。これも大きく半截した。平面形は長軸約2.75m、短軸約2.3mの梢円形である。深さは約3.4mを計る。上面から約1.3m程の所でくびれたあと、下が袋状に広がる。壁は上面から1.7mと2.6m付近で、15cm程横に凹みを有するほか、上部の広がる部分に狭い平坦面をもつ。本井戸跡に付属するとみられる施設等は検出できなかった。

5号井戸跡 (第12図)

9Cグリッドで検出された。5号建物跡の南約6mに位置する。直径約1.7mの円形で上面から15cm程さがったところで段をもち径を約1mに減じて下に続く。これも大きく半截したが、調査中に降雨があり出し崩落の危険があるため深さ約1.6mのところで調査を打ち切った。調査時点での遺物の出土はなく、また本井戸跡に伴う施設等も検出されなかった。



第13図 土 壤 実 潜 図

溝（第12図）

6 C グリッドから 5 C、5 D グリッドにわたって検出された。西側で調査区外に伸びるが、検出された部分で長さ約3.2m、幅約0.3m程である。深さは0.15mで底面はほぼ平坦、壁も殆んど直線的に外傾するもので、断面形が所謂舟底形となる。

1号土壌（第13図）

2 C、D グリッドで検出された。ここでは他の土壌といっしょにして土壌として記述するが本来は火葬に関する遺構と思われる。平面形は隅丸長方形で長辺の西側が張り出す。長軸約1.2m 短軸約1.1mで、深さは約15cmを計る。張り出し部は西辺のはば中央で約20cm程張り出し最奥部はオーバーハングする。覆土は2層に分けられ、1層は褐色で多量のロームブロックを含みカーボン粒、焼土粒を多く含む。2層は黒褐色で焼土、カーボン粒とともに骨片を多量に含む。底面、壁面ともによく焼けている。他に遺物の出土はなかった。

2号土壌（第13図）

1 A グリッドで検出された。平面形は隅丸の長方形で長軸約1m、短軸約60cm、深さ約25cmである。底面はほぼ平坦で壁はやや凹凸があり、東側長辺の半分はオーバーハングする。遺物は出土しなかった。

3号土壌（第13図）

4 B グリッドで検出された。平面形は不整橢円形で長軸約1.9m、短軸約1.15mで深さは55cmである。底面は中央部で横長に窪み壁に向かってゆるやかに傾斜する。壁は約20cm程の立ち上がりをもつ。遺物は出土しなかった。

4号土壌（第13図）

5 B グリッドで検出された。5号土壌とわずかに10cmの距離である。平面形は乱れているが長軸2m、短軸1.4mで深さは50cmである。底面は南よりにピット状に窪みをもち、ゆるやかに壁に向う。壁は15cmの立ち上がりをもつ。

5号土壌（第13図）

5 B グリッドで検出された。4号土壌のすぐ北側に位置する。平面形は長軸約2.1m、短軸約1.2mの隅丸長方形である。深さは10cmから15cmで底面は凹凸がある。壁も小ピット状に窪みがあるが、南側の立ち上がりは約10cmである。

b. II区(第14図)

II区において検出された遺構は溝跡3条のみである。

遺物は陶器、擂鉢の小破片が数点出土したのみで図示できるものはない。

1号溝

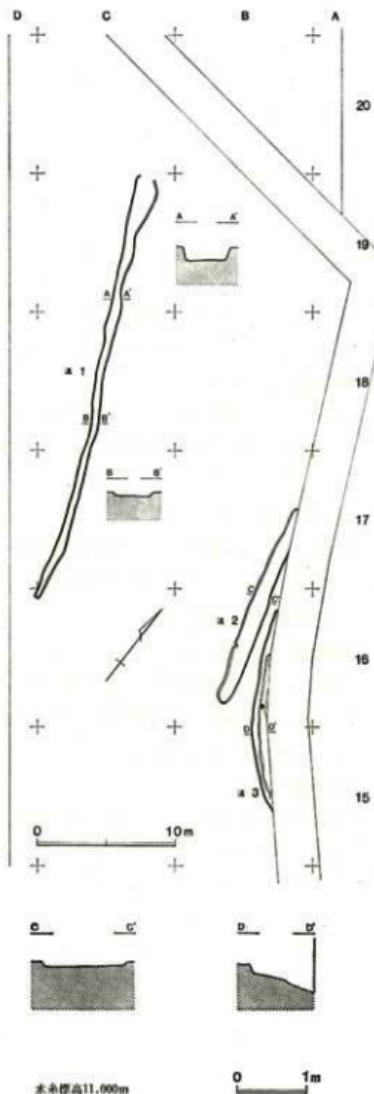
16Cグリッドから19Cグリッドにかけて検出された。長さは約31mで幅は平均約50cmである。底面はやや起伏があるが、ほぼ平坦で壁はまっすぐに立ちあがる。遺物は出土しなかった。

2号溝

16Bグリッドから17Bグリッドにかけて検出された。北側は道路の部分でわずかに壁の立ちあがりがみられるので、そこで終わるものと思われる。長さは約15m、幅は約1.1mである。断面は1号溝同様平坦な底からまっすぐに立ちあがる。遺物は陶器と擂鉢の細片が1点ずつ出土したのみである。

3号溝

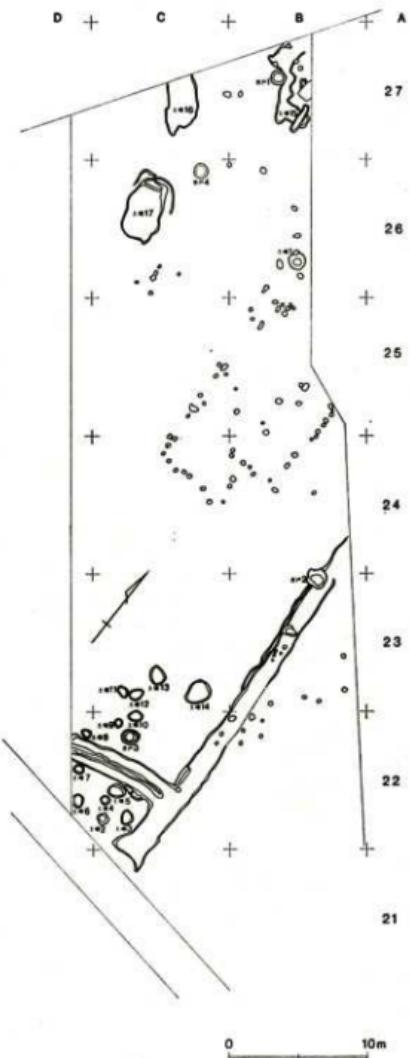
15Bグリッドから16Bグリッドにかけて検出された。半分道路の下にかかっているため全体の規模は不明であるが、弧を描くように道路下にもぐっている。検出された部分では深さ15cmのところでなだらかな平坦面をもち更に一段下って溝底にむかう。遺物は土器片が1点検出されたが、細片のため詳細は不明である。



水系標高11.000m

第14図 II区遺構配置図

c. III 区



第15図 III区遺構配置図

III区で検出された遺構は建物跡1棟、井戸跡4基、溝跡2条、土壙17基である。

遺物は総破片数で245点と少ないが殆んどが溝跡からの出土で、それも南側に集中している。遺物の種類は青磁片や板碑の破片。その他陶器片、古銭、内耳土器片などである。

建物跡（第17図）

24B・C・25B・C・26Bグリッドで検出された。柱穴は隅丸方形か円形が殆んどで直径は20cm～40cmである。深さは、深いもので60cmを計るが、30cm前後のものが一般的である。柱穴は全体的には南北方向及び東西方向に描い、建物としての配置をとるが、間尺は比較的の不規則で柱穴相互の対応関係もはっきりとしない。またいくつかの柱穴には重複も認められ建替えも考えられる。

1号井戸跡（第18図）

27Bグリッドで検出された。15号土壙に切られている。平面形は直徑1.1m程の円形である。検出面から1.7mのところで出土したため深さは不明である。壁は凹凸をもち下るに従って怪が狭くなる。遺物は板碑片、天目茶碗の口縁部破片および寛永通宝の破片が出士している。

2号井戸跡（第18図）

23B・24Bグリッドで検出された。1号溝跡と重複する。平面形は直徑1.3m程の不整円形である。検出面から1.3mで出土し崩落の危険があつたため完掘はできなかった。掘り込みは上面から70cm程のところで狭くなり、1.2m附近で最も狭くなったあと少しづつ下方に広がるようである。覆土は自然堆積の状況を示す。遺物は出土しなかった。

3号井戸跡（第18図）

22Cグリッドで検出された。重複関係はな

い。平面形は直径1.1m程の不整円形で、深さは検出面から約1.2mである。掘り込みは50cm程のところで狭くなつた後、殆んど垂直に掘り込まれる。底面は中央が低い皿状になる。覆土は自然堆積の状況を示す。遺物は出土しなかつた。

4号井戸跡（第18図）

26Cグリッドで検出された。平面形は直径約1.1mの円形である。深さは約1.9m程掘り下げたところで崩落の危険があり完掘できなかつたため不明である。掘り込みは検出面から30cmのところで狭くなり、それより下は壁に若干の凹凸をもちながら垂直に掘り込まれる。遺物は陶器の細片と繩文土器の破片が1点ずつ出土したが、埋没する過程での流れ込みと思われる。

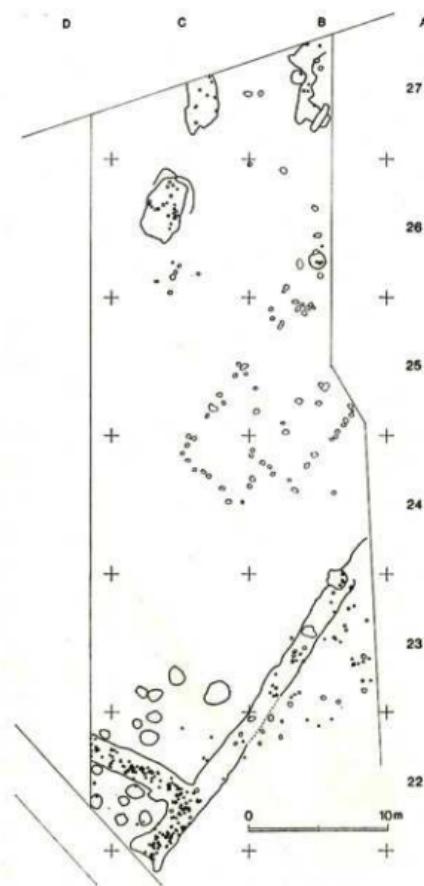
1号溝跡（第19図）

21Cグリッドから24Bグリッドにかけて検出された。北側の方が浅くなり調査区東側で一方の壁が消えるが保存状態が悪く、あるいは更に北に伸びるかもしれない。南側についても明瞭ではなかったが図のように掘れた。長さは約28mで幅は1.5mから2m程度である。深さは北側の浅い方で10cm程度南側で約45cmである。南端から北に約3mのところで2号溝が接続するが、新旧関係は確認されなかつた。遺物の

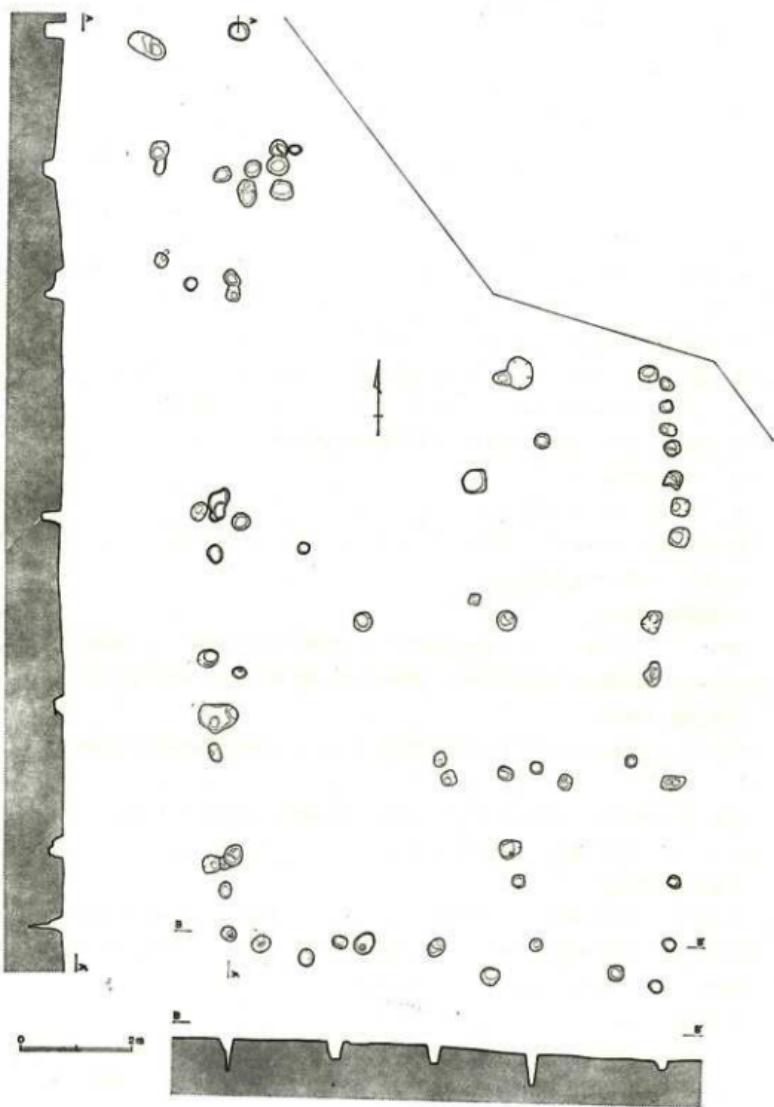
出土状況から判断すると2号溝と同時期に存在したものと考えられる。遺物は陶器、内耳土器、カワラケ、板碑片などが出土している。

2号溝跡（第19図）

22C、Dグリッドで検出された。東西に走る溝で西側は調査区外で道路の下に伸び東側は1号溝と接続する。検出された部分で長さは約7.3m、幅は1.8m前後である。深さは地表面から約1.1mで、断面は溝底中央が一段下がり両側にゆるく肩をもつて立ちあがる。遺物は小破片であるが天目茶



第16図 遺物分布図



第17図 建物跡実測図

碗、青磁片の他、カワラケ、内耳土器片、砥石、板碑片などが出土している。

土壤

Ⅲ区では17基の土壤が検出されたが、2種類に分類することができる。ひとつは調査区の北側に見られるもので大型で不整形のものである。他方は調査区の南側にまとめて検出されたもので小型ではほぼ円形の平面形をもつものである。このうち6号土壤から6枚の古銭とともに人骨が出土しており、明らかに墓壙であることから他のものについても同様に墓壙と考えられるが、ここでは一括して土壤として記述しておく。

尚各土壤の土層説明は以下の通りである。

- 1 層 暗褐色、1mm程の風化スコリアを一様に含み、褐色ブロックを多量に含む。しまり弱く粘性ややあり。
- 2 層 褐色、1~3cmのロームブロックを少量含む。しまりややあり、粘性弱い。
- 2' 層 褐色、1~3cmのロームブロックを多量に含む。粘性、しまりともにややあり。
- 3 層 褐色、1~3cmのロームブロックを多量に含む。しまりあり、粘性強い。
- 4 層 暗褐色、小ロームブロック含む、しまり粘性ともにあり。
- 4' 層 しまりやや弱い。
- 5 層 黒褐色、しまり強く粘性あり。
- 6 層 黒褐色、1~7cmのロームブロックを多く含む。しまり強く粘性弱い。
- 7 層 褐色、均質であるが粘性は弱い。

1号土壤（第20図）

22Bグリッドで検出された。平面形は直径1.2mの円形で深さは25cmである。底面はゆるやかに段をもつが、ほぼ滑らかな皿状を呈する。遺物は内耳土器片を2点ほど出土したのみである。

2号土壤（第20図）

22Cグリッドで検出された。平面形はやや崩れているが、長軸約80cm短軸約70cm程の椭円形である。

深さは約50cmで底面は西側にやや傾く。遺物は土器の細片が2片出土している。ひとつは内耳土器片であるが、他方は細片のため不明である。

3号土壤（第20図）

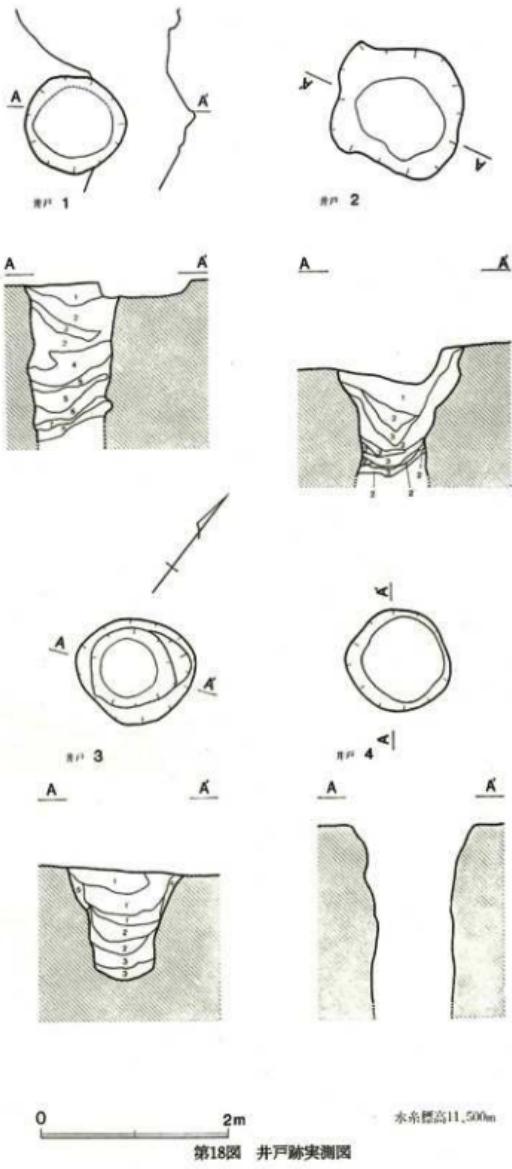
22Cグリッドで検出された。2号土壤から北東に約2mの距離にある。平面形は直径1m程の不整円形である。深さは約50cmで底面、壁ともに平坦である。遺物は古銭が6枚出土している。3枚は密着していてわからないが、他は全て永楽通宝である。

4号土壤（第20図）

22Cグリッドで検出された。2号土壤から約1.8mの位置にある。平面形は直径1.1mの円形で深さは約55cmである。上からまっすぐに掘り込んだあと、ゆるやかに底面に至る円筒状の掘り込みで底は皿状になる。遺物は出土しなかった。

5号土壤（第20図）

22Cグリッドで検出された。4号土壤のとなりで40cm程の距離にある。平面形は長軸1.6m 短



第18図 井戸跡実測図

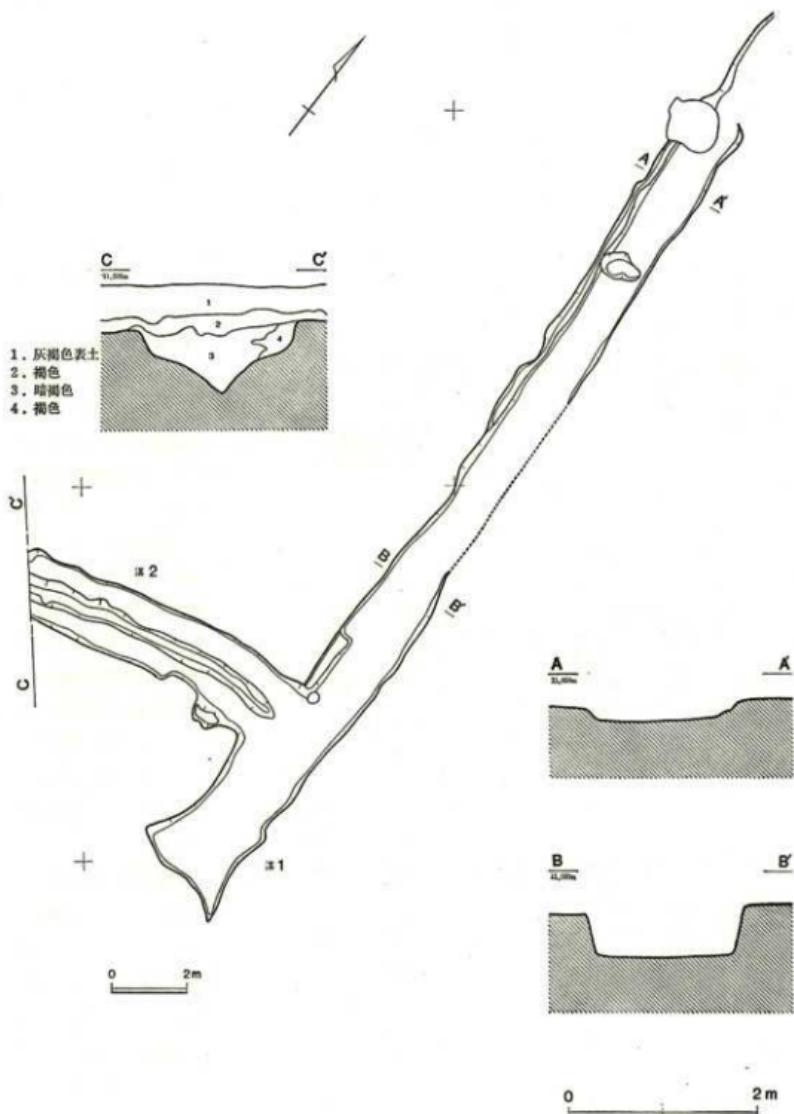
軸95cm程の梢円形を呈する。深さは約55cmで断面は舟底形である。壁、底面ともにほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

6号土壤（第20図）

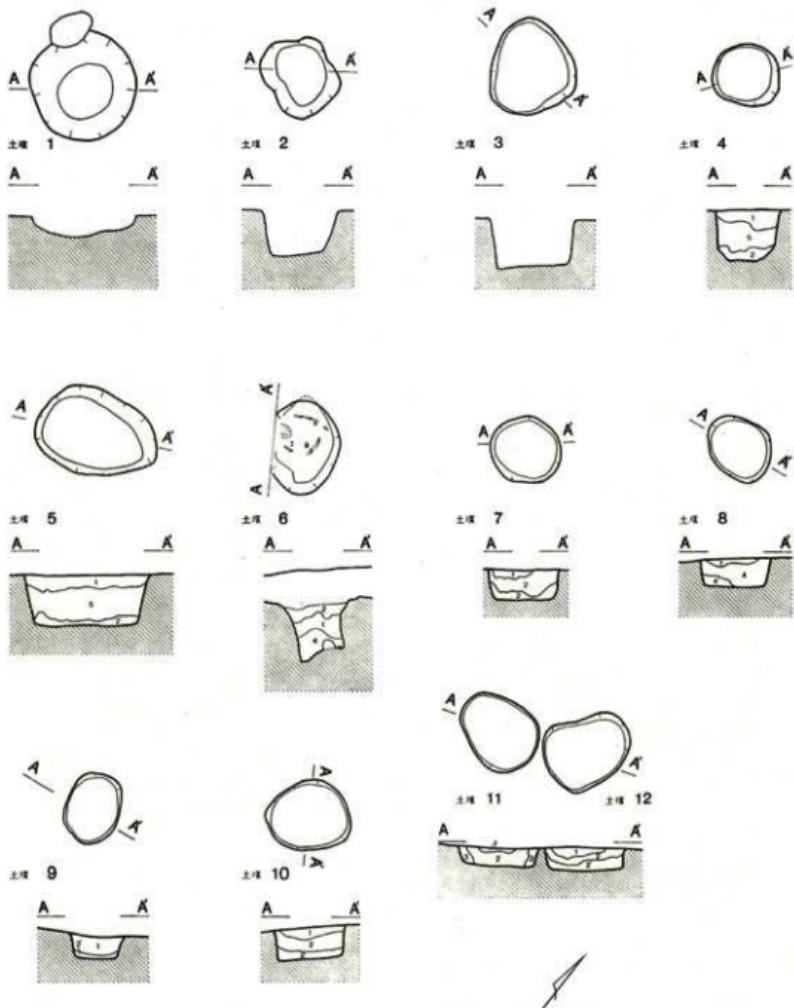
22Dグリッドで検出された。2号土壤から西に約2m、4号土壤からも約2mの位置にあたり、一部調査区外にかかる。平面形は長軸1m程の梢円形と考えられる。深さは約60cmで上がやや広がるが、ほぼ垂直に円筒状に掘り込んでいる。遺物は人骨およびカワラケと古銭が出土している。人骨は頭蓋がよく保存されていた。また覆土中には若干の炭化物も観察された。古銭は6枚出土した。うち2枚は密着しているため銭種はわからぬが、他は全て寛永通宝である。

7号土壤（第20図）

22Dグリッドで検出された。6号土壤から2m程の位置で2号溝のすぐ南側である。平面形は直径80cm程の円形で深さは約30cmである。底面は平坦で壁もほぼ垂直の円筒状の掘り込みである。遺物は出土しなかった。



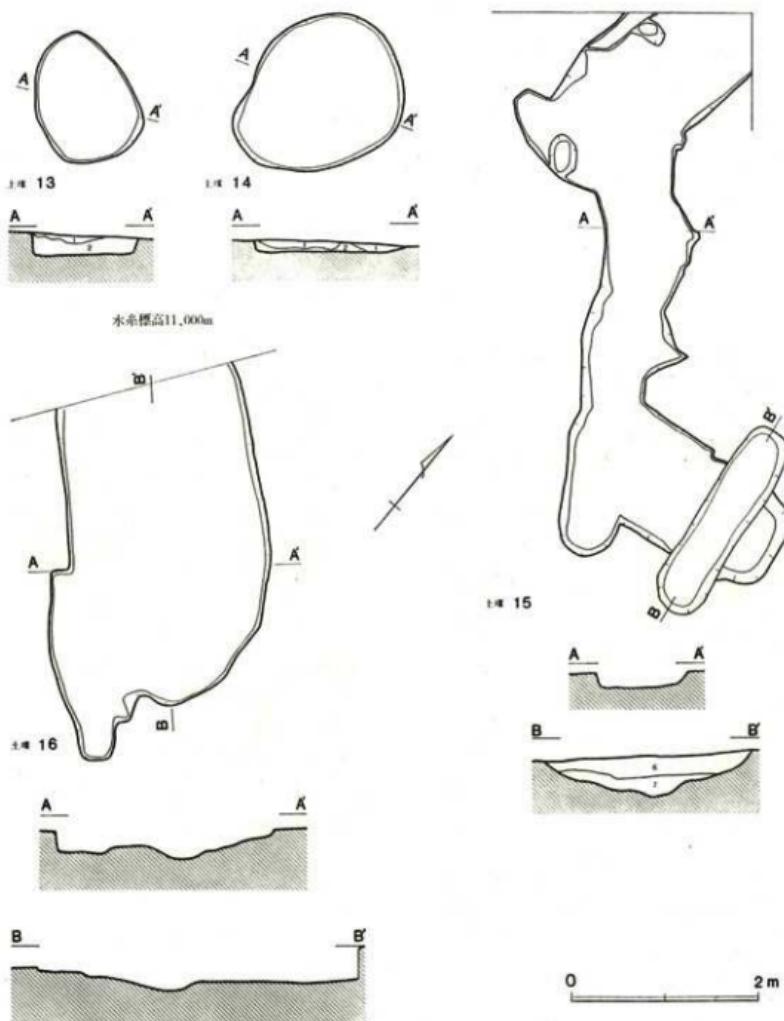
第19図 考跡実測図



水系標高11,000ft

0 2m

第20図 土 壤 実 測 図



第21図 土 壤 実 測 図

8号土壤（第20図）

22Dグリッドで検出された。2号溝を狭んで7号土壤と約2.6mの距離にある。平面形は長軸80cm短軸60cm程の楕円形である。深さは約30cmで断面は舟底形を呈する。底面は平坦で壁もきれいに掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

9号土壤（第20図）

22Cグリッドで検出された。8号土壤から北東に約2mの位置にある。平面形は長軸約75cm短軸約60cmの楕円形で、深さは25cm程である。掘り込みは円筒状で底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

10号土壤（第20図）

22Cグリッドで検出された。9号土壤の東1m程の位置にある。平面形は長軸約90cm短軸約70cmの楕円形で深さは約35cmである。底面は平坦で壁もほぼ垂直に立ち上がる円筒状の掘り込みである。遺物は出土しなかった。

11号土壤（第20図）

23Cグリッドで検出された。10号土壤から北西に約2mの位置にあたり12号土壤と殆んど接する。平面形は長軸1m短軸80cmの楕円形で深さは20cmである。底面はほぼ平坦で断面は舟底形を呈する。遺物は出土しなかった。

12号土壤（第20図）

23Cグリッドで検出された。平面形は長軸約1m短軸約70cmの楕円形で深さは約25cmである。底面は平坦で断面は舟底形を呈する。遺物は出土しなかった。

13号土壤（第21図）

23Cグリッドで検出された。12号土壤から北に約2m程離れている。平面形は長軸約1.4m短軸約1mの楕円形である。深さは25cmを計る。底面、壁とともに平坦で断面は舟底形である。遺物は出土しなかった。

14号土壤（第21図）

23Cグリッドで検出された。13号土壤から東に約2mの間隔をおく。平面形は南側が乱れているが、直径約1.5m程の円形と考えられる。深さは約15cmである。底面はほぼ平坦で壁は西側はほぼ垂直であるが、東側は比較的ゆるく立ち上がる。遺物は陶器の細片が一片出土したのみである。

15号土壤（第21図）

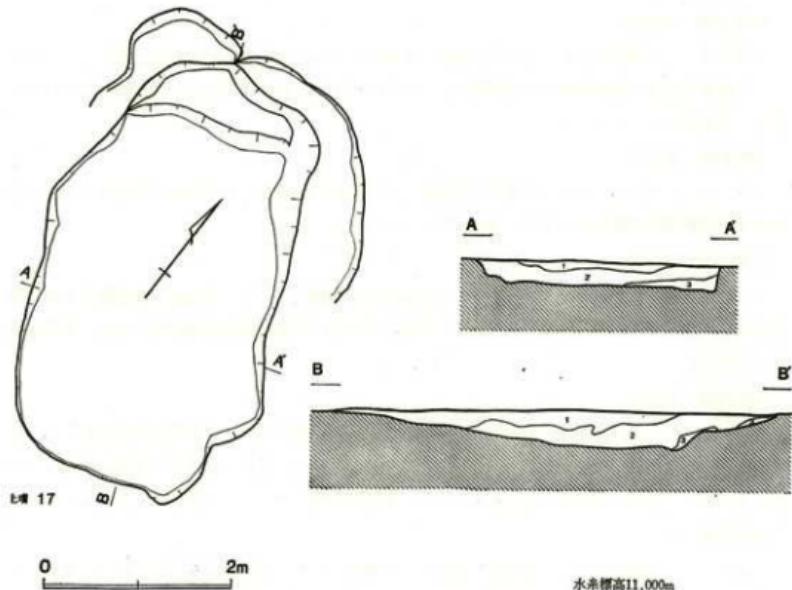
27Bグリッドで検出された。平面形はきわめて不規則である。北側が調査区外に伸び、南側では性格不明の遺構に切られ、中央部で1号井戸跡を切っている。遺物は合計8点程出土しているが、陶器、カワラケ、内耳土器の細片である。

16号土壤（第21図）

27Cグリッドで検出された。北側が東北新幹線の路線内にかかる。15号土壤から約6mの位置にあたる。南側の隅が擾乱を受けているが、検出された部分で長さ約3.5m幅約2.2mを計る。深さは中央部で約30cm、壁際で5~10cmである。底面は中央部がやや窪みわずかに凹凸をもつ。遺物は合計20片程の出土であり染付、内耳土器の細片である。

17号土壙（第22図）

26Cグリッドで検出された。16号土壙から南に約3m離れている。平面形は長さ4.7m幅2.6m程の不整形で北側に段をもつ。遺物は合計22点程出土したが、内容は陶器、染付、カワラケ、内耳土器片などである。



第22図 土壙実測図

d. IV 区

IV区で検出された遺構は土塁4基、建物跡4棟、井戸跡3基、溝跡22条、土壌14基である。IV区は閑戸足利遺跡の中において中心的位置を占めるものであり、特に4基の土塁及びそれに伴なう溝跡は軸方向をほぼ南北及び東西にとり、いわゆる樹形状をなすものであり、その計画的な構築に注意される必要がある。

特に本区においては調査以前の地形において土塁と溝が確認できるほど遺存状態が良かった。第23図に示すように調査開始で計測した地形図でもわかるように1号、2号、3号、4号の各土塁が遺存し、4号溝も明瞭に識別できる。このうち2号土塁についてはその西側に最近まで民家があったこともあり、西側と南側が原状をやや崩している。また調査以前は竹林になっていたこともあり、上面もかなり荒れているが全体のプランは捉えられるものである。

出土した遺物は舶載品の青磁、天目茶碗その他陶磁器、内耳土器片等がある。特に3号溝及び22号溝に集中して出土が認められ、一括廃棄の様相が窺われる。

1号土塁（第23図）

29C、Dグリッドに存在する。東西方向に伸びる土塁で東は東北新幹線によって破壊されている。調査区内に残存するのはわずかに5m程で西側の林の中に10数m伸びるのが地表の観察で確認できる。周井との比高差は約30cmで土層は販薬などの跡はみられず比較的の弱い暗褐色土1層である。

2号土塁（第23図）

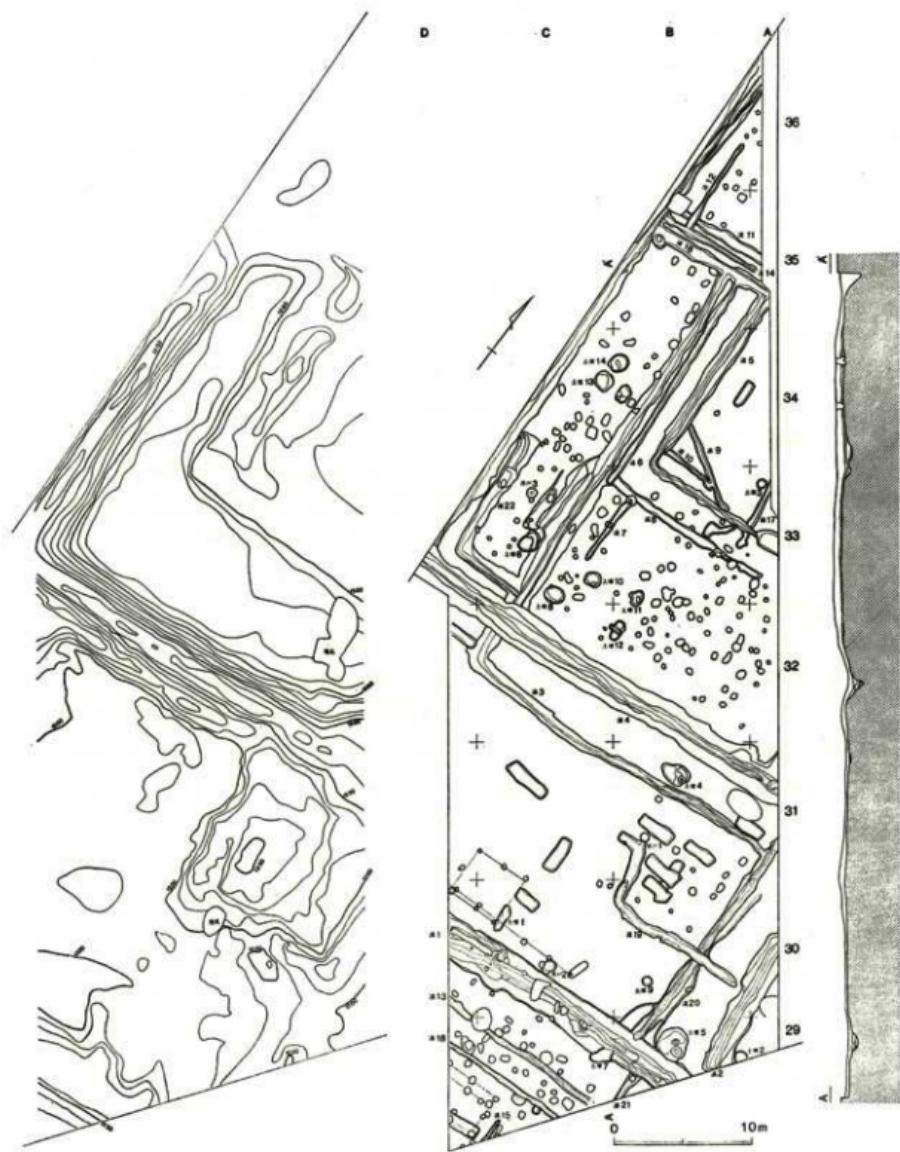
30Bグリッドを中心として存在する。調査以前は最も竹が繁茂していた所で竹根によってかなり荒れておりかつ最近まで西側に民家があったこともあり南側と西側が原形を変えているが、平面形は約15m×13mの長方形と考えられる。周囲との比高差は約50cm程で土層は1号土塁と同じく暗褐色土1層でローム面まで竹根が入り込んでいる。遺構はごく最近まで使用されていた井戸跡及びそれに附隨する溝跡各1性格不明の遺構5基とビットが数基検出されているのみである。

3号土塁（第23図）

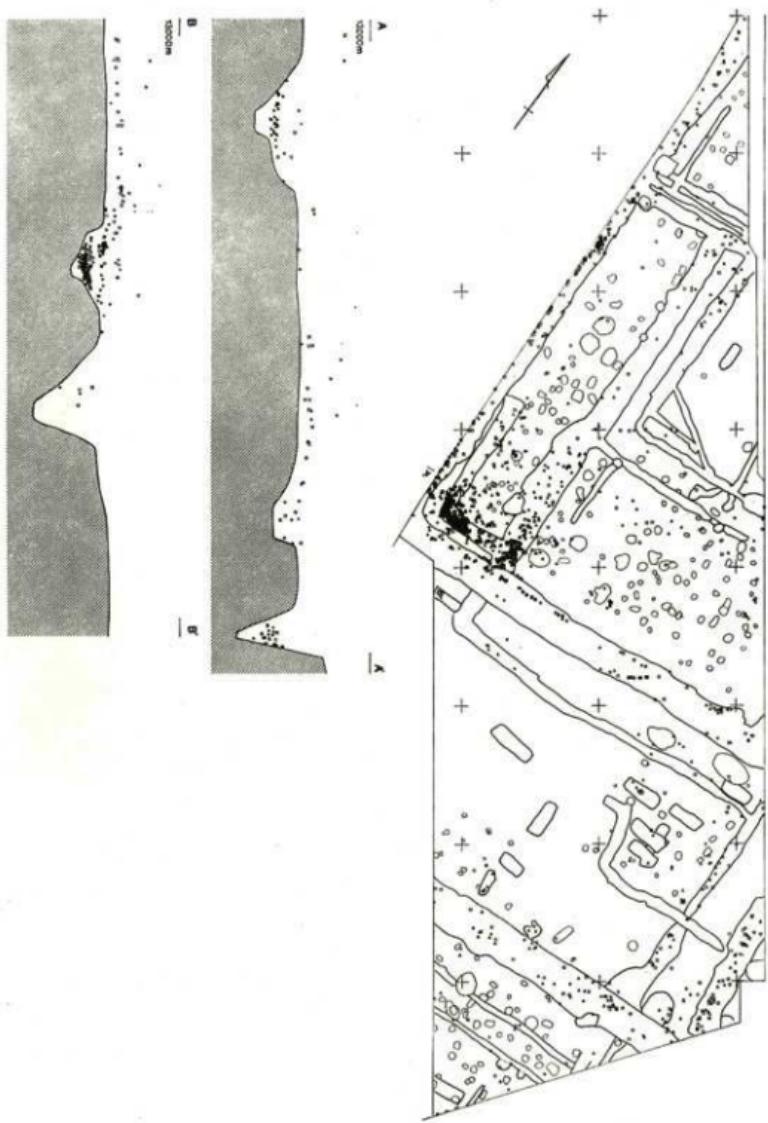
31Cグリッドを中心として東西に伸びる馬背状の土塁である。東側は2号土塁に接続し西側は調査区外に広がる。長さは調査区内で約20mであり、周囲との比高差は30~40cm程で調査以前は植木が並べて植えられていた所である。覆土は暗褐色土1層で土塁上には遺構は検出されなかった。

4号土塁（第23図）

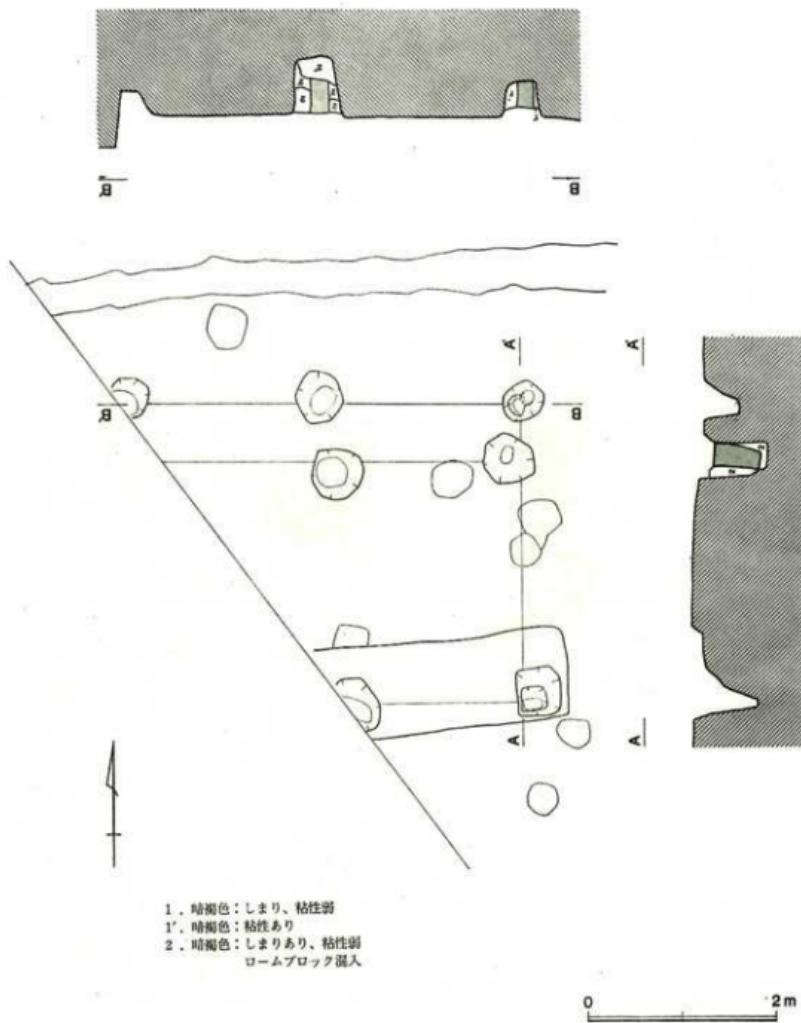
31Aグリッドから35Bグリッドまで直角に曲がっている。規模は東西方向で約19m、幅9m、南北方向で長さ約21m、幅5mである。外側に巡る4号溝との比高差は調査以前で約1mあり調査の結果溝底との比高差は約2.2mである。検出された遺構は建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡一条土塁7基、その他ビットがある。土層は2層確認できた。1層はしまりの弱い暗褐色土で木根などの擾乱をかなり受けている。2層は黒褐色土で炭化物を少量含み部分的にみられ層厚は厚いところで5cm程である。



第23図 IV区全測図



第24図 遺物分布図



水系標高12,000m

第25図 1号建物跡実測図

1号建物跡（第25図）

29C、Dグリッドで検出された。1号土壌の表土を剥いた所で検出された東西棟の建物である。南側が調査区外になるため全体の規模は不明であるが、東西2間以上南北1間の建物で、北側に約60cmの廊下状の施設をもつと考えられる。柱穴間の距離は梁行で2.9m桁行で2.1m程度9尺、7尺が基本と考えられる。柱穴は直径50cm内外の円形であるが一本だけ東南隅のものは方形を呈する。深さは40cmから90cm程のものまであるが、柱痕がしっかり残っており径20cm内外の柱であったと考えられる。

2号建物跡（第26図）

30C、D、31C、Dグリッドにおいて検出された。1号土壌に切られ、1号柱穴列と重複するが新旧関係は不明である。建物規模は桁行2間、梁行2間であるが、東側の中間には柱穴が検出されなかった。柱穴間の距離は桁行で1.8m・2.1mで6尺、7尺、梁行で1.8m・1.8mで6尺、6尺となる。柱穴は平面形が直径30cmから40cmの円形のものと一辺30cm程の方形のものと2種類見うけられる。深さは30cmから60cm程である。

3号建物跡（第27図）

32A、B、33Bグリッドにかけて検出された。4号土壌の表土を除去した段階で確認した。4号土壌上には竹根とともにかなりの数のビットが検出され他にも建物が存在する可能性があるが、調査時点においては、はっきりした建物の存在は確認できなかった。3号建物跡は北東の隅が調査区外になるが桁行3間、梁行2間の東西棟の建物と考えられる。柱穴間の距離は桁行でおよそ1.8m・2.1m・1.8m、梁行で1.8m・1.8mと考えられる。柱穴は円形で直径30cmから50cm程で深さは40cmから60cmのしっかりしたものである。

4号建物跡（第28図）

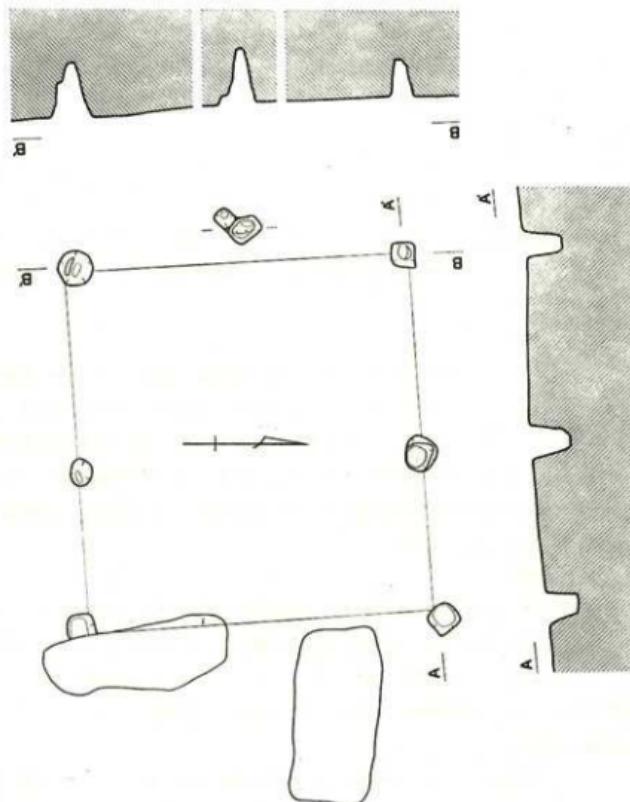
35B、36A、Bグリッドにかけて検出された。北東部の大半が調査区外になるため全体の規模は不明である。また、そのために柱穴の配置に若干不自然なところも認められるが、一応第28図のように大きく考えておきたい。柱穴間の距離は西側で1.8m・2.7m・1.8m南側で約1.5mである。柱穴は基本的に隅丸方形で一辺約30cmから40cmで深さは15cmから30cm程である。

1号柱穴列（第23図）

30C、Dグリッドで検出された。南側に平行して1号溝が東西に走り2号建物跡及び1号土壌と重複している。検出された柱穴は6基分であるが、1基は1号土壌に完全に切られている。2号建物跡との新旧関係は不明である。また西側は調査区外に伸びると考えられる。柱穴間の距離は東側から2.1m・2.1m・(2.1)m・(2.1)m・2.1mで7尺等間である。柱穴は丸味をおびた隅丸方形で一辺が約40cm前後で深さは約20cm前後である。

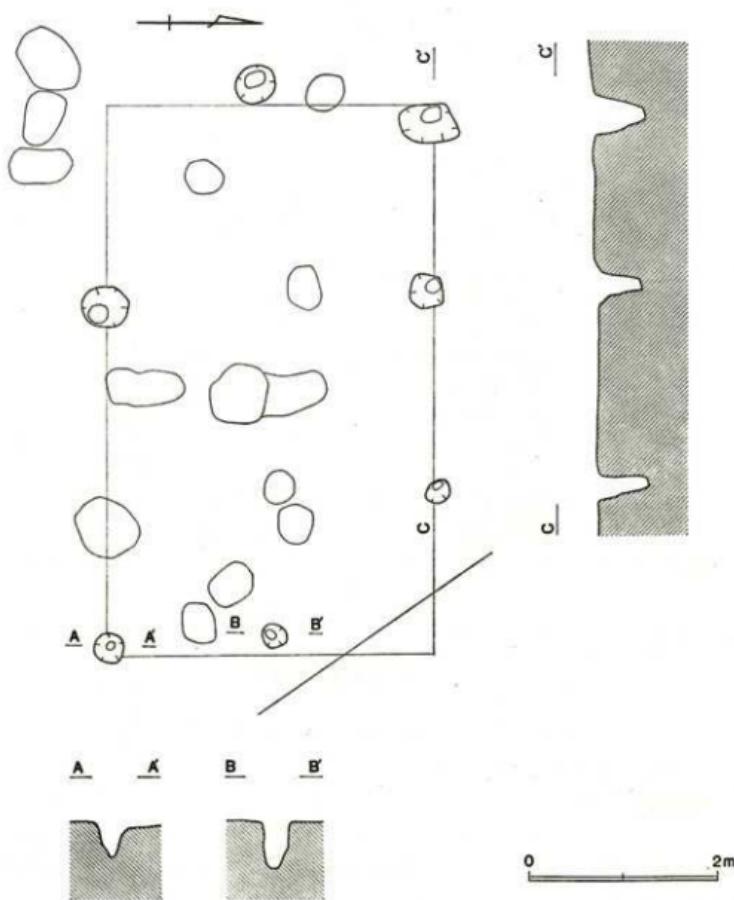
2号柱穴列（第23図）

33A、Bグリッドで4号土壌北辺に沿う形で存在する。検出された柱穴は4基で東側は調査区外に伸び1号柱穴列と同じくほぼ東西に走る。柱穴間の距離は西側から3.3m・3.3m・3.3mと11尺等間である。柱穴は30cm×40cm程の隅丸長方形で深さは西側が浅く約10cm、東側は40cm程である。このような柱穴列が確認できたのはこの部分だけであり、4号土壌の南辺及び34Bグリッドを中心と



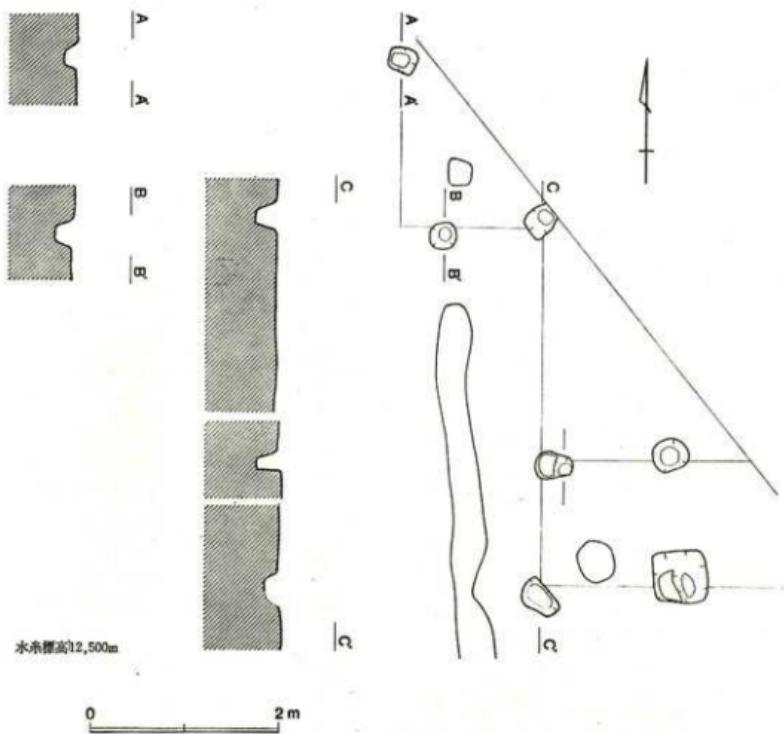
水系標高12,000m

第26圖 2号建物跡実測図



水系標高12,500m

第27圖 3號建物跡實測圖



第28図 4号建物跡実測図

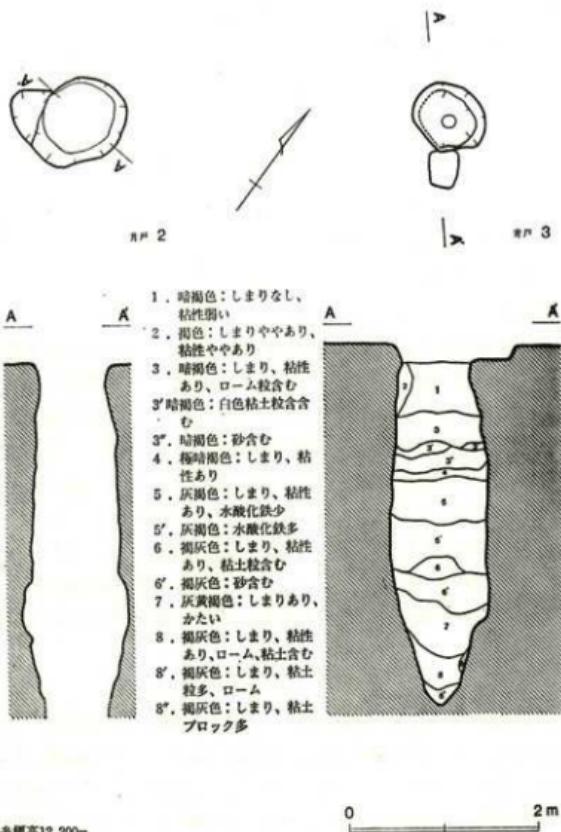
する東辺にもいくつかのピットが存在し柱穴列あるいは建物の存在したことを推定させるが、明瞭な形では確認できなかった。

1号井戸跡（第29図）

31Bグリッドの2号土壠上に存在する。この井戸跡は戦後に掘られたもので、ここに居住していた松井氏が掘られたものであるが、上部に直径60cm深さ80cmの土管状のものを掘えてある以外はこの地域で一般的に見られる素掘りの技術をもつものである。

2号井戸跡（第29図）

30Cグリッドで検出された。1号柱穴列と重複しそれより新しい。平面形は西側と南側が崩れているが直径90cm程の円形である。深さは約3.6m程まで掘ったが、崩落の危険があるため調査を打ち切った。掘り込みは深さ20cmのところが最も狭くなり径70cm程である。以下は徐々に径を増し深さ2.2mのところから広がって直径1.1m程の袋状になりまた徐々に径を減じて行く。遺物は木製の椀とともに木の枝が出土しているが、椀の特徴から年代については明治以降のものであると考えら



第29図 井戸跡水測図

九百。

3号共巨跡（第29図）

33Cグリッドで検出された。平面形は長軸約80cm短軸約70cmの梢円形で深さは約3.9mである。掘り込みは検出面から下方に広がるが特に南東面がオーバーハングする。最大径は深さ2.7m付近で約1mであるが、その下方3mのところで径を減じやや尖底気味の底面へ続く。遺物は7点の出土で漆付片、陶器、擂鉢、内耳土器片等である。

1号溝跡（第30図）

29B、C、30C、Dの各グリッドにわたって検出された。1号土器から北に約6mの距離をおいて平行に走る東西方向の溝である。東は東北新幹線用地内に、西側は調査区外に伸びる。検出され

た部分で長さ約19.3mを計り、幅は2.2mから3mである。深さは約80cm程で断面は基本的に箱薬研の形をとるが、南側は帯状に一段平坦部をもち、北側も調査区西端から約1.7mにわたって深さ30cm程の溝状に掘り込まれる。遺物は覆土中より陶磁器、擂鉢、内耳土器等の破片が出土している。

2号溝跡（第31図）

29A、B、30A、Bグリッドにわたって検出された。1号溝とほぼ直行し2号土壘のすぐ東側を走る南北方向の溝である。南は上面が東北新幹線用地内にわずかにかかり北側は調査区外に伸びる。検出された部分で長さ約10.2m、幅約2mで深さは約1mであるが、2号土壘と溝底との比高差は約1.5mである。断面は箱薬研の形を示し2号土壘際1段に平坦面をもつ。遺物は覆土中より陶磁器、内耳土器片、砥石等が出土している。

3号溝跡（第32図）

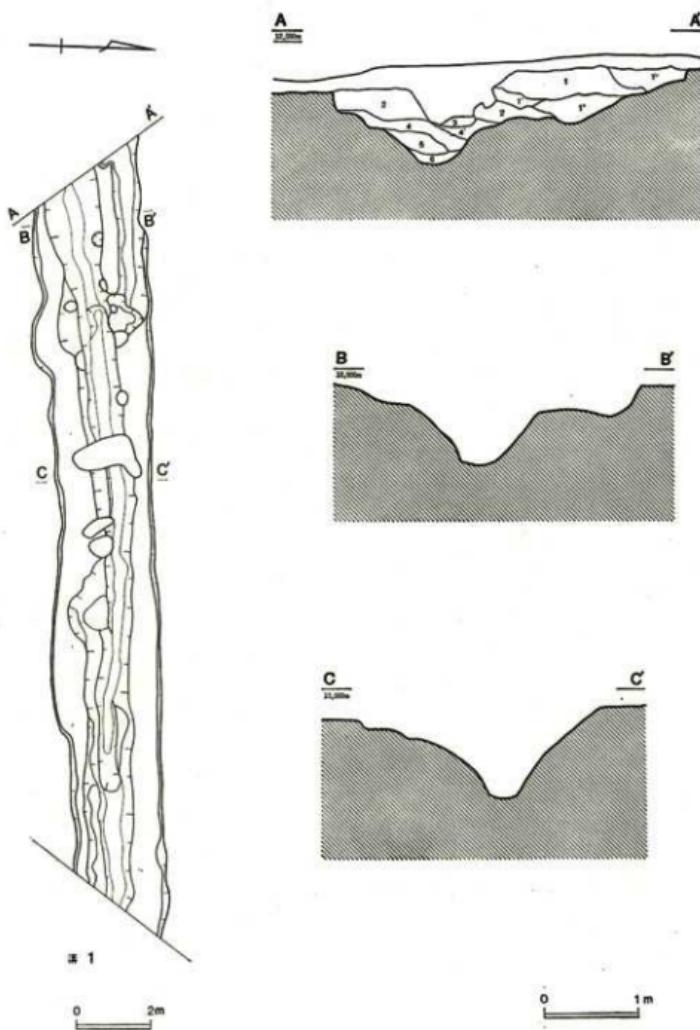
31Aグリッドから西に伸び32Cグリッド西端で北に曲り35Bグリッド中央まで伸びる溝で、東端は20号溝に接続し北端は16号溝に接続する。また検出した段階では4号溝跡とともに3号土壘に平行して走る溝跡と考えていたが、調査の進展に伴なって2号、3号、4号の各土壘の下に統一していることが判明した。また32Cグリッドにおいて4号溝にも切られている。長さは31グリッドから32グリッドまでの東西に伸びる部分で約25.5mそこから35Bグリッドまで南北に伸びる部分が約32.5mである。幅は中央部の最も広いところで約2.5m、20号溝に接続する最も狭いところで約20cmである。深さは南北方向に伸びる部分が東西方向より深く検出面から約50cm前後で、浅い所では約20cmで断面は箱薬研状を呈する。遺物は33Cグリッドの22号溝との接続部付近を中心に多量の貝殻とともに陶磁器、擂鉢、内耳土器片などが出土したが、いずれも覆土中からの出土で確実に溝底から出土したものではなかった。

4号溝跡（第33図）

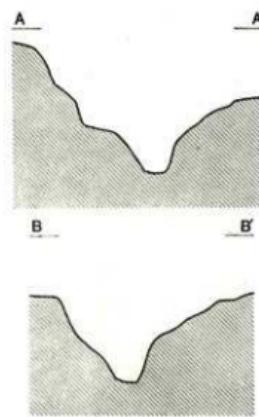
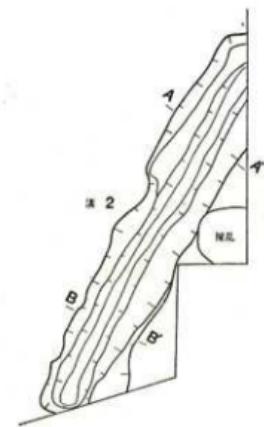
31Aグリッドから33Dグリッドまで西にのび、そこから北に曲がって36Aグリッドから調査区外に出る。尚、33Dグリッドから北に伸びる部分は道路際に検出されたため縦割の状態で、かろうじて底まで検出された状況で、溝幅については明らかでない。東西に走る部分は南側を3号土壘によって、北側を4号土壘によって狭まれており、南北に走る部分は4号土壘に沿って掘り込まれている。33Dグリッドのコーナー部分では溝底が一損切れて浅い橋状になるが、西側が道路下になるためそこで溝が完全に切れるかどうかは確認できなかった。31Aグリッドで調査区東側に抜ける部分は上端が北方に曲がるが、この部分は擾乱が激しく、溝底はそのまま東に向う。検出された部分の長さは東西に走る部分で約31.5m、南北に走る部分で約41mである。深さは約1.3mで、3号土壘との比高差は約1.7m、4号土壘との比高差は約2.2mで断面は箱薬研状を呈する。遺物は陶磁器を中心内耳土器、擂鉢片等がまんべんなく出土しているが、いずれも覆土中に含まれるものである。

5号溝跡（第34図）

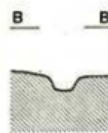
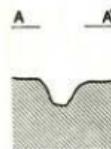
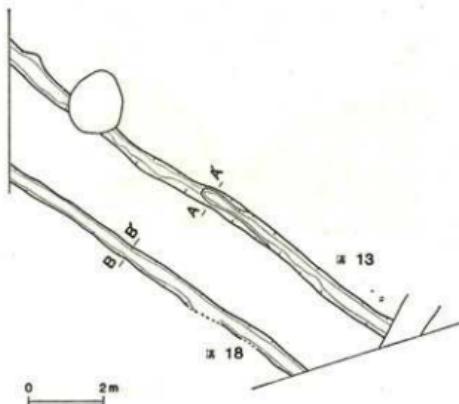
33A、B、34B、35A、Bグリッドにかけて検出された。4号溝と同じく直角に曲がるものである。北側は35Aグリッドで16号溝に接続し東側は擾乱を受けているが、調査区外に伸びるものと思われる。長さは東西に走る部分で約9m、南北に走る部分で約14.5mである。溝幅はそれぞれ0.6m、1.2m前後で南北方向の部分では東側にゆるい肩状の平坦面をもつ。深さは約60cm前後である。



第30図 1号溝跡実測図



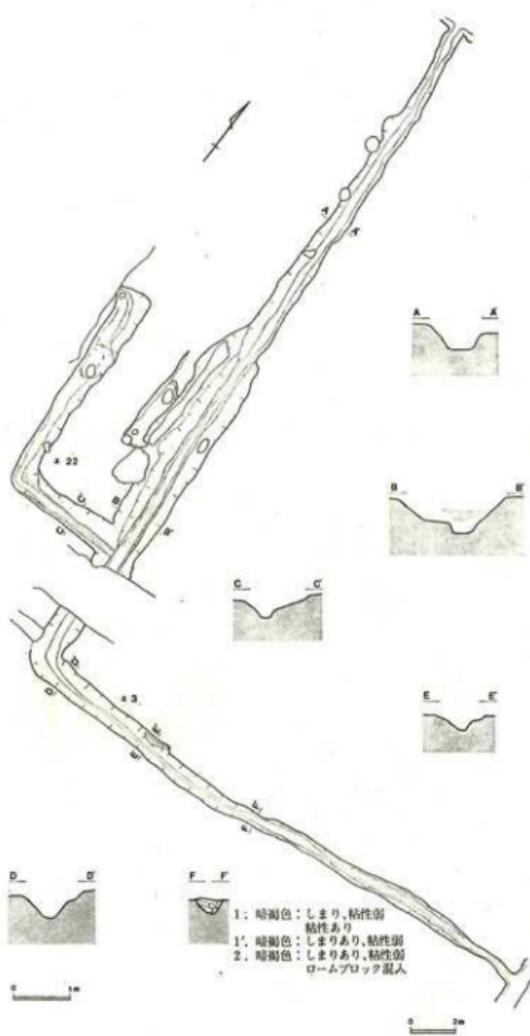
水系標高12,000m



水系標高12,500m



第31図 2号・13号・18号溝跡実測図



第32図 3号・22号溝跡実測図

遺物は多くないが陶磁器、内耳土器、板片などを出土している。

6号溝跡（第34図）

33C、34B、35Bグリッドにかけて検出された。南端は東側に落差をもって8号溝跡と接続し、北端は16号溝跡に接続する。長さは約17mで幅は約60cm、深さは70cm前後である。断面は箱型を意識して掘っているものと考えられるが、34グリッドラインでの土層観察では覆土の上にロームブロックを多量に含む層があり、人為的に埋められた可能性が考えられる。遺物は少量であるが覆土中より陶磁器片、板片等が出土している。

7号溝跡（第36図）

33B、Cグリッドで検出された。南北に走る溝である。北端をピットに切られているが、8号溝に接続するものと考えられる。長さ約5.1m幅0.4m程であるが、深さはわずかに5cm程しか残存していないかった。遺物は出土しなかった。

8号溝跡（第34図）

33A、Bグリッドで検出された。東西に走る溝

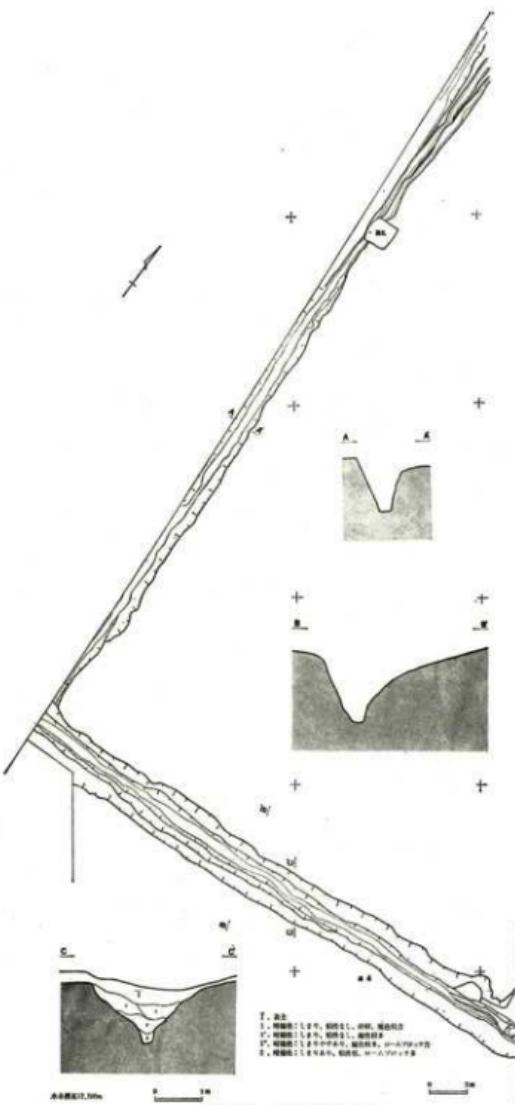
である。東側は浅くなり消滅するが、西側は落差をもって6号溝に接続する。6号溝から東に約2mの所で7号溝が接続する。長さは約2.8m、幅は70cm前後で深さは東側から西方の6号溝に向かって傾斜するが、溝中ほどで約25cmである。掘り込みは断面舟底形を呈するもので、底面はやや起状がある。遺物は出土しなかった。

9号溝跡（第34図）

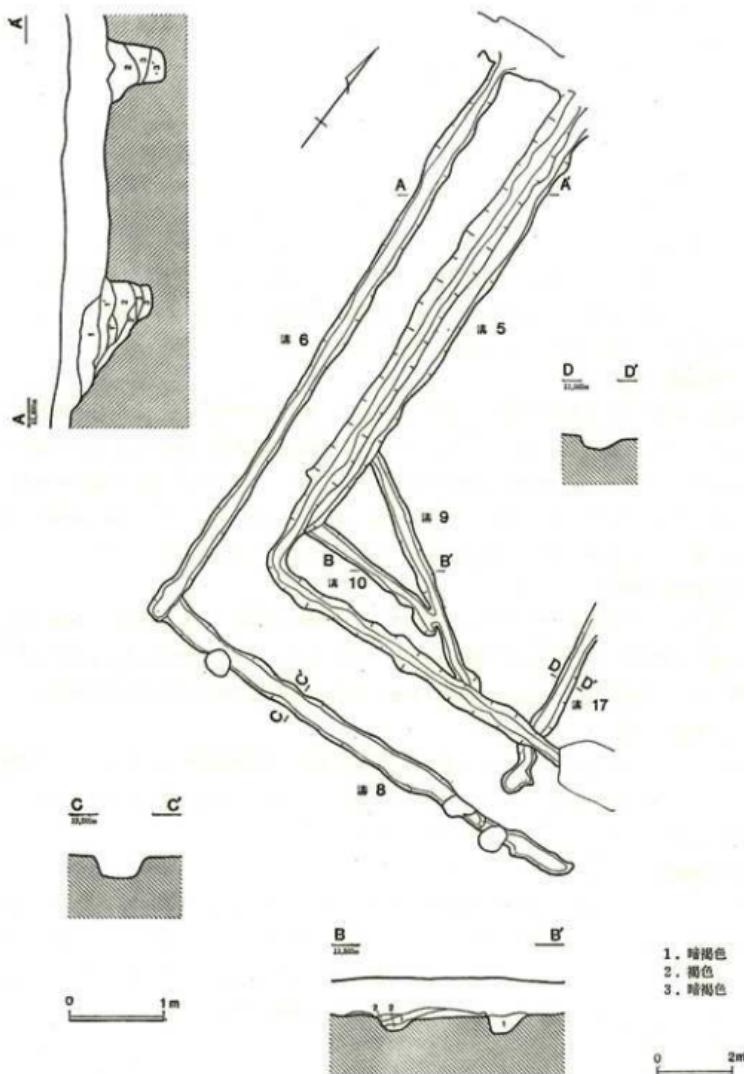
33B、34Bグリッドで検出された。東南端が5号溝跡の東西方向部分に接続し北西端が同じく5号溝跡の南北方向部分部に接続する。また東南端から約1mの所で10号溝跡が接続する。長さ6.5mで幅は約50cmである。断面は舟底形で深さは20cmであり、5号溝跡との接続部では約30cm程の落差をもつが、重複関係は認められなかった。遺物は出土しなかった。

10号溝跡（第34図）

33B、34Bグリッドで検出された。東西方向に走る溝である。東端は9号溝跡に接続し西端は5号溝跡に接続する。長さは約4mで幅は40cm前後である。深さは約20cmで底面はやや丸味を帯びる。9号溝跡との接続部は底面のレベルがほぼ同じであるが、5号溝跡との接続部は約30cmの落差をもつ。溝間の重複関係は認められなかった。



第33図 4号溝跡実測図



第34圖 5号・6号・8号・9号・10号・17号溝跡実測図

遺物は出土しなかった。

11号溝跡（第35図）

35Bグリッドで検出された。東西方向の溝である。12号溝に切られている。東側は調査区外に伸び西側は擾乱が入るが、4号溝までは伸びると考えられるが、その先は道路下になるため不明である。長さは検出された部分で6.8m幅は80cm前後である。底面は部分的に浅い段状に凹凸をもち深さは約30cmである。遺物は陶器片、内耳土器片が4片ほど出土したのみである。

12号溝跡（第35図）

35B、36Bグリッドで検出された。南北方向の溝である。北端は4号建物跡際で浅く立ち上がる。南端は14号溝に接続し11号溝を切っている。長さは約7.4mで幅は焼い所で30cm南側の広い部分で60cmである。掘り込みは北側が直線的に掘り込まれるが南側はゆるくカーブを描き、底面はなだらかである。深さは北側が浅く10cm程であるが、南側の14号溝との接続部では約15cmである。14号溝の底面との落差は約5cm弱である。遺物は陶器の細片が一片出土したのみである。

13号溝跡（第31図）

29C、30Dグリッドで検出された。東西方向の溝である。1号溝跡から南に約3m程離れて平行に走るが、1号土壘の下から検出されたものである。東側は調査区際で擾乱をうけるが、更に東に伸びるものと考えられる。西側は調査区外に伸びる。検出された部分で長さ12.5m幅50cm前後である。底面はほぼ平坦であるが、溝中央部で5cm程の落差をもち東側が底くなる。深さは浅い所で約20cm、深い所で約30cmである。遺物は陶器片、内耳土器片が3片出土したのみである。

14号溝跡（第35図）

35Bグリッドで検出された。東西方向の溝である。東側は調査区外に伸び西側は4号溝に接続し4号溝から東に約1.5mの所で12号溝が接続する。検出された部分で長さ約7.6mで幅は広い所で70cm狭い所で30cm程である。深さは約20cmである。遺物は陶器片が一片出土したのみである。

15号溝跡（第36図）

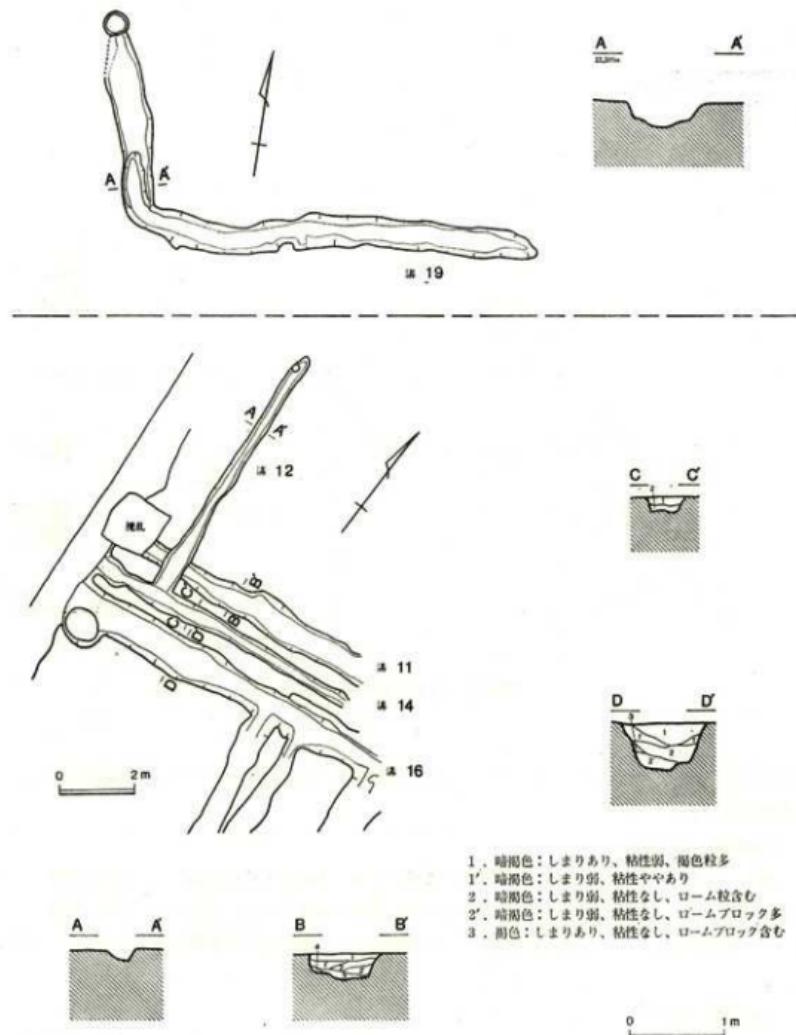
29Cグリッドで検出された。南北方向の溝である。南側は東北新幹線の取付道路によって破壊されているため検出されたのはわずかに長さ90cmのみである。幅は30cm程で深さは6cmである。遺物は検出されなかった。

16号溝跡（第35図）

35A、Bグリッドで検出された。東西方向の溝である。東側は調査区外に伸びる。西側は4号溝にぶつかるが、その先は道路下になるため不明である。南側から3号、5号、6号の各溝が接続する。検出された部分で長さ9.4m、幅は1mから1.2m程である。底面は北側に浅い段をもつがほぼ平坦である。深さは50cm前後である。遺物は覆土中から陶磁器片、内耳土器片などが13点程出土したのみである。

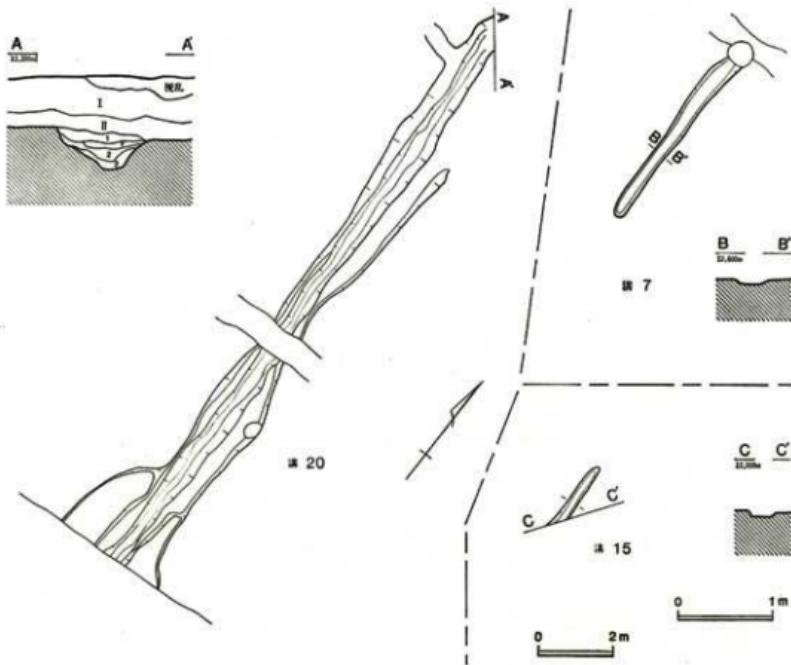
17号溝跡（第34図）

33A、Bグリッドで検出された。南北方向の溝である。北側は調査区外に伸び南側は8号溝の手前で立ち上がる。5号溝に切られている。長さ5.3mで幅は50cmである。深さは15cm前後で掘り込



水深標高12,000m

第35図 11号・12号・14号・16号・19号溝跡実測図



第36図 7号15号20号溝跡実測図

みは8号溝の北側は比較的しっかりしているが、南側はしだいに浅くなりプランも明瞭さを欠く。遺物は出土しなかった。

18号溝跡（第31図）

29C、Dグリッドで検出された。東西方向の溝である。東側は新幹線用地内に、西側は調査区外に伸びる。検出された部分で長さ9.4m、幅50cm、深さ20cm程である。約2m程北側を13号溝が平行して東西に伸びる。この溝も1号土壌下から検出された。遺物は内耳土器片が2片出土したのみである。

19号溝跡（第35図）

30B、31Bグリッドで2号土壌上に検出された。先述の1号井戸跡に伴うもので2号土壌の縁辺を利用して東側の低い区域に排水するように掘り込まれている。東端は2号土壌を下った辺りで消滅する。長さ16m、幅70cm前後で深さは30cmである。

20号溝跡（第36図）

29B、30B、31Aグリッドにわたって検出された。南北方向の溝である。北側は調査区外に伸び

北側から約1.5mの所で西側から3号溝が接続する。また30Bグリッド中央部で19号溝に切られ、南側は1号溝に切られてその先は不明である。検出された長さは約17.5mで幅は約40cmから50cmである。深さは150cm前後である。遺物は覆土中から陶磁器片等が出土している。

21号溝跡

29Bグリッドで検出された。南北方向の溝である。北側は1号溝と重複し南側は新幹線用地内になる。長さ2.5m、幅50cmから70cm程で深さは20cm前後である。遺物は出土しなかった。

22号溝跡（第32図）

33C、D、34Cグリッドで検出された。3号溝に接続し北側は4号溝に切られるが、その先は道路下になり不明である。長さは15.4mで幅は1m前後、深さは30cmから40cmである。掘り込みは東西方向の北側及び南北方向の東側がゆるく傾斜して段をもつが、断面は箱蓋研形となる。遺物はコーナー部分を中心に陶磁器片、板碑片等が多量に出土した。

1号土壤（第37図）

30Cグリッドに位置する。2号建物跡、1号柱穴列を切っている。長さ2m、幅65cm前後、深さ35cmである。壁、底面ともに凹凸がある。遺物は覆土中より内耳土器片とともに銅製品が出土した。

2号土壤（第37図）

29Bグリッドに位置する。南側半分のみの検出であるが、円形か指円形になるとされる。深さは約70cmで底面は多少凹凸をもち東側に傾斜する。遺物は出土しなかった。

3号土壤（第37図）

33Aグリッドに位置する。直径70cm深さ20cm程の円形の土壤で、底面はやや凹凸を持ち北側が低くなる。壁は凹凸も少なく直線的に立ち上がる。

4号土壤（第37図）

31Bグリッドに位置する。長軸2.2m短軸1.4m深さ25cmで、底面は浅い段をもち壁は東側が一箇所高く残る不整形を呈する。遺物は出土しなかった。

5号土壤（第37図）

29Bグリッドに位置し1号溝に切られる。長軸2.4m短軸2.1m深さ50cmである。東側壁底面際及び底面はほぼ中央にピット状に浅い掘り込みがあるが、その他はなだらかである。遺物の出土はない。

6号土壤（第37図）

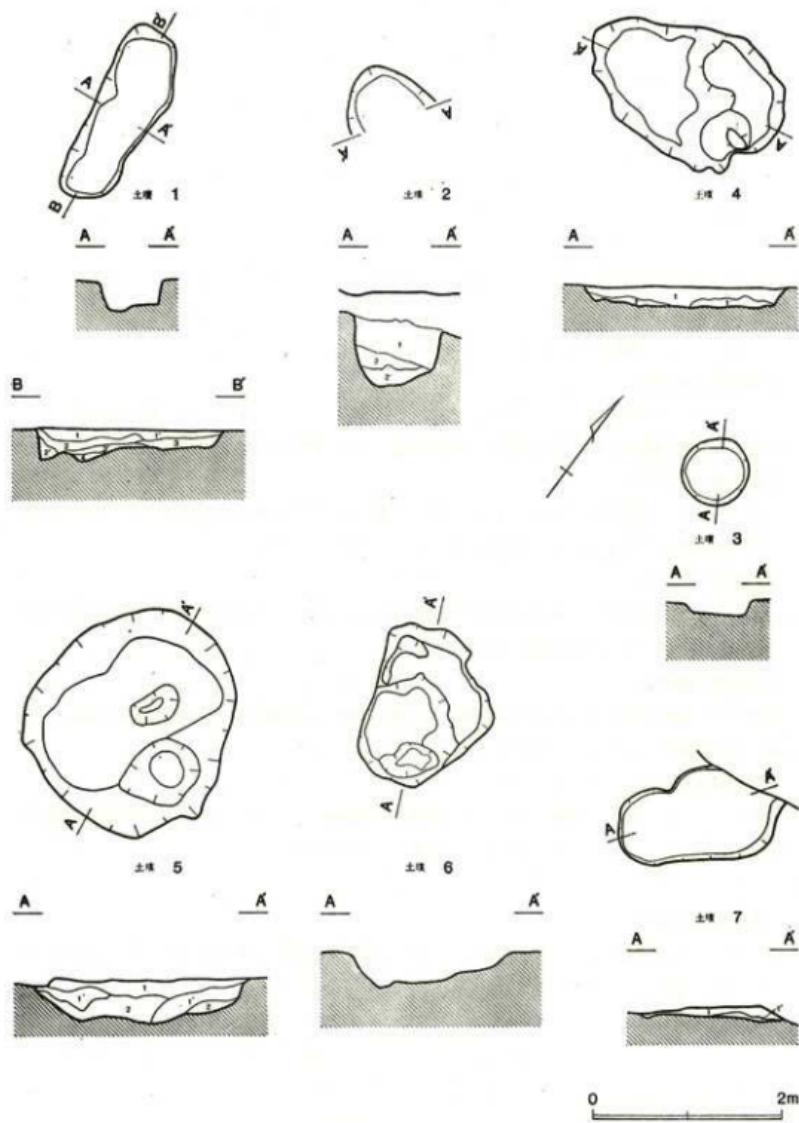
33Cグリッドに位置する。3号溝を切っている。長軸1.7m短軸1.3m深さ36cmで底面は南側に向かって3段に落ち込む。遺物は出土しなかった。

7号土壤（第7図）

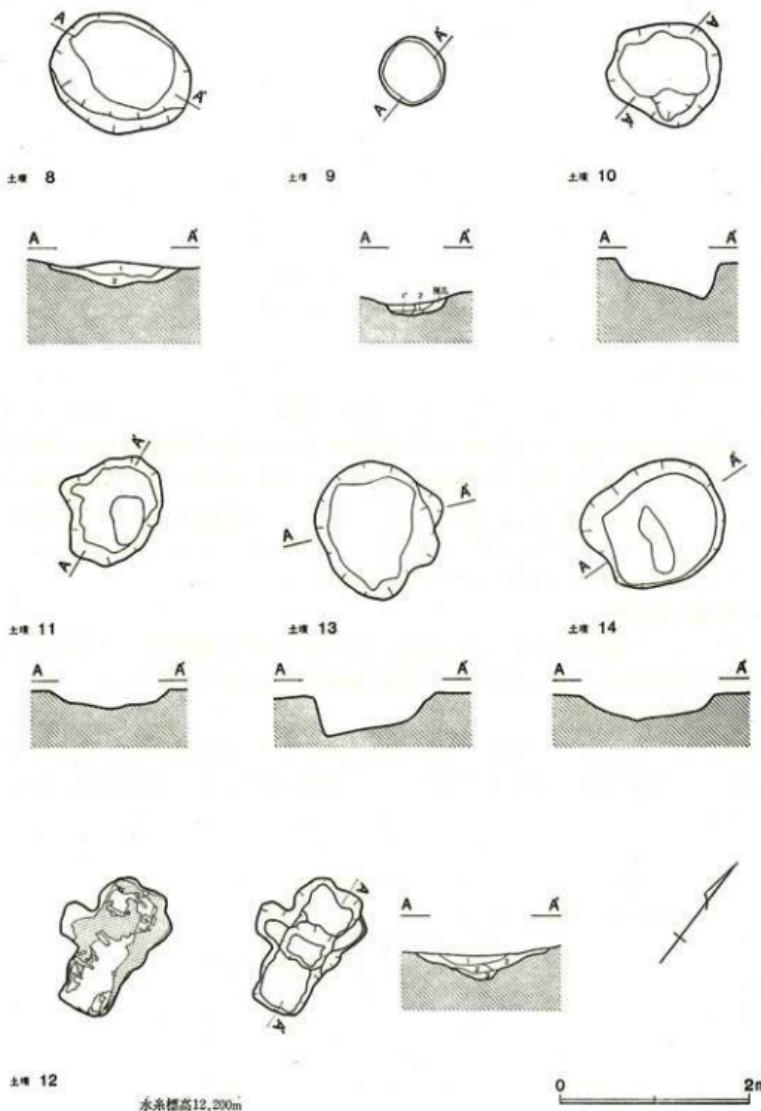
29Cグリッドに位置する。1号溝に切られる。残存部で長軸1.84m短軸0.8m深さ18cmである。底面は北側に向かって低くなる。壁はわずかに立ち上がる程度である。遺物は出土しなかった。

8号土壤（第38図）

33Cグリッドに位置する。長軸1.82m短軸1.26m深さ28cmで南側壁が段をもつ。底面は中央部が低く概して凹凸も少ない。遺物は出土しなかった。



第37圖 土 壤 実 測 図



第38図 土 壤 実 調 図

9号土壌（第38図）

30Bグリッドに位置する。直径70cm程の円形で深さは15cm程である。覆土には竹根が入りかなり乱れているが、底面はほぼ平坦で壁もしっかり立ち上がる。遺物は出土しなかった。

10号土壌（第38図）

33Cグリッドに位置する。8号土壌から北に約2m程離れている。長軸1.14m、短軸1.12m、深さ40cm程の不整椭円形であるが、底面は北側に大きく傾き、壁の立ち上がりは南側で25cm、北側で35cm程である。遺物は出土しなかった。

11号土壌（第38図）

32B、33Bグリッドにかけて検出された。長軸1.22m、短軸0.88m、深さ20cmで西側に20cm程の張り出しをもつ。柱穴を切っている。覆土中に多量の炭及び骨粉を含み、火葬に関連した施設と考えられる。その他に遺物は出土しなかった。

12号土壌（第38図）

32B、Cグリッドにかけて検出された。火葬に関連した施設と考えられる。11号土壌から南に約1.3m離れている。長軸1.18m、短軸0.62mで深さ26cmである。西側に30m程の張り出しを持ち覆土中に多量の木炭、骨片、骨粉を含み張り出し部直下から北側及び東側壁を中心に底面まで焼土が検出された。張り出しの部分は中心に向かって徐々に深くなり、土壌本体底面との間に約15cm程の段差をもち、この部分が特に焼土が厚いことからおそらく火葬の際の送风口のような機能をもつと考えられる。遺物は北側から古錢が焼けて付着した状態で出土した。

13号土壌（第38図）

34Cグリッドに位置する。長軸1.48m、短軸1.20m、深さ42cmの不整椭円形である。底面は不規則に凹凸をもち安定しないが、全体に大きく西側に傾斜する。遺物は出土しなかった。

14号土壌（第38図）

34B、Cグリッドにかけて位置する。長軸1.42m、短軸1.30m、深さ25cmである。底面は中央部が窪み、壁は北側と東側が比較的きつい傾斜をもち、西側及び南側はゆるく立ち上がる。遺物は出土しなかった。

第3表 土壌土層説明

1層	7.5 YR 3/6	暗褐色	褐色粒わずかに含む。しまり良、粘性あり。 ローム粒をわずかに含む。
1'層			
2層	7.5 YR 3/6	黒褐色	ロームブロックを含みしまりやや弱く粘性あり。 ロームブロックの含み多い。
2'層			
3層	7.5 YR 3/6	暗褐色	2~3cmのロームブロックを含む。しまりあり。粘性あり。 ロームの粒径小さくしまり若干強い。
3'層			
4層	7.5 YR 3/6	褐色	ロームブロック多量に含む。しまりあり。粘性弱い。
5層	7.5 YR 3/6	暗褐色	褐色粒、木炭粒をわずかに含む。しまり弱く粘性ややあり。
6層	7.5 YR 3/6	黒褐色	木炭粒、燒土粒、骨片を多量に含む。しまりややあり。粘性弱い。
6'層			
7層	5 YR 3/6	赤褐色	燒土粒の含み多くさらさらしている。 殆んど燒土で木炭粒、骨片、骨粉を含みさらさらしている。しまり良、粘性弱。

e. V区

V区で検出された遺構は井戸跡1基溝跡5条、土壤3基で、その他にピットが検出されているが、建築物を想定させるようなものはなかった。層位はローム面まで70cmから深い所で90cm程であるが、桑畠になっていたこともあってかなり耕作や根による擾乱をうけしており、しまりのない耕作土である。遺物は溝を中心に陶磁器類が出土している。

井戸跡（第41図）

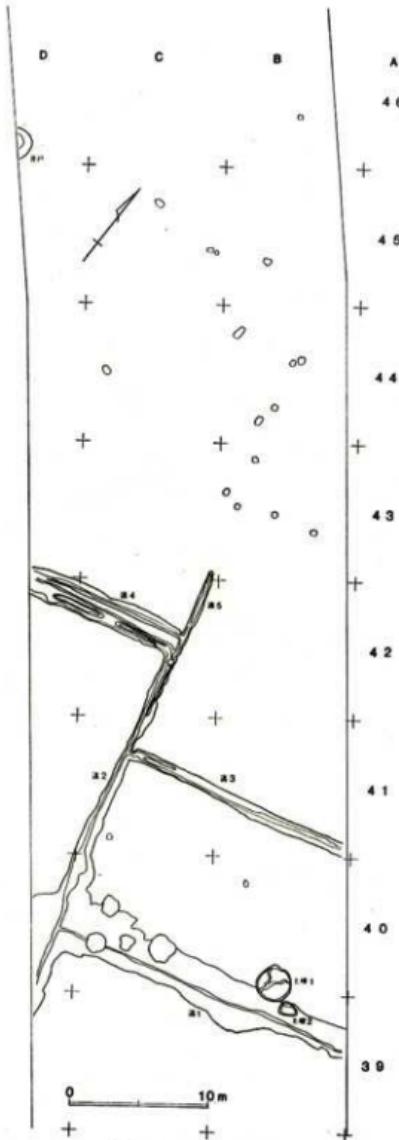
46Dグリッドで検出された。西側半分が調査区外になる。直径2.4m程の円形もしくは椭円形になると思われる。深さは1.7m程である。掘り込みは北側に部分的に段があるが、漏戸状になるもので、底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

1号溝跡（第40図）

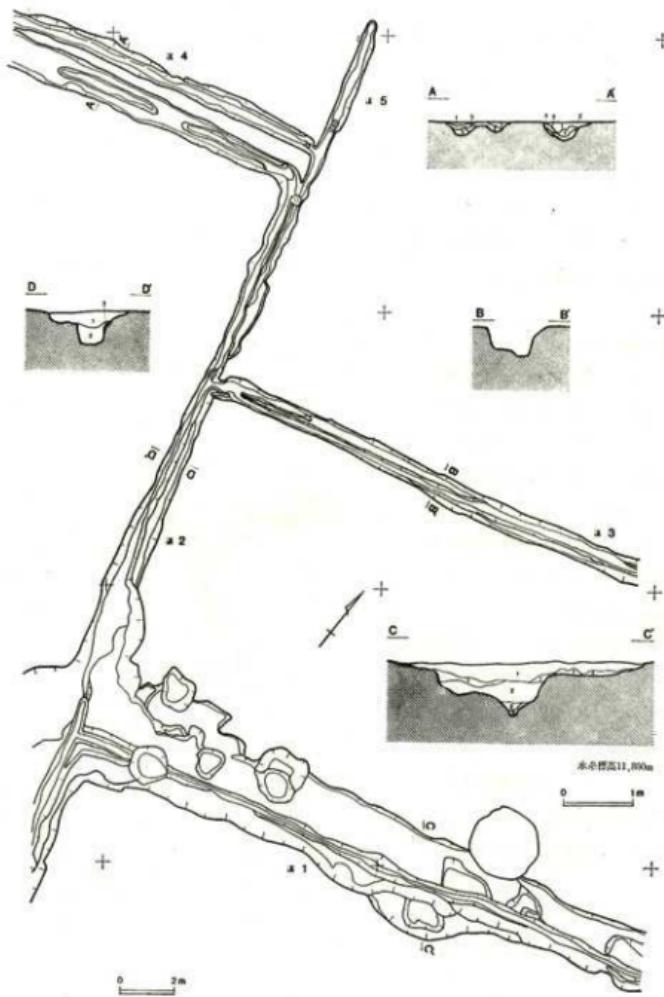
39B・C、40B・Cグリッドにわたって検出された。東西方向の溝である。1号土壤、2号土壤に切られ、西端は2号溝に接続する。東側は調査区外に伸びる。2溝号との接続部付近はかなり擾乱されている。検出された長さは約22.4mで、幅3.1m前後、深さは70cmから80cmである。掘り込みは北側に肩状で広く段をもち、そこから小さく箱築研状になる。遺物は覆土中から陶磁器、カワラケ、内耳土器片等が出土している。

2号溝跡（第40図）

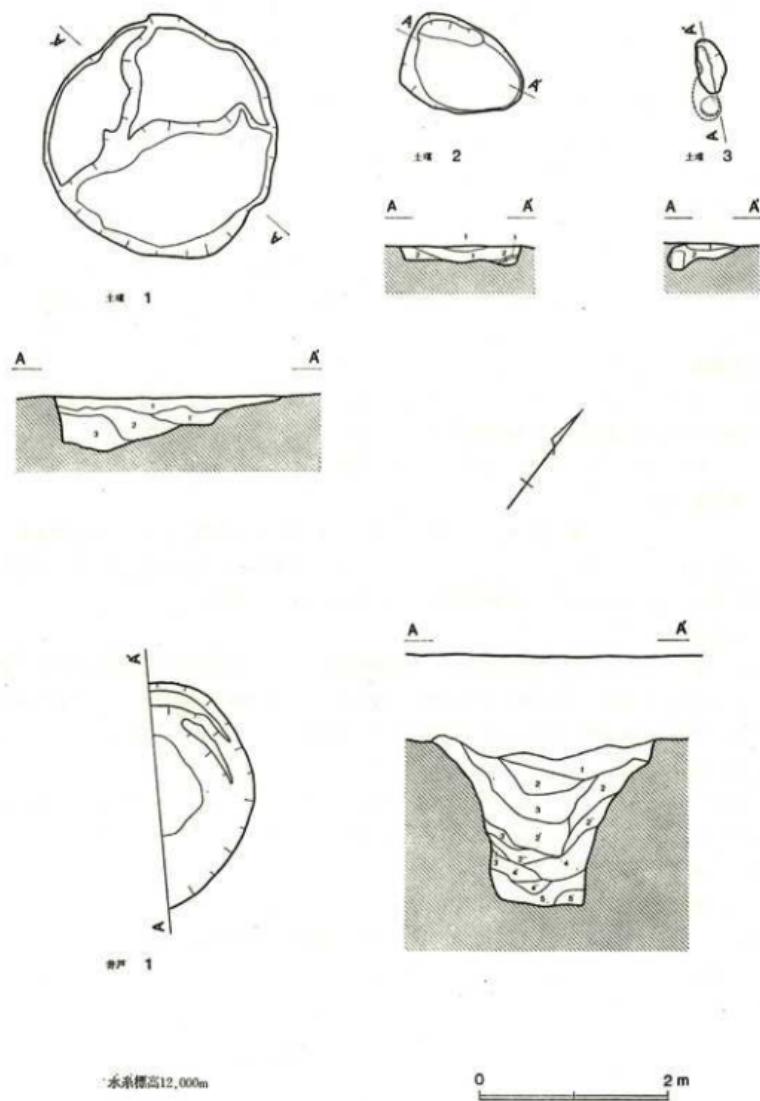
39D・40C・D・41C・42C・Dグリッドにかけて検出された。42Cグリ



第39図 V区遺構配置図



第40図 溝実測図



第41図 井戸跡、土壤実測図

ドで直角に曲がる。南側及び西側は調査区外に伸びる。途中1号溝跡、3号溝跡が接続し42Cグリッドで5号溝跡が南北の同一方向に接続するが、重複関係は不明である。東西方向の部分では中央に馬の背状に掘り残しがみられ、幅は1m前後である。南北部分では細くなり70cm程であるが、南に行くに従って広くなり1号溝との接続部付近では上幅が急激に広くなる。深さは東西部分で20cm、南北部分で50cm程であるが、1号溝接続部では1.2mと深くなる。遺物は覆土上層を中心に陶器片、内耳土器、火鉢等の破片が出土している。

3号溝跡（第40図）

41B・Cグリッドで検出された。東西方向の溝である。東側は調査区外に伸び西側は2号溝に接続する。検出された長さは16.7mで、幅は90cm前後、深さは45cm前後である。掘り込みは片側に肩状に段をもち、底面は2号溝に向かって傾斜する。2号溝との接続部は若干くびれる。遺物は染付片等がわずかに出土したのみである。

4号溝跡（第40図）

42C・D・43Dグリッドで検出された。すぐ南側を2号溝が並走する。東西方向の溝である。西側は調査区外に伸び東側は5号溝に接続する。長さ12m、幅70cm、深さ30cm前後である。壁面はやや凹凸をもち底面は丸味を帯びる。遺物は陶器皿が溝底から出土している。

5号溝跡（第40図）

41C・42Cグリッドで検出された。南北方向の溝である。南側は2号溝に接続し、途中西側から4号溝が接続する。北側は浅く立ち上がる。長さ11.35m、幅65cmで深さは北側の立ち上がり部で5cm、南側で約15cm程である。遺物は陶器片が一片出土したのみである。

1号土壙（第41図）

39B・40Bグリッドにかけて検出された。1号溝を切っている。直径2.5m程の円形である。掘り込みは段をもち西側が深さ10cm、北側が更に一段低くなつて約30cmで、南側半分が一番低く56cmである。壁及び底面は多少凹凸をもつ。遺物は小破片がわずかに出土したのみである。

2号土壙（第41図）

39Bグリッドで検出された。1号土壙のすぐ東側にあたる。1号溝の覆土中に掘り込まれている。長軸1.34m、短軸96cm、深さ22cmで東側がやや深く掘り込まれる。底面はなだらかな凹凸をもつ。遺物は土器細片が2点程出土したのみである。

3号土壙（第41図）

40Bグリッドで検出された。長軸60cm、短軸32cmの不整梢円形で掘り込みは南東方向にオーバーハングする。深さは約35cm程である。検出された段階で上面に貝殻がみられ、中に「水」の文字の彫り込まれた石製品がやや傾いた状態で出土した。

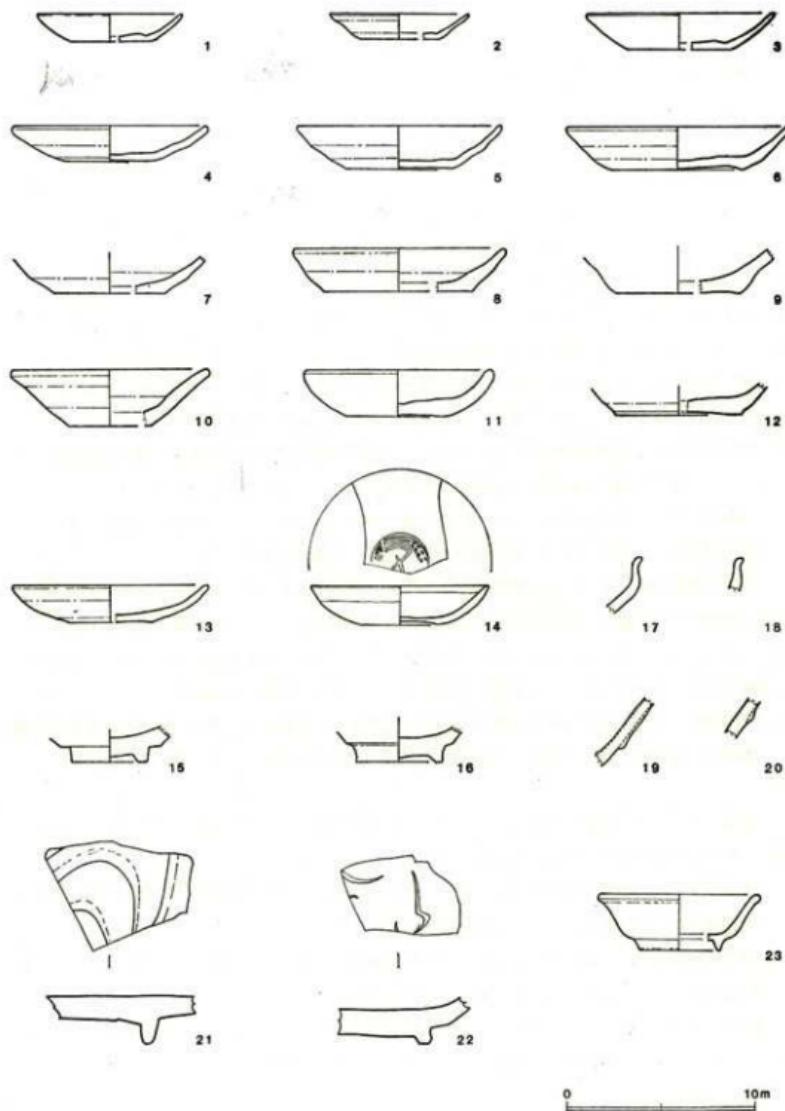
2. 遺 物

土師質土器皿（カワラケ）（第42図 1—14）

1. 推定口径7.7cm、底径4.2cm、器高1.4cmを計り、色調は橙色を呈する。胎土は赤色粒、雲母を僅かに含む。焼成は普通で底部は糸切り右回転である。IV区22号溝から出土した。
2. 推定口径7.5cm、底径4.1cm、器高1.4cm、を計り、色調はくすんだ橙色を呈する。胎土は赤色粒、微細黒色粒を含む。焼成は普通で底部は回転糸切りと思われるが不明。IV区1号溝出土。
3. 推定口径10.1cm、底径5.6cm、器高1.9cmを計り、色調は明るい橙色を色する。胎土は微細透明粒、雲母を僅かに含む。焼成良好、底径は回転糸切り方向不明。V区1号溝出土。
4. 推定口径10.5cm、底径4.5cm、器高1.9cmを計り、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は赤色粒、黒色微細粒、雲母を含む。焼成普通。底部は糸切り右回転。IV区22号溝から出土した。
5. 推定口径11cm、底径5.6cm、器高2.3cmを計り、色調はにぶい褐色を呈する。胎土は赤色粒、砂を含む。焼成は良好で、底部切り離しは右糠穀回転である。IV区1号溝から出土した。
6. 推定口径12cm、底径6.9cm、器高2.3cmを計り、色調は明るい褐色を呈する。胎土は赤色粒、雲母を含む。焼成は普通で、底部は回転糸切りであるが方向は不明。II区1号溝から出土。
7. 口縁部を欠く。底径5.8cmを計り、色調は淡い橙色を呈する。胎土は軟質で赤色粒、雲母を含む。焼成は普通で、底部は糸切り右回転である。III区1号溝から出土した。
8. 推定口径11.4cm、底径8cm、器高2.3cmを計り、色調は明るい橙色を呈する。胎土は軟質で赤色粒、雲母を僅かに含む。焼成は普通で底部は回転糸切りであるが方向は不明。III区1号溝出土。
9. 口縁部を欠く。底径6.6cmで色調は赤褐色を呈する。胎土は比較的硬く雲母を含む。焼成良好で底部は糸切り右回転である。煤が厚く付着している。III区1号溝から出土した。
10. 推定口径10.7cm、底径4.9cm、器高3cmで、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は赤色粒を多量に、雲母を少量含む。焼成は普通で底部は回転糸切りであるが方向は不明。III区1号溝から出土した。
11. 推定口径10.2cm、底径5.4cm、器高2.5cmで、色調は暗褐色を呈する。胎土は赤色粒、黒色粒を含む。焼成は普通で底部は糸切り右回転である。
12. 口縁部を欠く。底径16.8cmで色調は明るい橙色を呈する。胎土は軟質で赤色粒を多量に含む。焼成は普通で底部は回転糸切りであるが方向は不明。I区グリッドからの出土である。
13. 推定口径10.6cm、底径4.4cm、器高2cmで、色調は橙色を呈する。胎土は赤色粒子を含む。焼成は普通で底部は回転糸切り右回転。IV区4号溝上層から出土した。
14. 推定口径9.6cm、底径4cm、器高2.1cmで色調は橙色を呈する。胎土は雲母を含み焼成良好、底部は上げ底気味で内面に粗穂が型押しされる。成形は型作りと思われ近代のものである。IV区表採。

青磁（第42図 21～23）

第42図21は皿かと思われる底部破片で22は碗の底部破片である。21は濃緑色22.は黄味がかった淡緑色でいずれも胎土は灰青色で緻密である。21は高台内側及び底面に蛇ノ目に褐色釉が施される。22は高台外側まで、いずれも内面に半切彫りで模様が彫り込まれる。23は青色の釉で推定口径4.2



第42図 土師質土器皿、天目、青磁実測図

cmである。釉は厚く高台端部を除いて全面に施される。この他に蓮弁碗の破片が出土している。弁は稜線で表わされるもので弁の幅は約2cmである。

白磁（図版20 右上）

30Bグリッドの20号溝から出土した。高台は切り込み高台で釉は全面に施される。17C初め頃のものと思われる。

天目茶碗（第42図15～20）

15、16は底部破片である。15は底径4cmで胎土は灰白色。16は底径4.6cmで胎土は黄白色で軟質である。いずれも鉄釉が施される。17、18は口縁部破片。17は口縁下が短く立ち上がり18は口縁部が小さくくびれる。いずれも瀬戸、美濃地方の製品であろう。19、20は中国産のものである。胎土は灰色で緻密。釉は黒色で厚くガラス質である。

碗（第43図 1～7 第44図 2～4）

第43図、1は貼高台の碗である。釉は透明淡緑色で内面に目痕が一ヶ所残る。15C初め頃のものである。5は唐津の碗。高台は糸切りの後削り込んでいる。16C末頃であろう。7は灰釉の平碗である。同じく糸切りの後浅く削り込んでいる。胎土は黄白色で釉は淡黄緑色。内面に目痕が残る。15C末頃のものであろう。3、4は鉄釉で胎土は3が灰白色で黒色粒を含む。4は黄白色。いずれも焼成はよい。第44図2、3は瀬戸の掛け分け茶碗である。18・19Cに量産されたものである。4は同じく瀬戸の製品である。輪縫痕明瞭で淡黄色の透明釉が外側にかかる。第43図2は赤味がかった灰色の胎土で灰白色の透明釉が高台先端を除いて全面にかかる。内面は白色釉で横の刷毛目技法を用いている。三島系か。6はぐい呑である。間隙の多い黄白色の胎土で淡緑色の透明釉がかかる。瀬戸産。

鉢（第43図 13 第47図 13、14）

第43図、13は笠原鉢である。黄色白の胎土に透明釉がかかり、一部緑色釉が混じる。推定底径15.4cmである。第47図、13、14は三島の鉢である。13は赤褐色の胎土で白色釉で象嵌が施される。14は暗灰色の緻密な胎土で口縁部下に波状に刷毛目を入れたあと青緑色の釉がかかる。幅広の口縁は上面に4本の沈線が入る。

香炉（第44図 5～8）

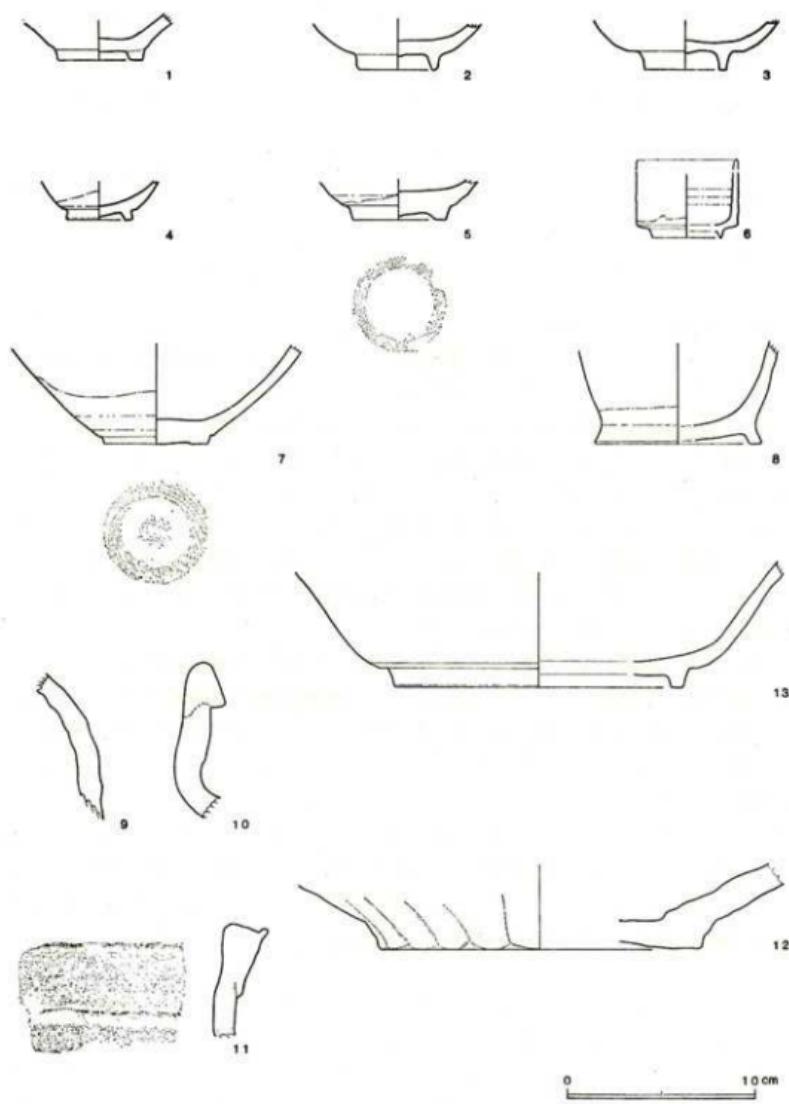
5～7は同種の香炉で黄白色の胎土に黄褐色の釉がかかる。釉は外面及び内面中位までであるが6は内面底部にもかかっている。底面には釉はまわらず指でつまんだ脚が3ヶ所に貼り付けられる。18～19Cの瀬戸産である。8は灰白色の胎土で淡緑色透明釉が外面及び内面中位までかかる。口縁部は内側に鋭く突出し底部は内錐形の脚が貼り付けられる。

蓋（第44図 9）

黄白色の胎土に黄褐色の釉が施される。口縁部は丸味をもって外側に開くもので内面中央にヘソ状のつまみがつく。18～19Cの瀬戸産である。

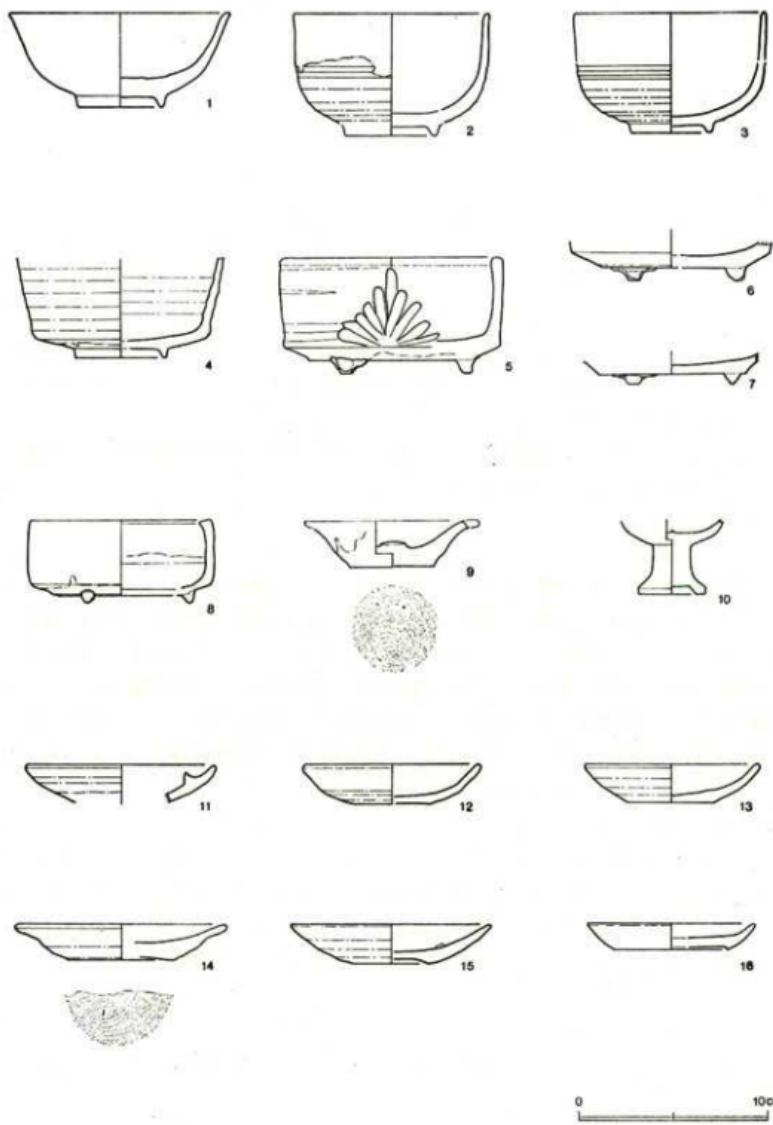
皿（第44図 11～16 第45図 7～11）

第44図11は灯明皿である。推定口径10.4cmで鉄釉が施される。13も同様の釉が施されるもので灯火具として使用されたものである。14は、やや軟質の黄白色の胎土で底部は回転糸切りである。内面に薄く鉄釉がかかるが、器形、その他の特徴からカワラケの影響が感じられる。12は瀬戸の皿で



第43図 碗類、瓣類実測図

0 10 cm



第44圖 碗、皿、香爐類実測図

淡緑色透明釉がかかる。15は透明釉が内面及び外面口縁下までかかるもので底部は上げ底状に削り込んでいる。外面は茶色の付着物が付く。内面に重ね焼のピン状の目痕が2ヶ所残る。16は体部が短く立ち上がる皿で釉が内外面にかかる。高台は底部を削り込んで作り出している。第45図10は量産された瀬戸系の皿で草花文が押される。9は菊花皿で口縁部が花弁状に彫り込まれるが、外面は刻みがなく内面が浅く彫られるだけである。透明釉に緑色釉が流れている。7、8は底部のみの残存であるが、7は黄白色の胎土で白っぽい釉がかかり内面は蛇の目である。8は赤味を帯びた灰色の胎土で灰緑色の釉がかかる。内面は同種のものを重ねた痕が残る。11は小型のもので外面に蛸唐草模様の刻みが入り、釉は白色釉がかけられる。高台はわずかに作り出されるだけである。

図版20下に示したのは志野の破片である。中段右はいわゆる鼠志野である。下段左は黄白色胎土で長石を含み軟質であるが、内面に櫛目による彫り込みが入る。青磁の技法を思わせるが、胎土その他はまったく別物である。下段右は菊皿の破片で釉が溜った部分は濃緑色になる。他には白色あるいは鉄釉と思われる部分もみられるが、清里、陣場遺跡の墓壙から出土しているものと類似する。

片口（図版23 9、10）

破片で出土した。底部片と口縁部片である。瀬戸産のもので黄褐色釉がかかる頑丈な作りのものである。近世の遺跡ではよく出土するものである。

徳利類（第43図 9、13、第45図 2～4、6）

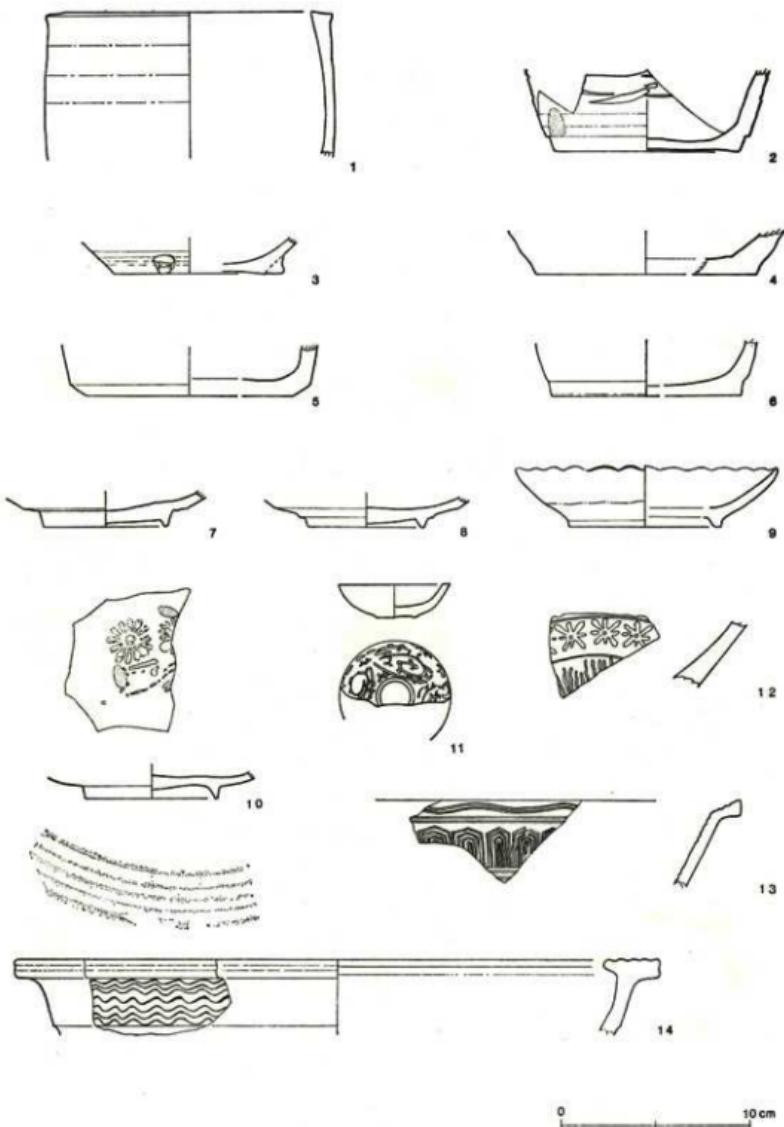
徳利類は小破片が殆んどで全体の器形を知り得るものはないためにやや強引にこの類に入れたものもある。第43図8、9は鉄釉のかかるもので、胎土は黄白色で黒色粒が入る。大窯で焼かれたものである。第45図2は明るい褐色の鉄釉のかかるもので、整形の段階で沈線が入る瀬戸系の新しい時期のものである。3は薄手のもので、体部下端に豆状の足が3ヶ所つくものである。胎土はうすい灰褐色であるが、焼きも極めてよく19Cの所産である。産地についてはまだ明確ではないが、水戸藩で焼成したものに類似のものがある。4は灰色の胎土でやや焼成があまい。5は黄白色の胎土で鉄釉がかかる。甕の底部であるかもしれない。6は灰色の胎土で透明緑色釉の下に白色の釉が刷毛塗りされたように施される。いずれも江戸後期の所産と考えられる。

壺・壺（第43図 10～12 第45図 1）

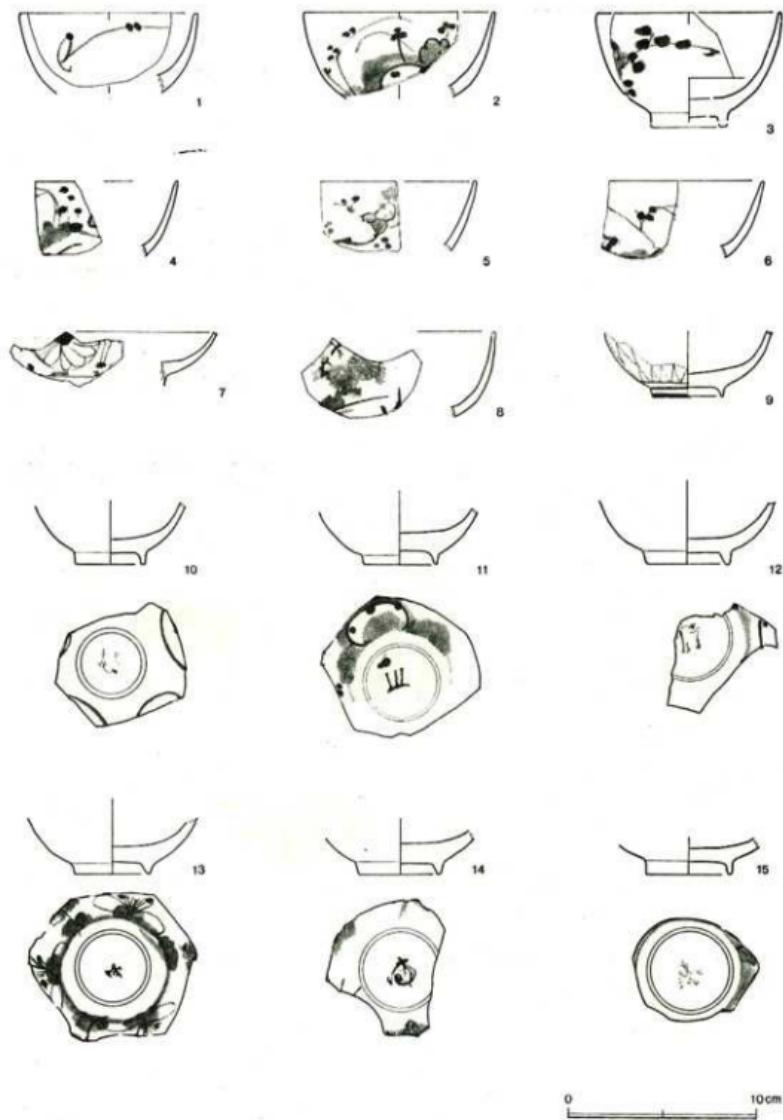
第43図10、12は常滑の破片である。壺と思われる。同一個体であるがつながらない。口縁部は外面に底部は内面に釉が斑状にかかる。口縁は颈部を折り返した後、粘土紐を帯状に貼り付けて丸味をもった三角形状の口縁を作りだしている。12は体部下端に粗い削りがみられる。11は口縁が帯状に薄く折り返されるものである。第45図1は黄白色の胎土に光沢のある鉄釉が全面に施されるものである。

手焼り（第48図 1～4）

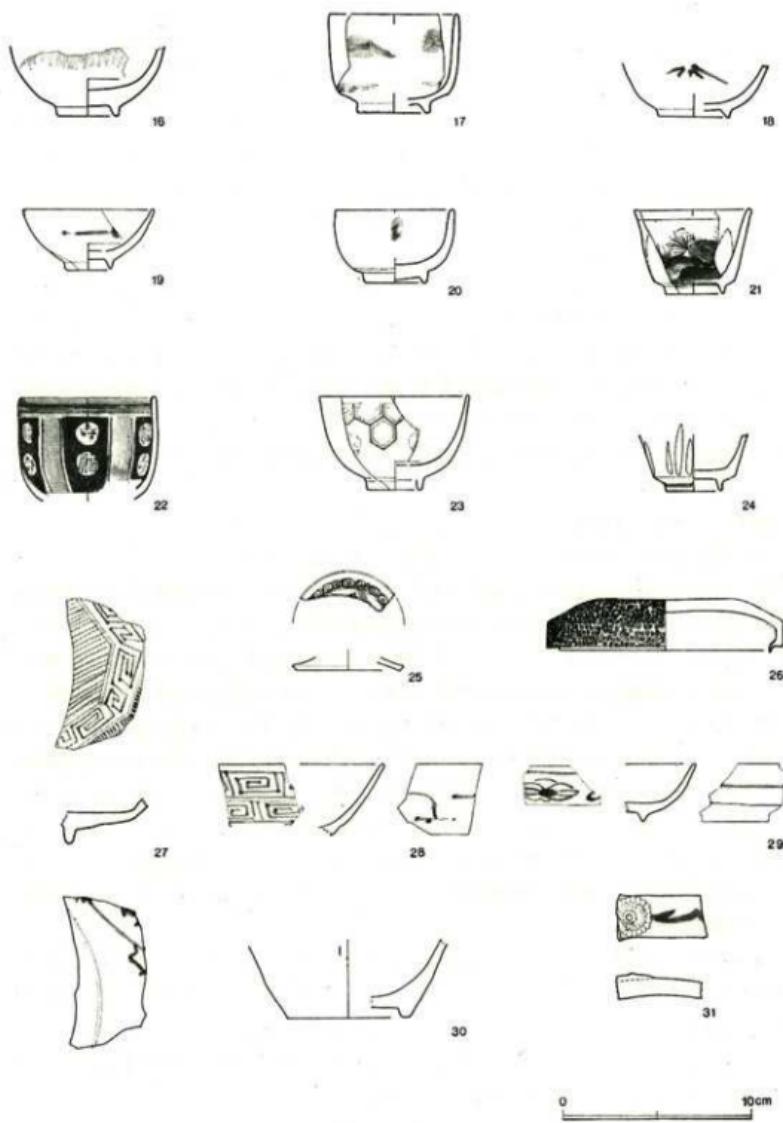
手焼りはいずれも瓦質のものである。1は推定口径36cmで、外面は口縁下に型による花文を押したあと全面に亀甲文が入る。2はおそらく1と同一個体であると思われるが、獅子を表わしたもので環状の把手がつくものであろう。3は外面口縁下に沈線が入り、その下は横位に縦の刻みが入る。4は格子状文様が入るもので、表面は黒色の光沢がある。いずれも明治以降のものと考えられる。



第45図 **卯、鉢、甕類実測図**



第46図 染付実測図



第47図 桐付実測図

染付 (第46図 第47図)

染付は各種出土しているが、主に碗の破片が多い。第46図1～6は草花文を表わしたもので、新しい時期の伊万里系のものである。9は網目の碗であるが、2の他にも小破片で割筆による網目のものなども出土している。7は菊を描いたもので、器面に4単位でまわるものである。10～15は底面の窯印を並べてみた。これらは釉が透明な青灰色で器壁も比較的厚手で重い。第47図16は灰色の胎土に灰緑色透明釉がかかる。17は白濁した釉がかけられコバルトで雲状に描かれる。18、19はぐい呑みである。20は陶器である。透明釉に一点青灰色に釉がうたれる。21、24は枝をもち刻みが入る。明治以降のものである。22、23は、明るいコバルトの発色で、22は「寿・福」が書かれる。23は刷絵によるものである。25、26は蓋である。25は周縁に渦巻状に小円が巡り中央に草花文かと思われるものが描かれる。26は刷絵によるもので明治、大正期のものと考えられる。27～29は皿で、それぞれ内面に雷文、椿の花が描かれる。30は徳利で内面は露胎である。31は把手かと思われるが、何に付くものかは不明である。白色の緻密な胎土で焼成は良好である。発色のよい呉須が使われ釉は全体に淡い青色である。表には箆で刻みを入れた後、菊花をかたどった貼り付けがある。裏は釉を通して成形の際に用いられたと思われる布目がわずかに見える。割れ口から図の左側が接合部であったと考えられる。

擂鉢 (第49図 第50図)

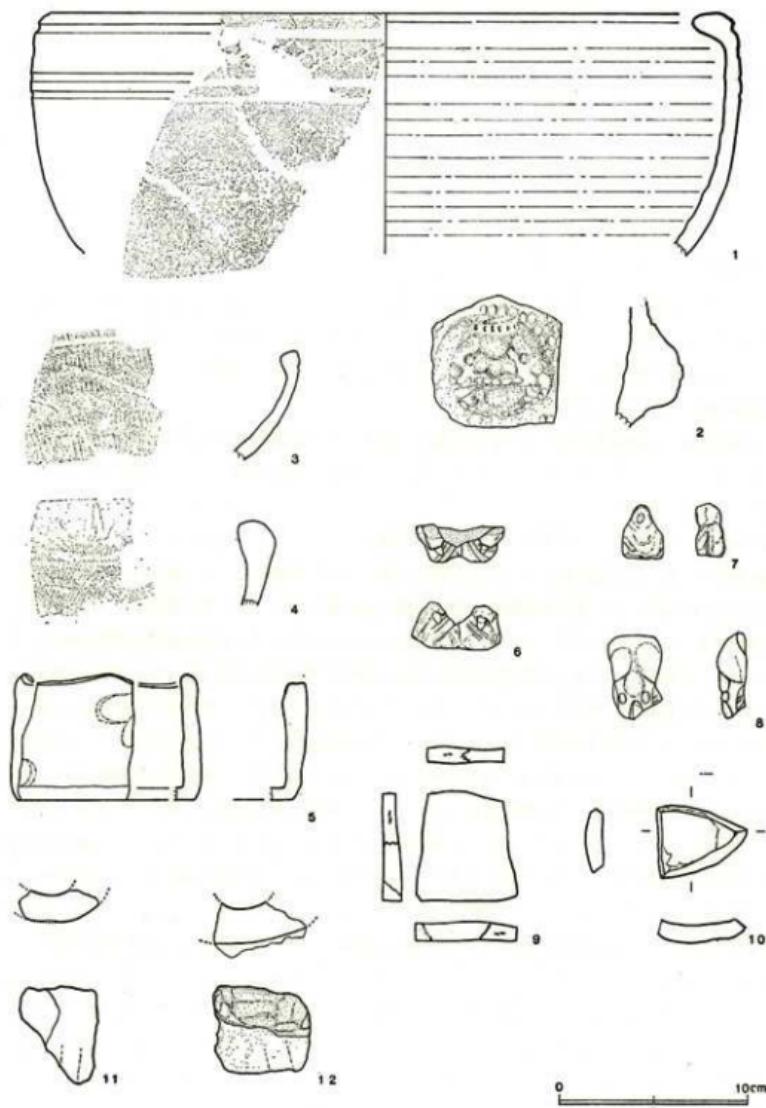
擂鉢は胎土、釉調、焼成などから大きく6種類に分類することができる。

1類—1～3、25、26が該当する。黄白色の胎土できめは粗く擂鉢としては軟質である。鉄釉が施されるが全体に荒く光沢がない。口縁は軽く外傾し端部に稜をもつもの(1)ともたないもの(2)、軽く折り返されるもの(3)とがある。底部は回転糸切りである。櫛目は浅く25は体部に一単位15本以上のものが間隔をおいて施される。底面は一単位7本か8本である。大窯期のものである。

2類—4～6、17、18、27、28、31、32が該当する。胎土は灰色で小石を多量に含み、焼成は良好で焼きしまっている。外面は薄く釉のかかるものとかからないものがあるが内面はまばらに釉が降っている。口縁は直立するもので外面に稜を形成する。底部は小破片であるが、粗く削っているようである。櫛目は粗いものと細かいものがあるが、5では口縁の屈曲部下からすぐに引かれ、一単位7本で間隔があいている。17は粗い櫛目が一単位7本で密に引かれる。31は黄白色の胎土であるが、よく焼きしまっており、底部、櫛目等は同じである。2類は常滑の製品と思われるが、更に分類できる可能性もある。

3類—7～12、14、19～22、29、30が該当する。胎土は黄白色できめが粗い。釉は鉄釉である。口縁部は一旦外側に張り出した後、立ち上がり丸い口唇部となる。底部は小破片しかないと調整されているようである。櫛目は上から密に施されるものはなく間隔があく。21では一単位13本以上、22は櫛の歯が欠落していると思われるが、推定で20本である。いずれも櫛目は比較的しっかりしている。本類は瀬戸系のものの特徴をよく備えたものである。

4類—15、16、23、24が該当する。胎土は煉瓦色で砂粒を含む。口唇及び口縁帯に沈線が入る。底部を窺える破片はないが、櫛目は深くしっかりとしたもので、口縁下から密に施される。24では一単位8本である。本類は動坂遺跡出土品と同じものと考えられるが、動坂遺跡では江戸後期以降に江



第48図 午焙、その他実測図

戸周辺で生産されたものと報告されている。

5類-13が該当する。口縁部破片1点のみであるが、胎土は赤褐色で比較的緻密である。釉は鉄釉が施され、口縁は軽く折り返されて外側に三角形状に突出する。櫛目は内面口縁下にわずかに残っている。3類とは胎土の違いで分類できる。

6類一小破片のため図示できなかったが、体部下端と底部片が一点、IV区22号溝から出土している。胎土は比較的軟質で灰色、外面は黒灰色である。櫛目ははっきりしているが体部下端で切れ、他の単位と重複しない。一単位7本である。これらの特徴から在地産の可能性が考えられるが、出土した位置から比較的古いもののと考えられる。

こね鉢 (図版22 4)

胎土は暗青灰色で長石を含む。表面は明るい赤褐色に発色する。外面体部下端は箒による粗い削りが行なわれ、底面は砂粒の付着が多量にみられる。内面はよく使い込まれて滑らかな光沢をもつほどである。常滑産のものと考えられ、16C初めの頃のものと考えられる。

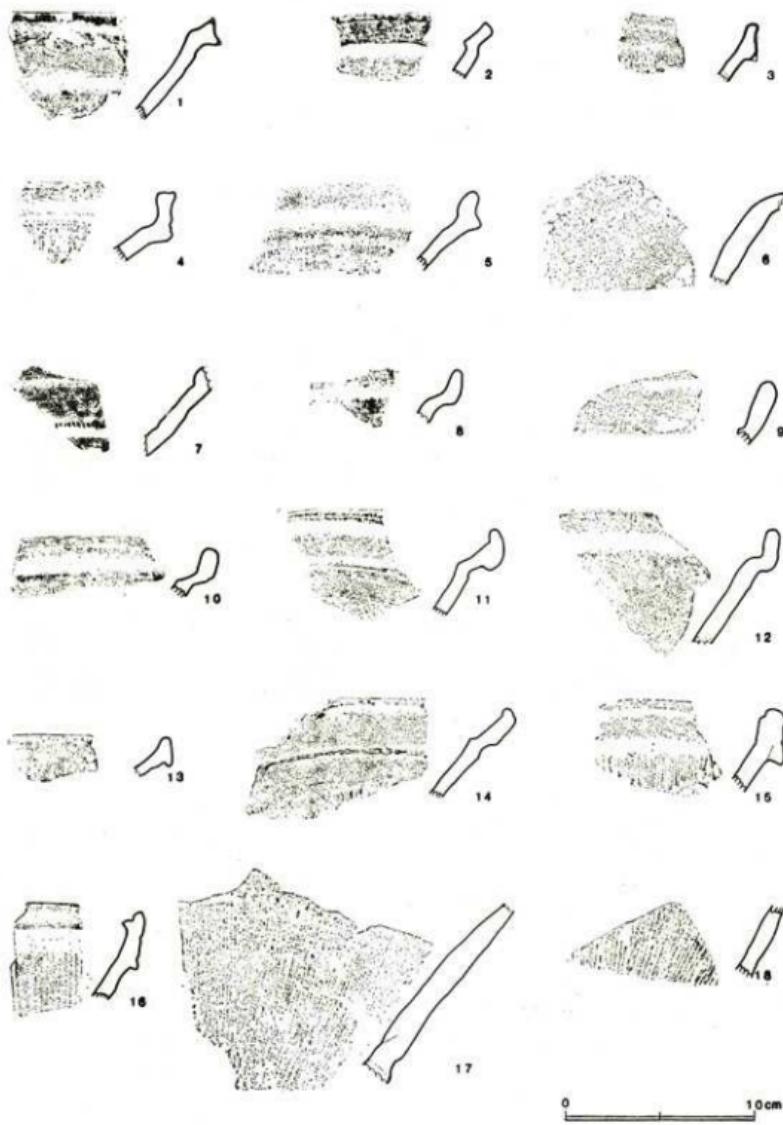
内耳土器 (第52図 第53図)

今回の調査では破片数で546点の内耳土器片が出土した。形態的には深手の所謂内耳土鍋よりも焙烙と言い得るものである。出土したものは殆んどが破片ではば完形に近いのは12のみであるが、大きな分類は可能である。

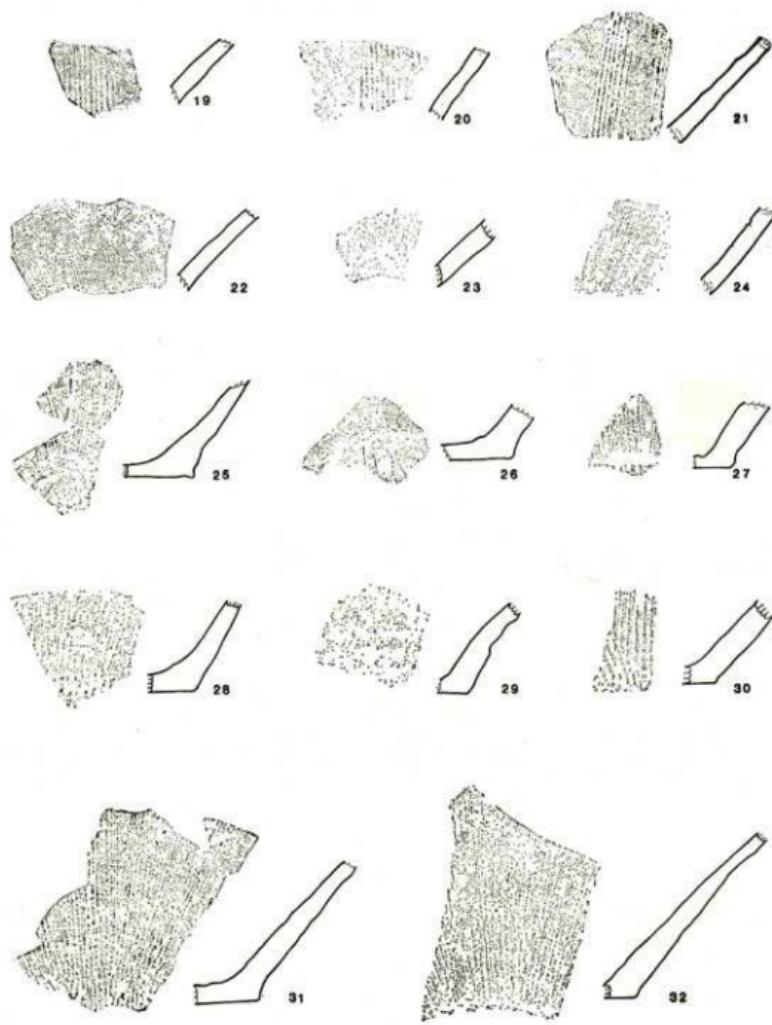
胎土には①赤褐色で小石を多く含むもの、②赤褐色で不純物が少くきめの細いもの、③灰白色で比較的きめが細く外面黒灰色のもの、④黄白色で粗いものの4種類がある。底部は①は平底で削られるかナデられている。②は無調整で不規則な網目状の縫がある。また③は特徴として体部が短く極端に偏平である。③は平底のものとやや丸底気味のものがあるが、後者は底面周辺部をかるく削るのみで、平底のものと同じく網目状の縫がある。④は底部が殆んど残っていないが②と同様である。体部は口縁部から体部上半がナデされるが、特に体部下半について指頭痕を残すものと削られるものがある。①は削られるものはごく少く殆んどが指頭痕を残している。②は体部が短いためか全てがナデされている。③は指頭痕を残すものと削られるものがあるが、量的には前者が多い。④は指頭痕である。内耳は大きく2種類認められ、ひとつは板状の粘土を折って貼りつけるもので、他方は断面円形の棒状のものである。①が後者に該当し、他是全て板状のものである。口縁部の形態は、上面が平坦なもの、上面が内傾するもの、丸味をもつもの、口唇部が溝状あるいは段をもつものなどがあるが、①は大半が平坦か内傾するものである。②は丸味をもつものだけであるが③は多種類ある。④はやや内傾する。これらの出土地点は溝を主として様々であるが、各分類のものがまんべなく出土しており、時間的差違を示すものかどうかを明確にすることはできなかったが、②と③の丸底気味のものについては溝上層あるいは表土上部からの出土が多く、かなり新しい時期のものと考えられる。①に分類されるのは図の1~4、9、11、15で②は13、14、③は5~8、10、12、17、18、尚、④は16である。

瓦 (第54図)

全て破片であるが軒丸瓦が2点、軒平瓦が1点、丸瓦が1点、平瓦が42点出土している。13、14はいずれも巴文で、13はその外に界線があり外側は殊文が巡る。丸瓦との接合部は櫛状のもので縦



第49図 摺鉢拓影図



0 10 cm

第50圖 摺鉢拓影圖

に刻みを入れて着けている。径は13が9.6cm、14は7.6cmである。灰色の胎土で全体に粗い。15は軒平瓦で瓦当面が大きく破損しているが、中心飾から唐草状に上方に伸び、そこから下に丸くなる。その先は逆に下方に伸びていくものと思われる。16は平瓦で端面に車の刻印がある。

土人形（第48図 6～8）

6は座った人形の膝の部分である。膝の上にのせた手と袴のヒダがよく出ている。8は顔の上半分である。いずれも中は空洞に作られる。IV区22号溝上面からの出土である。7は手と足の部分が欠失しているが、ほぼ完形である。安座のかっこうの人形で顔の中央部はえぐられている。わずかな彫りによって手足と腹、顔が作られ、背中も腕、肩が彫り出されている。底面に径2mm程の穴があいている。IV区2号土壙から出土した。

羽口（第48図 11 12）

破片であるが2点出土している。いずれもIV区22号溝覆土上面からの出土である。11は先端ではないが内側が熱で赤化している。12は先端部の破片で熱によって溶けている。溶けた部分は黒色のガラス質の光沢があり、気泡状に孔が観察される。

金属製品（第54図）

金属製品の出土数はそれほど多くない。大半は表土中からの出土で時期的に極めて新しい。2はIV区1号土壤からカワラケ片とともに出土した銅製品である。全面に緑青が吹いている。先端に三日月形の小鉄片が横についていたが、遺存状態が悪く、どのようなものは不明である。断面は三角形になるが、薄い方は刃にはならない。むしろ先端についていた鉄片を考えると、柄と考えた方がよいであろう。3はキセルである。IV区4号土壙から出土した。皿はやや台形に近いが首の部分がなだらかに立ち上がるところから、江戸後期頃のものであろう。4は鉄製品である。耳搔状に曲がり先端は丸味をもつ。5～7は釘である。いずれも鍛造品である。6は先端部のみであるが、5は頭が斜めに打ちつめられたような形である。8、9は表土上部からの出土で新しいものと思われるが、9は蓋状のもので中央ツマミの部分は銅が使われており、わずかに緑青が吹いている。この他にIV区4号土壙及び22号溝から鉄滓が出土している。

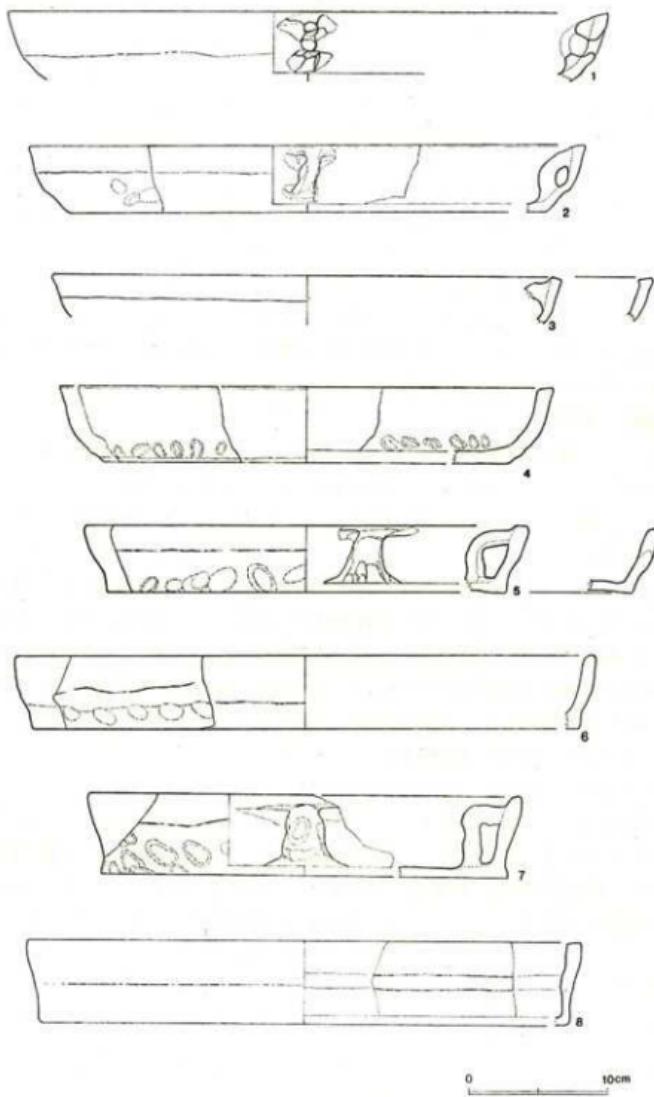
古錢（第58図 第59図）

古錢は36枚出土した。主に土壤からの出土で6枚まとめて出土する例が多い。所謂六道錢として埋納されたものであろう。他は、グリッド、溝跡等からの単独出土であるが、火葬に関連する施設と思われるIV区12号土壤からは骨片とともに焼けた状態で3枚付着して出土した。錢種は永楽通寶と寛永通寶が大半であるが、グリッドから嘉定通宝と元豐通宝が一枚ずつ出土している。

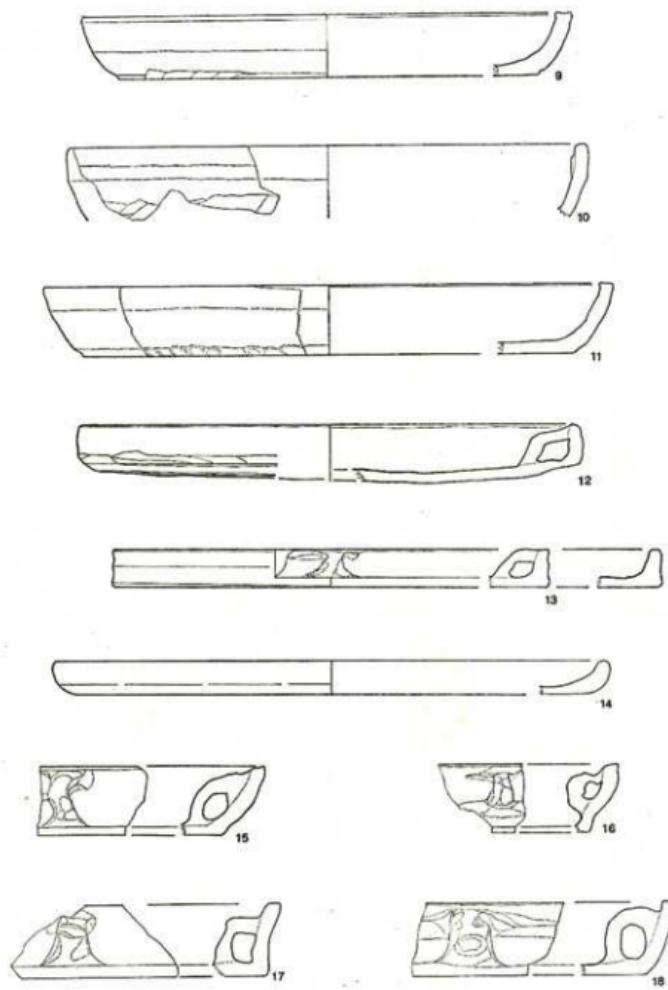
石製品

板碑（第54図 10～12）

主に溝跡を中心に緑泥片岩の破片が出土している。そのうち確実に板碑片とわかるものは図の3点であるが、いずれも小破片で年号等のわかるものはない。10はおそらく種子の一部と思われるが彫りが浅い。11はどの部分になるかわからないが、彫りは浅く断面は箱形である。12はしっかりと彫りで、種子の一部と界線が見られる。

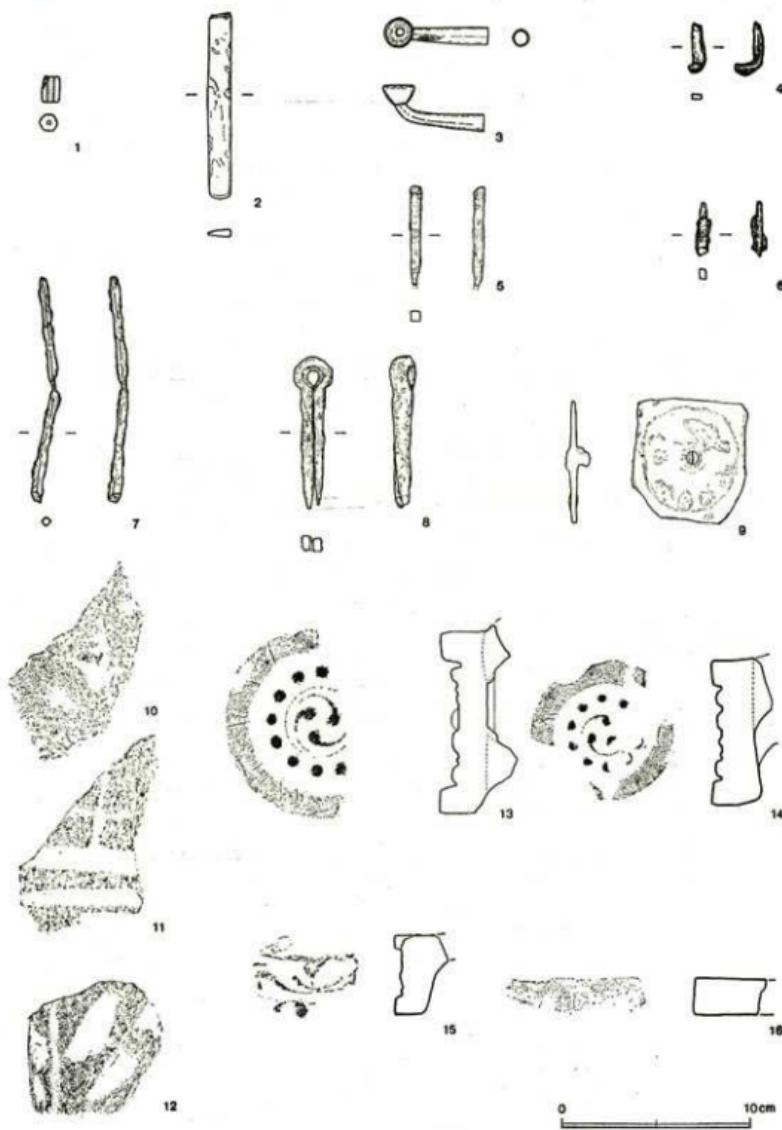


第51図 培格実測図

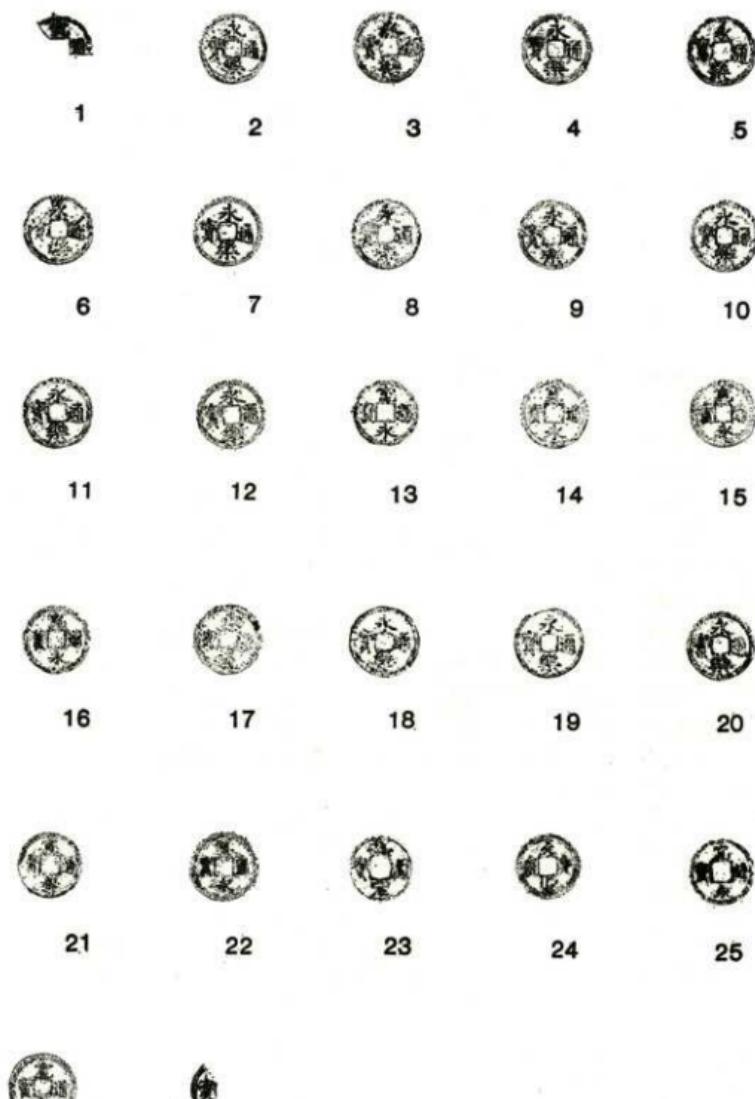


0 1 10cm

第52図 烧 烙 実 検 図



第53図 金属製品、瓦、実測図



第54圖 古錢拓影圖

	錢種	錢徑	穿徑	出土位置	備考
1	寛永通寶	24.3	6	I区、1号井戸	約14枚存。磨耗している。
2	永楽通寶	25.1	6	II区、グリッド	
3	永楽通寶	25	6	" "	
4	永楽通寶	25	6	" "	
5	永楽通寶	25	6	" "	
6	永楽通寶	24.5	6	" "	
7	永楽通寶	24.9	6.1	" "	殆んど腐耗がなく、遺存状態は良好。
8	永楽通寶	24.9	5.9	III区、3号土壤	
9	永楽通寶	24.5	6	" "	
10	永楽通寶	24.9	5.8	" "	
11	永楽通寶	25	6	" "	12とともに3枚付着
12	永楽通寶	24.9	6	" "	
13	寛永通寶	23.9	5.6	IV区、6号土壤	「ス宝」
14	寛永通寶	25	5.9	" "	「ス宝」
15	寛永通寶	23.9	5.2	" "	「ス宝」 2枚付着
16	寛永通寶	24	5.5	" "	「ス宝」 2枚付着
17	永楽通寶	24.9	5.8	II区、グリッド	
18	永楽通寶	25	5.9	" "	
19	永楽通寶	24.9	6	" "	2枚付着
20	永楽通寶	24.1	5.8	" "	2枚付着
21	寛永通寶	22.8	6.5	III区、グリッド	「ハ宝」
22	寛永通寶	25	6.2	IV区、グリッド	「ハ宝」
23	嘉定通寶		6.6	IV区、グリッド	磨耗激しく殆んど潰れている。
24	元豊通寶	23.9	6.3	" "	
25	寛永通寶	23.2	6.8	IV区、4号溝	「ハ宝」
26	寛永通寶	24	5.8	IV区、グリッド	「ス宝」
27	寛永通寶			" "	
28	不 明			III区、グリッド	文字は見られず、4片に割れている。
29	不 明			IV区、12号土壤	焼けて半分程溶けている。3枚付着。

第4表 古銭観察表

砥石 (第55図～第57図)

砥石は形態から大きく5種類に分類することができる。

1類—第55図1・3・5・7が該当する。ちょうど三角形のおむすびのような形が特徴である。使用される面はほぼ全面であるが、三角形となる面が片面だけ使用度が少ないか、あるいは使用されないものもある。石質は凝灰岩かと思われるが、比較的軟質である。

2類—第55図2・4・6・8が該当する。縱長のもので、一端が極端に薄くなる特徴がある。使用面は全面に及ぶが、最も使用されるのは2面で、2のよう内ソギ状になる。石質は凝灰岩あるいは砂岩質のものもあるが、比較的軟質のものである。

3類—第55図9・10・11第56図10が該当する。いずれも欠損品であるが、形状は砲弾を思わせるような量感のあるものである。断面は角の丸い台形で4面が使用され、先端は欠失しているが、鈍く尖るものであろう。石質は2類に似て軟質のものである。

4類—第55図13、第56図125～911が該当する。形状は方柱状である。使用面は4面で両端は殆んど使用されていないが、第56図2は6面とも使用されている。また端部が面取り状に擦りへっている第56図5のような例もある。第56図6は、おそらく切断痕と考えられる櫛目状の痕跡が残る。石質は多種見うけられるが、所謂仕上砥に類するようなものはない。

5類—第56図3・4が該当する。長方形で偏平なものである。使用面は主に平坦面であるが、32では側面及び端面をも使用している。石質は軟質のもので1類に似ている。

6類—第55図12・第57図1～3が該当する。一見不整形で自然石をそのまま使用したかと思われるものである。おそらく使用された度合がまだ少ない段階のものと考えられる。第57図2は破損しているが、幅の狭い工具を研いだと思われ、浅い溝状の痕跡が残る。破片の大きさから推定すると域いは固定して使われたものかもしれない。3は断面三角形であるが、軟らかい石材で一か所だけ使用され、その面は平坦であるが、同一面で未使用の部分が原形のまま残される。

以上極めて大まかに砥石を分類したが、砥石の形状はその使用目的、使用の状態等によって定まってくるものと考えられ、またそのために選ばれるであろう石材等の要素も考慮すると更に分類することもできる。

球状石製品 (第57図 4～7)

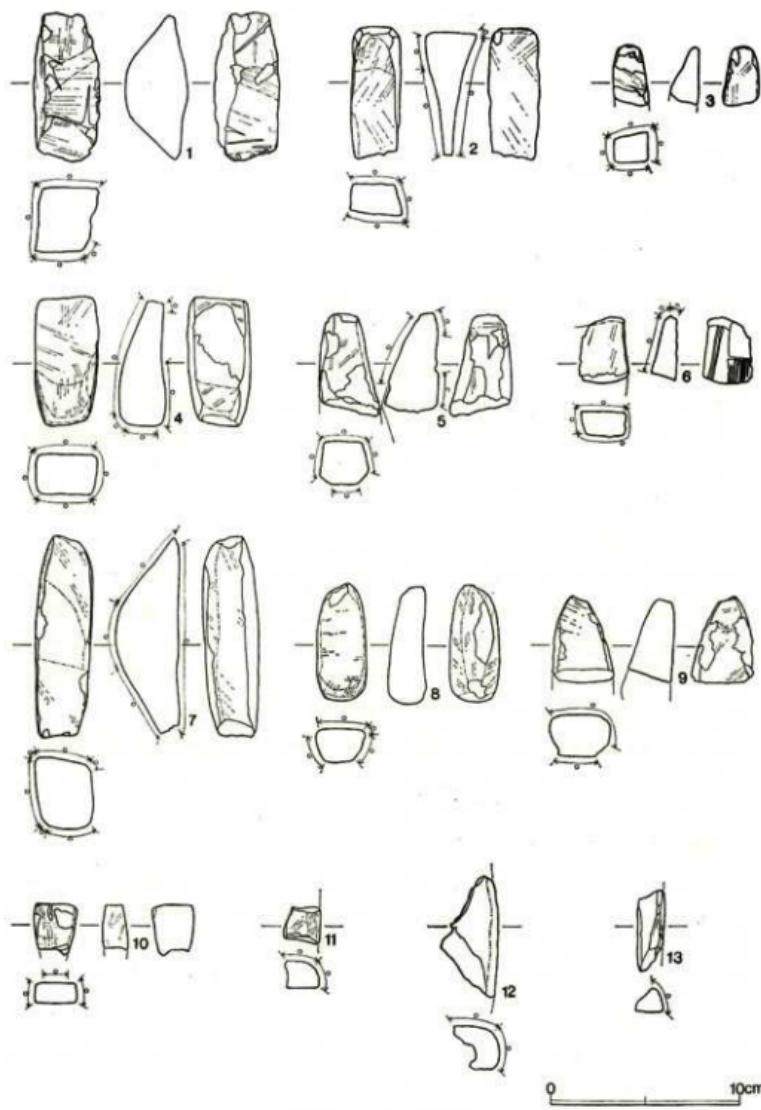
溝中あるいはグリッドから4点出土した。楕円形の円柱状のもの、偏平な円形のものがある。大きさは4が長さ10.4cm、幅4.5cm、厚さ3.4cmで、6は直径2.6cm、厚さ1.2cmである。石質は軟質で軽く多孔質である。4～6は白っぽく4、6は黒雲母を多量に含む。7は黒っぽい。何に使われたものかわからないが、水に入れたところ5を除いて3点は気泡を出しながら沈んだ。

石製品 (第57図 8)

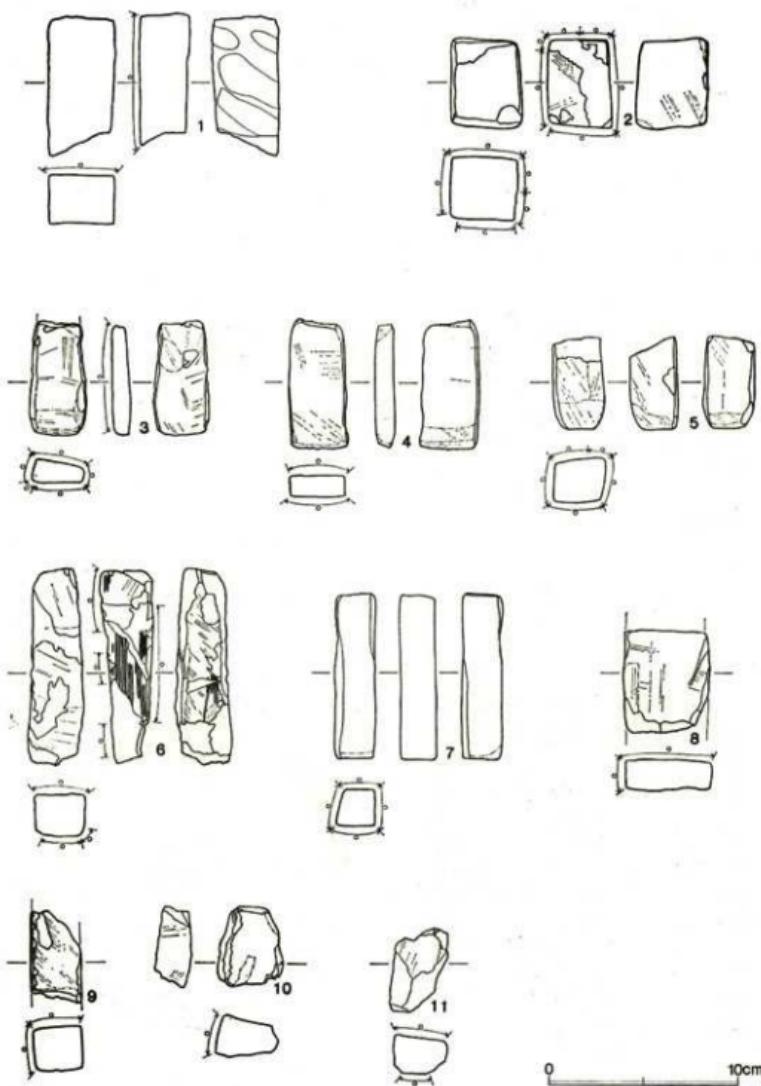
V区3号土壌から貝殻とともに出土した。円柱状で頭部は縁が丸く削られ、下面中央には突起状に削り残しがある。ほぼ中央に「水」の字が彫られている。全体の成形は整状のもので、側面は斜めに、下面是周囲から中心部に向かって斜めに削られている。

その他 (等48図 9・10 第54図 1)

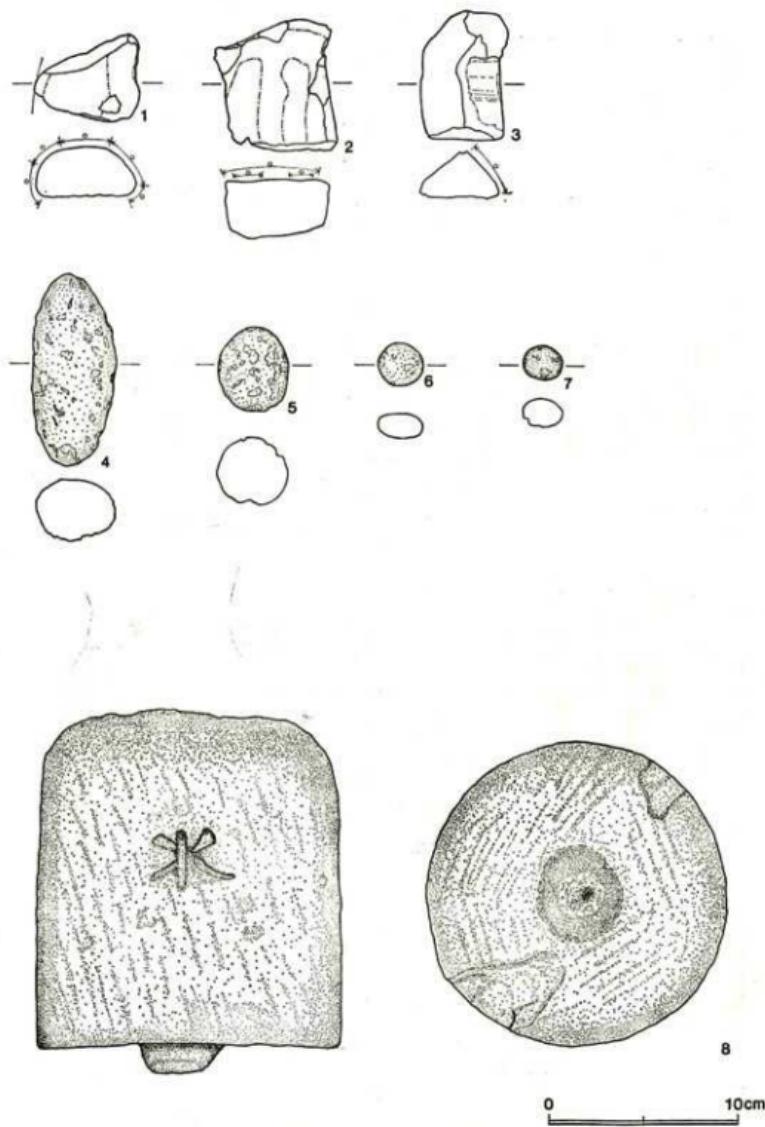
第48図9は陶器の破片を転用したもので角の部分を中心に側面が磨かれている。常滑の甕か壺の



第55圖 破石実測圖



第56圖 砺石実測図



第57圖 砥石、石製品実測図

破片を利用している。I区9Bグリッドから出土した。10は黄白色の胎土で上面にのみごく薄く鉄釉がかかる。破損しているため左側がどのようになるかは不明であるが先端は尖り両側面は笠で斜めに整形される。表裏面とも指頭圧痕が残り、ゆるく上反りする。IV区4号溝から出土した。第54図1は、おそらくガラス製で六角形に面取りされ、径2mm程の貫通孔がある。IV区表採品である。その他にIV区3号溝、22号溝の覆土中から多量の貝殻が出土した。溝底から約10cm程浮いた状態で、土器片とともにまとまって検出されたものであるが、その出土状況から溝が機能を失ってある程度埋まった状態で一括廃棄されたものと考えられる。種類はほとんどがオオタニシであるが、カラス貝のような二枚貝が少量と、海水産の巻貝がわずかに見られる。

縄文式土器（第58図）

本遺跡出土の縄文式土器は極く少数である。早期後半～晩期までにわたっている。

第1群（第58図1） 早期後半鶴ヶ島台式と思われる繊維を含む。屈曲部であり細沈線間に太めの沈線を充填している。

第2群（第58図2～7） 前期土器を一括する。2～4は黒浜式土器である。胎土に繊維を含みRLの縄文が施文される。5～7は諸磯B式、爪形文系の土器である。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

第3群（第58図9～18） 中期後半、加曾利EⅡ式である。9～13は口縁部片で、9～11は口縁下に浅い沈線が配される。14、16～18は胴部片で焼義の磨消し縄紋が配される。

第4群（第58図8、20、21、25） 後期初頭の土器である。8は称名寺Ⅱ式の口縁部である。口縁部が「く」字状に内側に屈曲する。沈線区画内に刺突文を充填する。20、21は横状工具による沈線文を配する。称名寺Ⅱ式から掘之内Ⅰ式に伴うものと思われる。25は掘之内Ⅰ式沈線文系の土器である。19は薄手の土器で菱状のモチーフ内にLRの細かい縄紋を充填する。掘之内Ⅱ式である。

第5群（第58図22～24、26、27） 晩期安行系の土器を一括する。23、24、26、27は安行ⅢC式、22は安行Ⅲd式と思われる。

28、29は怪の小さい底部片である。時期不明。

（橋本 勉）

石器

今回の調査で出土した石器は、総数10点であったが、全て遺構に伴うものではなく、所謂単独出土あるいは他遺構への混入であった。

ナイフ形石器（第59図1） 石質は黒曜石で縦長剝片を素材とし、打面を残している。調整加工は左側縁に施されている。

尖頭器（第59図2） 両端を欠損しているが、薄手で形状が整ったものである。このような尖頭器には安山岩製のものが多く、蓮田市内でも帆立遺跡から出土している。

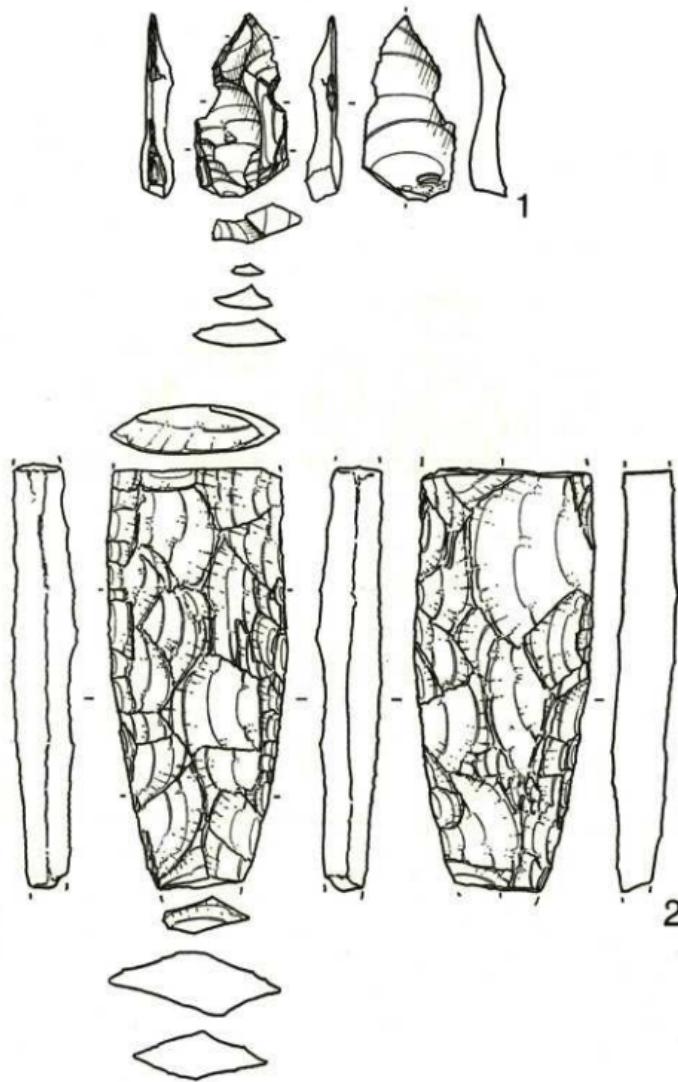
グレイバー（第61図6） 石質は頁岩である。片面に自然面を大きく残し、表面及び両側面に单設からの剥離痕が見られ、先土器時代の残核と思われる。また下部にフルーティングが一本入っており、残核利用のグレイバーと考えられる。

石鏸（第60図3・4） 石質は2点ともチャートである。5は基部を欠損している。

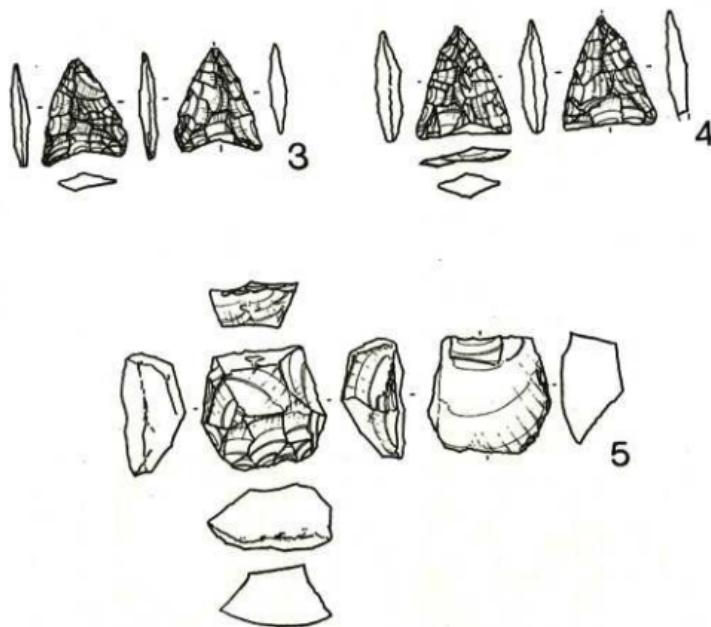
スクレイパー（第60図5、第62図7） 6は石質はメノウである。小形の剝片を素材とした



第58圖 繩文土器拓影圖



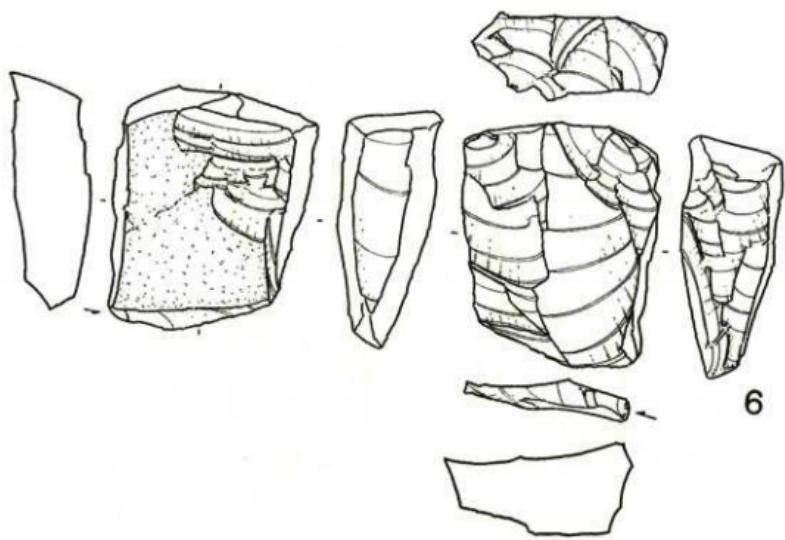
第59圖 石器実測図



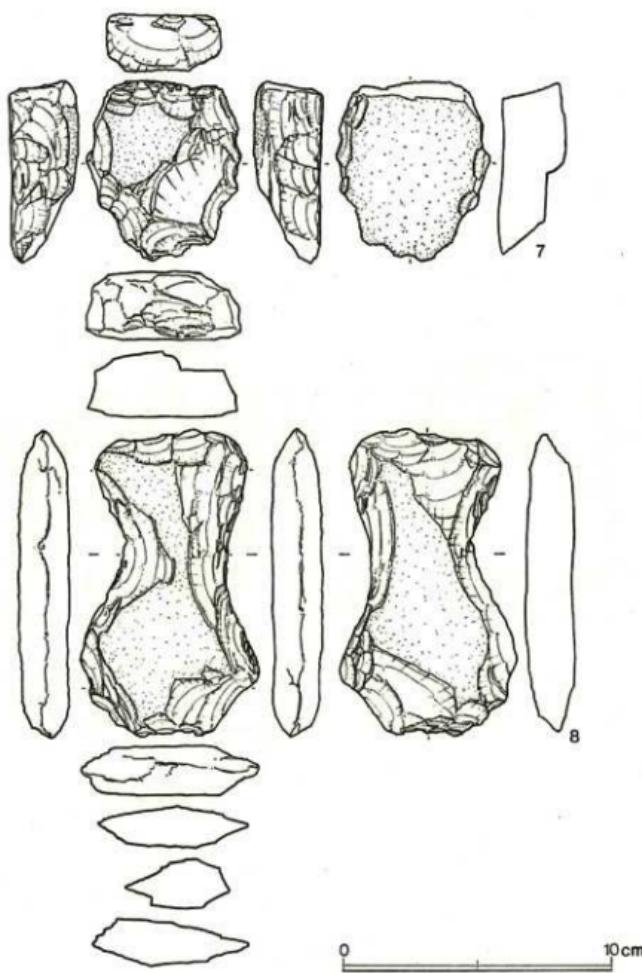
第60図 石器実測図

	石器名	石質	長さ	幅	厚さ	重さ
1	ナイフ形石器	黒曜石	3.3	1.7	0.7	2.24
2	尖頭器	安山岩	(7.5)	3.3	1.2	(32.03)
3	グレイバー？	頁岩	4.6	3.9	1.9	41.42
4	石鍬	チャート	1.9	1.6	0.35	0.57
5	〃	〃	(2)	1.7	0.5	1.11
6	スクレイバー	メノウ	2.2	2.3	1.2	0.68
7	〃	砂岩	6.7	5.9	2.6	14.38
8	打製石斧	〃	11.5	6.7	2	172.31
9	石鍤		5	7.1	1.5	72.94
10	すり石		10.6	7.2	2.8	482.

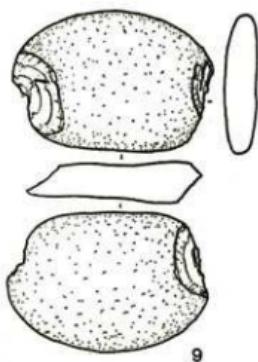
第5表 石器観察表



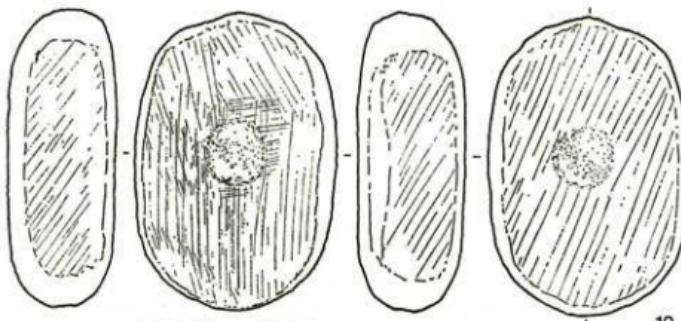
第61図 石器実測図



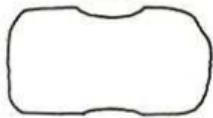
第62図 石器実測図



9



10



0

10cm

第63図 石器実測図

片面加工のものである。両面に自然面を残し、頭部は一回の剝離によって平坦面を作り出している。刃部と思われる調整加工は裏面からの急角度の剝離によって作り出されており、平面形は鋸歯状を呈している。

打製石斧 (第62図 8) 石質は砂岩製であり両面に自然面を残している。体部は浅く括れ、頭部に対して刃部の方が少しではあるが幅が広がる。左右は対象形を呈し、所謂撮形石斧である。刃部前面は直刃であり、両刃加工が施されている。

石錘 (第63図 9) 楕円の偏平疊を素材とし、その長軸に剝離調整を施したものである。埼玉県では、石錘の出土例は決して多い方ではないが、県東部では見られるようである。

すり石 (第63図 10) 両面に条痕を残し、平坦に擦れている。また左右両側面も平坦に擦れしており、平面形は御弁当箱状になっている。両面のほぼ中央に浅い凹みが見られる。

(西井幸雄)

区	遺構名	青磁	白磁	染付	陶器	内耳土器	カワラケ	瓦	羽口	土製品	繩文	砥石	板碑	石器	石製品	古銭	鉄製品	その他
I	2号井戸									1	1							
	4号	"																
	3号	"																
	6号不明遺構					1		2								1		3
	7"										4							
	13"										1							
	18"										1							
	22"																	
	36"																	
	38"																	
	46"											2			1			
	53"														1			
	58"														1			
	59"																	
	P1																	
	P9														1			
	P24																	1
	4B-1e グリッド																	
	6C-1c "																	2
	9B-3c "																	
	9B-3d "																	
	9B-4c "																	
	9B-4d "																	
	9B-5b "																	
II	2号溝																	
	3"																	1
III	1号溝	1		2	21	33	83					9	3	8	8	3	4	18
	1号土壙					2											1	
	2"					1											1	
	3"																1	
	4"																4	
	6"																1	
	7"																4	
	14"																	
	1号井戸																	
	4"																	
	1号不明遺構																	
	2"																	
	3"					3	1	2								1	3	4
	21B-5a グリッド														1			
	22B-5e "											2						
	22C-1e "											2						
	22C-2c "											3					1	

区	造構名	青磁	白磁	染付	陶器	内耳土器	カワラケ	瓦	羽口	土製品	調文	砥石	板碑	石器	石製品	古錢	鉄製品	その他
III	22C-5 b グリッド						1											
	22C-5 c "																	
	23B-1 e "				1	1	1				1						2	
	23B-2 a "					1	2									1		
	23B-2 b "															1		
	23B-2 e "																	1
	23B-3 a "					1	2											
	23B-3 b "						1	1										
	23B-3 c "																	
	23B-3 d "																	
	23B-4 a "																	
	23B-4 b "																	
	23B-4 c "																	
	23B-5 b "																	
	26C-2 c "																	
	26C-3 c "																	
	26C-4 d "																	
	27B-5 c "																	
	27C-2 b "																	
IV	1 号溝	9	16	21	5	3			1	1	3					2	3	
	2 "	16	14	11	2	5				1	1				9	1	1	
	3 "	6	22	96	19					3	1	3			7	4	5	
	4 "	181	100	88	10	8				5	2	11			23	2	3	9
	5 "	2	5	4			2						1		1	1	2	1
	6 "	2	1			1						1		1	1			
	11 "			2	2													
	12 "			1														
	13 "			2	1													
	14 "			1														
	15 "			1	2													
	16 "			2	4	2												
	18 "					2												
	19 "																	
	20 "																	
	22 "	1	7	10	9		1		1	3	4		6		15		21	7
	2号井戸			44	98	181	26	1	1				1					4
	3 "						4	2										
	10 不明造構																	
P	18															1		
P	75														1		3	1
1	号土壙																	
3	"																	
14	"																	
30	"																	
32	"																	

区	遺 様 名	青 磁	白 磁	染 付	陶 器	内 耳 土 器	カ ワ ラ ケ	瓦	羽 口	土 製 品	繩 文	磁 石	板 碑	石 器	石 製 品	古 銭	鐵 製 品	そ の 他
N	29C-2b グリッド					1		1										1
	29C-2d "				1		1	1										
	29C-3a "					1												
	29C-3d "					1												
	29C-4d "					1												
	29C-4e "				1	2	1											
	29D-1a "					1												
	29D-5a "																1	
	29D-5b "															1		
	30B-1c "			1														
	30B-2a "				1													
	30B-3b "			1	1	1												1
	30B-4b "																1	
	30B-5a "						1										1	
	30B-5b "					1		1									1	
	30B-5c "						2	1										
	30B-5d "					2		1										1
	30C-1a "			1	1													
	30C-5e "			1	1													1
	30D-2a "																	
	31A-2e "										1						1	
	31A-3e "			1														
	31B-1a "																	
	31B-1d "				1													
	31B-1e "																	1
	31B-2a "																	2
	31B-2c "					1												
	31B-2d "					1	5											
	31B-3a "					1	1											
	31B-3b "							1										
	31B-3d "					1		2										
	31B-3e "					1												
	31B-4b "																	
	31B-4c "																	
	31B-4d "																	
	31C-1e "					1			1									
	32A-4e "					1	3		1				2		1			
	32A-5e "						1											
	32B-4e "				2	4												1
	32B-5a "																	
	32C-3d "																	
	32C-5a "																	
	33A-1e "																	
	33A-2e "					3	2											
	33A-4e "																	
	33B-1a "						1											
	33B-1d "						1											

区	造 構 名	青 磁	白 磁	染 付	陶 器	内 耳 土 器	カ ワ ラ ケ	瓦	羽 口	土 製 品	繩 文	砥 石	板 碑	石 器	石 製 品	古 銭	鉄 製 品	その 他
N	33B-1 e グリッド														1			
	33B-2 a "																	
	33B-2 b "					1		1										
	33B-2 c "																	
	33B-2 d "					2		1										
	33B-2 e "																	
	33B-3 a "					1	1											
	33B-3 b "					1												
	33B-3 d "																	
	33B-3 e "					1	1											
	33B-4 b "					1												
	33B-4 e "																1	
	33B-5 c "					1	1	1										
	33B-5 d "					2		2										1
	33B-5 e "					1												
	33C-1 b "							2	2									1
	33C-1 c "					2		2	1									
	33C-1 e "							1	1									
	33C-2 b "					2		1										
	33C-2 c "							1	1									1
	33C-2 d "							2	3									
	33C-2 e "					2		3	6									
	33C-3 b "							2	2	1								
	33C-3 c "					1		2	1									
	33C-3 d "					1	2	1									1	
	33C-3 e "					3	5	8	2								1	
	33C-4 a "							1	1								1	
	33C-4 b "								1	1								
	33C-4 c "							1		1								
	33C-4 d "					1			5									1
	33C-4 e "					1												
	33C-5 c "								3									
	33C-5 d "					1	3	2										
	33D-2 a "					2	16	8	1		1							2
	33D-2 b "								1									
	33D-3 a "					5	4	19	3	1						2	1	2
	34A-5 e "							1	1									
	34B-4 e "																1	
	34B-5 a "									1								
	34B-5 e "																	1
	34C-1 b "																	
	34C-1 c "					1	2	2										
	34C-2 b "								1									
	34C-2 c "								1									
	34C-3 b "							2	1									
	34C-4 b "															1		
	35B-1 a "					1	1	2										

区	遺構名	青磁	白磁	染付	陶器	内耳土器	カワラケ	瓦	羽口	土製品	繩文	砥石	板碑	石器	石製品	古銭	鉄製品	その他
N	35B-1 d グリッド				1													
	35B-2 a "		1															
	35B-2 b "				1	2												
	35B-2 c "																	
	35B-3 b "								1									
	36B-1 a "								1									
	36B-1 b "							1										
Y	1 号溝				33	18	25	56	5							9	1	4
	2 "				41	29	19	1	13							11	9	3
	3 "				7	1			1							3	1	
	4 "																	
	5 "					2												
	P 10																	
	P 17																	
	39C-5 a グリッド	1				1	1											
	39D-5 b "		1														1	1
	40C-4 e "																	
	40C-5 e "																	
	42C-2 b "																	
	43C-4 e "																	
	43C-5 d "																	
	43D-3 b "					1	1											
	43D-4 a "																	
	43D-5 a "																	
	44C-2 b "																	
	44C-3 a "																	
	44C-4 a "																	
	44C-5 a "																	
	44C-5 c "																	
	44D-1 b "																	
	45C-3 e "																	1
	45C-4 a "																	
	45C-4 b "																	
	45D-3 b "																	
	45D-4 a "						1											
	45D-4 b "						1										1	
	45D-5 a "					2	1											
	45D-5 b "					1												1
	46B-1 e "							1										
	46B-2 b "																	
	46B-3 b "																	
	46B-3 d "														1			
	46B-3 e "														1			
	46B-4 d "														2			
	46B-5 b "						1								1			
	46B-5 e "					1	1								1			

区	遺構名	青磁	白磁	染付	陶器	内耳土器	カワラケ	瓦	羽口	土製品	繩文	砥石	板碑	石器	石製品	古銭	鉄製品	その他
V	46C-1 a グリッド									1								
	46C-2 d "									1								
	46C-2 e "									3								1
	46C-3 a "									1								
	46C-3 b "									3								
	46C-4 a "									1								
	46C-4 b "									3								
	46C-5 a "									1								
	46C-5 b "									1								
	46C-5 d "									1								1
	46D-2 a "									1			1					
	46D-3 c "									1			1					
	46D-4 a "									1			1					
	46D-4 c "									1			1					
	47B-1 c "									1			1					
	47B-1 d "									1			1					
	47B-1 e "									1			1					
	47B-2 c "									1			1					
	47B-2 e "									1			1					
	47C-1 a "									1			1					
	47C-1 e "									1			1					
	47C-2 a "									1			1					
	47C-2 c "									1			1					
	47D-2 b "									1			1					
	47D-3 a "									1			1					
	47D-3 b "									1			1					
	47D-4 a "									1			1					1

第11表 出土遺物数量表 6

結 語

本遺跡において検出された遺構は土塁4基、掘立柱建物跡13棟、井戸跡13基、溝跡34条、土壌39基、その他性格不明の遺構である。遺物は、陶磁器、土師質土器皿、内耳土器、砥石、板碎片、鉄製品、鉄滓、自然遺物等多種あり、中世～近代までの遺物が殆んどである。他に織文土器、石器がわずかに出土したが、グリッド或いは新しい時期の溝等からの出土であり直接それらの時期に結びつく遺構は確認されなかった。

遺構ではW区で検出された土塁を中心とする館跡と考えられるものが中心となろう。ここでは土塁と溝、溝と溝との間に重複関係が認められ少なくとも2時期の変遷があったことが確認された。これらの重複関係をまとめると以下のようになる。



これらの関係から考えられるそれぞれの存続関係（時期差）を第64図に示した。

第Ⅰ期は比較的規模の小さな溝が構築された時期で土塁はなかったと考えられる。20号溝、21号溝については1号溝によって切られているため方向がどうなるかは不明である。また両溝が直接つながるとは考えにくい。また建物等の施設については直接この時期と結びつく遺物等はないが2号建物跡と1号柵列について同時存在は考えられず、1号柵列についてはその方向性から1号溝跡に伴うものと考えられるため、2号建物跡は一応この時期のものと考えておきたい。Ⅰ期の時期の決定に直接結びつく遺物は出土していないが、22号溝がある程度埋まった段階に廃棄されたと考えられる遺物の中に大窯期の擂鉢や龍泉窯系と考えられる青磁片などが検出されていることから室町期まで上ると考えられる。

第Ⅱ期は土塁が構築され、1号、2号、4号の各溝が掘られた。16号溝については土層の観察では重複は認められなかったが5号溝との接続部で反対側の壁が立ち上がるのことから、両期を通じて存続したと考えざるを得ない。土塁は、竹根等によってかなり荒れた状態であったが、版築等の痕跡は確認できなかった。第Ⅱ期の年代については積極的な根拠はないが、一応戦国期と考えておきたい。これらの遺構の廃絶の時期については皆目見当がつかないが、溝内から出土する染付等の出

土状況から江戸後期には既に廃絶して埋没しつつあったことは確かである。

他の区についてはⅢ区4号井戸出土の灰釉平碗や1号土壙出土の常滑窯片、その他永楽通寶を出土している土壙は室町期のものと考えられる。Ⅰ区においても9BグリッドからⅣ区出土のものと同様の青磁片が出土しており、おそらく7号、8号建物跡が、工期に該当するものであろう。

また、Ⅳ区の遺構については、その特徴から、広い意味で館跡の一部としてとらえておきたい。先に述べたように、本遺跡に近接して松原堀之内がある。「日本城郭大系」(1979)では、「新編武藏風土記稿」所載の記事から、ここを黒須氏館としている。年代については、同記事から永正16年(1519)以前が求められるが、これは、本遺跡で出土している遺物の時期にも一致するものである。尚、現在でも付近には、黒須を名のる家が何軒かあり、興味のもたれるところである。また今後の問題として、本遺跡と松原堀之内が同一、或いは密接な関係をもつと考える場合に、その距離が約400m程であることなどから、縄張り等の問題を追求していく必要があろう。

建物跡について

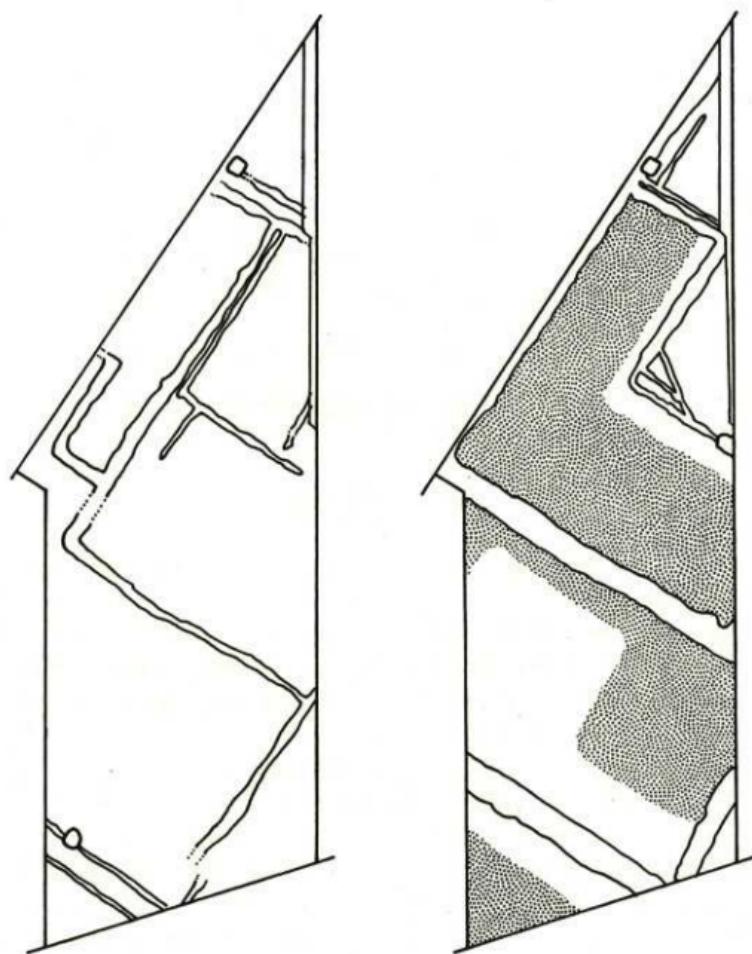
本遺跡Ⅰ区において、近世の建物の間取りをもつと考えられる遺構が検出された。近世の遺跡の発掘例は近年増加する傾向にあり、その調査報告もなされてきているが、それらは主に文献等に現われる著名なものが多く、その性格も支配者層のものが多い。従って一般民家跡等の解明はまだなされていない現状にあるといつても過言ではなかろう。ここでは本遺跡を含めて一連の国道122号バイパスの調査によって検出された一般民家跡と考えられる建物跡について紹介しておく。

国道122号線関係で検出された建物跡は本遺跡で4棟、久台遺跡で3棟、さらなら遺跡で1棟である。さらなら遺跡ではⅢ区北側で柱穴群が検出された。柱穴には大小があり建て替えがあったことが窺われる。報告では4間×5間の側柱式建物が報告されているが、この建物と若干方向のずれる建物がもう1棟考えられそうである。その推定図を第65図に示したが、土間空間の広い右勝手の住いであったと思われる。周囲の溝との関係は明確ではないが、おそらくこれらの建物と大差ない時期のものと考えられる。建物の右奥に張り出した部分に溝が入り込んでいるが、この部分を「流し」などの水を使う部分と考えることもできよう。井戸については報告されている建物に伴うものと考えられているが、位置的にはこの建物に伴うものとも考えられる。座敷部分は1間でおそらく板張りであったと考えられるが約10畳ほどの広さである。

この建物については、南面西側に1間分とび出す柱穴があること、「流し」と考えた部分が張り出していることから本来この建物が図のようにおさまるものであれば「流し」部分の拡張も考えられるであろう。また、或いは西側及び北側部分が消滅している可能性も考えられる。時期については、明確には断言できないが、溝中から出土している遺物から江戸後期頃であろう。

久台遺跡Ⅱ区SB2はよくまとまった建物跡で増築された可能性のあることが報告されている。建物は東西棟で南側が入口になる右勝手のものと考えられる。左に座敷が2間あり、「あがりはな」と「勝手」が設けられ土間部分には、味曾部屋等の空間が確保されて比較的整った形を示している。

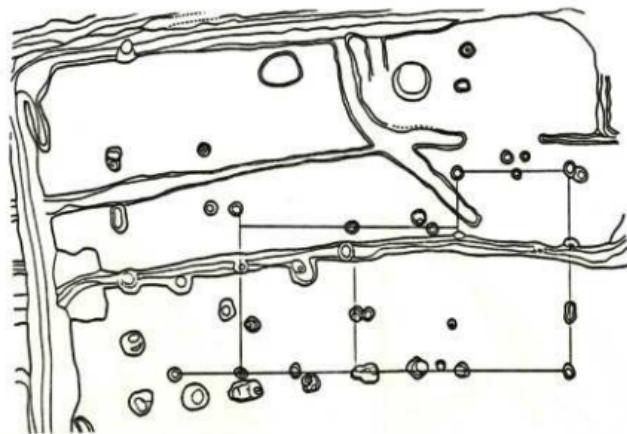
同じく久台遺跡Ⅲ区のSB1、2、SB3は近接して検出された。SB1、2は重複しているが、いずれも単純な形で倉庫風のものである。SB3は規模の小さい建物で単純な構造をもつと考えられ、座敷1間に他の空間が若干付随する程度と考えられる。この建物跡が民家跡であるとする考え



I 期

II 期

第64圖 變遷圖

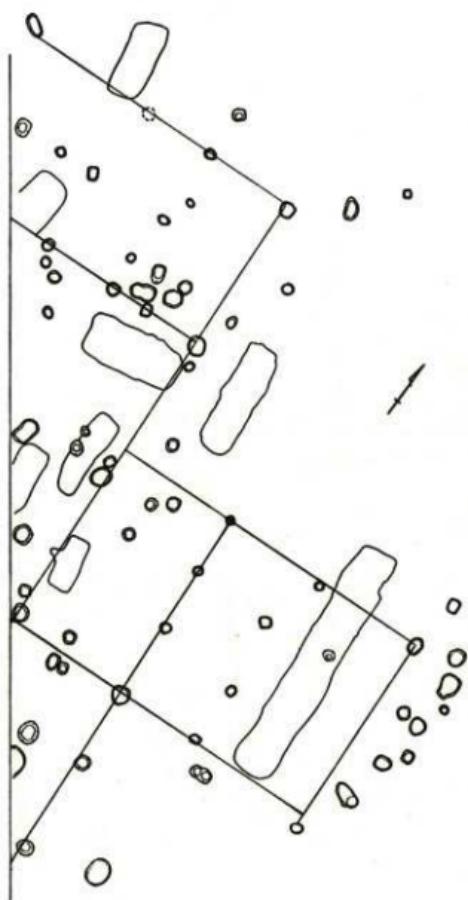


第65図 さら遺跡建物跡

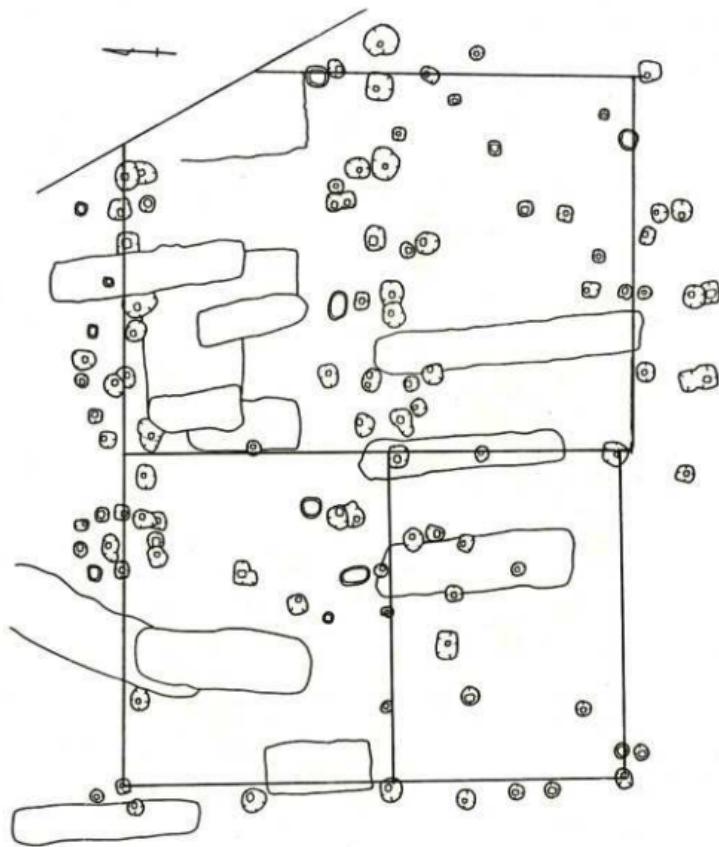
方が許されるならば、構造の単純なことや規模の小さいことなどから古い時期の遺構であるといふことも推察される。

本遺跡Ⅰ区1号建物跡は多数の柱穴が散在しているが、おそらく建物の北東部分になるものと考えられる。母屋部分の大半は調査区外になるものと考えられるが、北側及び東側に張り出す部分は後に拡張されたものであろう。検出された部分だけでは間取り等の推定は困難である。また柱穴が多いことから建て替え或いは別の建物があったことも考えられる。

5号建物跡は、7号、8号建物跡と重複しているが東西棟南側入口の右勝手の家である。向かって左側に2間ほど座敷があり、入口を入ってすぐ左側に幅約1.2m(4尺)の「あがりはな」があったと思われる。全体に座敷部分よりも土間部分の方がいくらか面積が広くとられている。また5号建物跡の存在する9Bグリッド付近には2、3、4号建物跡等がまとまって存在し、全体としてひとつのブロックを形成している。5号建物跡を中心にして9Cグリッドに4号建物跡が5号建物跡に棟方向をそろえて存在し、7Cグリッドには4号建物跡とほぼ同規模の2号建物跡がある。建物の方向は4号、5号建物跡には直角になる。更に6Bグリッドには1号柱穴列が東西に走り、これより南側には1号建物跡付近の柱穴群まで、柱穴は1個もない。このようにみてくると5号建物跡を中心として倉庫風の2号、4号建物跡を配置し、南側を柱穴列で限ったひとつの敷地がうかびあがってくるのである。これらの特徴は、現存する民家農家の敷地に共通する要素が窺われるものであり、今後、中近世の一般庶民の生活実態を追求するにあたっては、これらの遺構の解明が必要となろう。



第66図 I区1号建物跡



第67圖 1區5號建物跡

引用参考文献

- 浅野晴樹 「埼玉県出土の中世陶器(1)・(2)」 埼玉県立歴史資料館研究紀要 1981、1983
- 池田大輔 「多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書」 1977
- 磯崎一 「富士塚前遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第43集 1981
「下宿間遺跡」 " 第42集 1980
- 井上喜久男 他 「世界陶磁全集3、日本中世」 小学館 1977
- 宇田川洋 他 「青戸、葛西城跡Ⅱ区調査報告」 1976
- 大江正行 「清里・陣場遺跡」 1981
- 大宮市 「大宮市史」 第2巻、第5巻
- 大三輪龍彦 「東勝寺遺跡発掘調査報告書」 1977
- 小野義信 「菅谷館跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第6集 1977
- 小俣悟・高木文夫 「長宮遺跡第8次の調査」 上福岡市遺跡調査会報告書第1集 1982
- 小川良祐 他 「長宮遺跡」 1978
- 蟹江康子 「尾崎遺跡」 1982
- 小林博範・小島正裕 「多摩ニュータウン遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集 1982
- 埼玉県教育委員会 「埼玉の館跡」 1968
- 酒井清治 「久保山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集 1983
- 坂本雅彦 他 「白山四丁目遺跡」 1981
- 塩野博 「武藏加納城跡」 1968
- 鈴木定明 「館林・水戸・花前Ⅱ-1」 1982
- 住谷昭洋 「伊勢塚・東光寺裏」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 1980
- 佐々木達夫・佐々木花江 「動坂遺跡」 1978
- 谷井彪 「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告第23集 1979
- 東京国立博物館 「日本出土の中国陶磁」 1978
- 中島岐視生 「山口城跡」 所沢市文化財調査報告書第7集 1981
- 中村倉司 「内耳土器の編年とその問題」 『土壤考古』 初刊号 1979
- 船崎彰一 「16世紀の美濃陶」 『島根県立博物館調査報告』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「草戸千軒町遺跡」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1977
- 藤原高志・宮昌之 「さら・帆立・馬込新屋敷、馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
第24集 1983
- 松本富雄・他 「川崎遺跡」 1975
- 安岡路洋 「片柳南部遺跡群発掘調査報告書」 1982
- 柳田敏司 「日本城郭大系5」 1979
- 横川好富 「馬込、加倉、平林寺」 埼玉県遺跡発掘調査報告
- 吉川國男「住居の歴史」 真珠書院 1969

付 編

閻戸足利遺跡出土鉄滓の金属学的調査

(大澤正己)

1. 概要

閻戸足利遺跡は、埼玉県蓮田市大字閻戸足利に所存し、中・近世に比定される。この遺跡内の溝遺構より多量の貝殻（オオタニシ）や土器片らと共に鉄滓31点が出土している。埼玉県埋蔵文化財調査事業団より鉄滓8点の調査依頼を受けたので、鉱物組成や化学組成の調査を行なった。その結果、出土鉄滓はいずれも鉄器鍛造過程で鉄素材を加熱した時に排出された鉄滓で、鍛錬鍛冶滓（加工鍛冶滓→小鍛冶滓）に分類されることが判明した。

すなわち、鉄滓の鉱物組成はウースタイト (Wustite : FeO) + フェアライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) で構成されて鍛冶滓特有の晶癖を示し、化学組成は全鉄分 (Total Fe) が49~57%と多い目で、二酸化チタン (TiO₂) 0.1~1.07%、バナジウム (V) Nil~0.020%と両者が低目で、これも鍛冶滓の成分配合である。ただし当遺跡出土鉄滓は全般に造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) が25.8~41.8%と多いことを特徴としており、鍛冶に供した素材はかなり鉄滓成分を残した粗鉄塊であったろうと推定される。場合によっては偏析成分調整を目的とした大鍛冶的な精錬鍛治を省略した工程の可能性も考えられる。また鍛冶に際しての送風条件もかなり安定したものであつたらしく、ガラス質を主体とするスラグも混在していた。なお、このガラス質スラグ中に残留した金属鉄は、極低炭素鋼（炭素量：0.01%前後）であり、含有された非金属介在物からチタン (Ti) 分が検出されることから製鉄原整は砂鉄であったことが実証された。

閻戸足利遺跡周辺の何処かに小鍛冶遺構が存在したものと推定されるが今回の調査ではそれは確認されていない。

2. 供試材と調査方法

2-1 供試試料

調査鉄滓の出土位置と調査項目を Table 1 に示す。

2-2 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 光学顕微鏡組織
- (3) S, E, M (Scanning Electron Microscope) による走査X線像とエネルギー分散型半導体検出器を駆使しての非金属介在物の局所分析。
- (4) マイクロビッカース断面硬度
試料F-18の金属鉄部分の硬度測定。荷重は500gをかけて測定
- (5) 化学組成

3. 調査結果

Photo, 1～3 に光学顕微鏡組織を、Photo, 4 に鉄滓中に残留した金属鉄中の非金属介在物について SEM (走査型電子顕微鏡) による走査 X 線像とエネルギー分散分析結果を示す。

Table, 2 には、閔戸足利遺跡出土の鉄滓と共に比較参考資料として埼玉県下遺跡出土の椀形鍛冶滓及び猿貝北遺跡出土の砂鉄製鍊滓らの分析結果を提示した。

また、Table, 3 には F-18 鉄滓中に残留した金属鉄部分のマイクロ・ビッカース断面硬度を測定した結果を記載している。

(1) 肉眼観察

調査鉄滓 8 個のうち、5 個が外観からみて小鍛冶炉の底部に集積した鉄滓で、椀形滓と見分けられる形状である。この椀形滓らは薄く偏平で、よく見かける底部が半球状橢円形タイプのものではない。1 回当りの鍛冶処理量が左程多くなったことが予測される。椀形鍛冶滓の表皮は、赤褐色ないし茶褐色を呈し、比較的なめらかな肌から粗鬆なものまであり、なかには木炭痕を残すものまで見受けられる。裏面は高温で青灰色に変色した炉材粘土を付着したものから小波状の凹凸を有するものがある。また、破面は黒色コーカス状の多孔質から茶褐色緻密質まであるが、前者の方が多い。以上の試料は、F 8、F 12、F 16、F 27、F 28 である。なお F 11 も周縁部を欠失するが椀形状になるであろう。

残り 2 個は、茶褐色ガラス質スラグで鉄分が少なく軽い鉄滓である。裏面は赤色から青灰色炉材粘土を付着していて、羽口直下の高温個所で溶融した状態を呈しており、断面は多孔質である。

(2) 顕微鏡組織

Photo, 1～3 に示す。外観的に椀形状を呈した F 5、F 11 (椀形滓の破片として分類) F 12、F 16、F 27、F 28 らの鉱物組成は、白色粒状のウスタイト (Wustite; FeO) が多量に晶出し、これに灰色長柱状結晶のフェアライト (Fayalite; 2FeO · SiO₂) が共存する。なお地は暗黒色ガラス質スラグである。このウスタイト + フェアライトの構成鉱物は鍛冶滓特有の晶癖である。

なお、Photo, 1 の最下段に示す F 11 鉄滓の鉱物組成は、フェアライト主体でウスタイトの晶出がみられない。これは椀形鍛冶滓の底端部によく観察される組織であり、特異組織ではないが、参考までに掲示しておいた。

F 5 (Photo, 1 の 1 段目) 及び F 18 (Photo, 2 の 2 段目) はガラス質スラグを主体とするもので鉄分の少ない鉱物組成である。白色多角形で微小結晶のマグнетライト (Magnetite; Fe₃O₄) がわずかに存在する。

F 18 のガラス質鉄滓中に金属鉄が残留していた。Photo, 2 の 3 段目研磨まで腐食 (etch) なしの非金属介在物を示す。非金属介在物とは、製鍊や精錬過程で除去しきれなかった非金属粒子や脱酸生成物であり、鉄 (Fe)、マンガン (Mn)、けい素 (Si)、および磷 (P) などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称であるが、当介在物はけい酸塩系である。介在物の同定結果は SEM で述べる。

Table 1 供試鉄滓の履歴及び調査項目

符号	供 試 鉄 淬			出土位置	推定年代	調査項目			
	外 规	サイマー (mm)	重量 (g)			顕微鏡 組織	化学 分析	SEM EDAY	ビニカ ース断 面硬度
F 5	炉壁付着ガラス質鉄滓	45×60×25	58			○	○		
F 8	偏平 梗形 鋳治滓	60×60×12	55			○	○		
F 11	鋳 治 淬	70×33×10	65			○	○		
F 12	鋳 治 淬	65×55×25	118		中～近世	○	○		
F 16	梗 形 鋳 治 淬	75×55×20	115			○	○		
F 18	含 鉄 鋳 治 淬	58×38×20	51			○	○	○	○
F 27	偏 平 梗 形 鋳 治 淬	80×65×20	127			○	○		
F 28	偏 平 梗 形 鋳 治 淬	60×60×15	650			○	○		

Table 3 金屬鉄のマイクロピッカース硬度値

符 号	試 料	炭 素 含 有 量 (%)			硬 度 値					
		炭 化 物	検鏡結果	化 学 分 析 値	1	2	3	4	平均値	
F 18	鉄滓中の金属鉄	細状セメントタイト	0.01前後	—	85	88	91	90	88.5	
DAI3	鐵鑄：鍛造品	パーライト	0.02~0.5	0.95	129	126	132	—	129	
参 考 値 4	獸脚：鍛造品	パーライト+セメントタイト	鍛造組織	2.32	624	636			630	
6	容器状鉄器：鍛造品	パーライト+セメントタイト	〃	4.03	616	613	581	648	615	

※大澤正己「台耕地遺跡出土の製鉄関係遺物の金属学的調査」『台耕地』 1984

%と全般的に低目である。

次にガラス質を主体とする鉄滓(F 5、F 18)は、全鉄分(Total Fe)が少なく8.05~23.6%で、造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)は逆に多い目で68.1~85.7%である。二酸化チタン(TiO_2)0.87~1.07%、バナジウム(V)0.02~0.021%で大きな変動がなく、他の随伴微量元素らも梗形鍛治滓グループと大差ない。

この様に梗形滓タイプとガラス質スラグを主成分とする鉄滓は、製錬滓→(大鋳治滓)→鍛錬鍛治滓(加工鍛治滓→小鋳治滓)の工程を経ているので、二酸化チタン(TiO_2)以下の随伴微量元素らは成分濃度がうすまっていて、製錬滓に比べると大幅減少である。

しかし造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$)のみは成分の大幅減少は認められない。鍛錬鍛治素材となった鉄塊らにかなり不純物としての造滓成分が含有されていたと予測される。製錬時の鉄塊そのものが粗成分であったのであろう。

Photo, 2 最下段の右側に炭化物組織を示す。紐状セメントイト (Cementite : Fe₃C) が微量析出している。これより炭素含有量は 0.01% 未満となろう。極低炭素鋼に分類される。Photo, 2 最下段左側はフェライト (Ferrite: の鉄の結晶粒組織を示している。全体に白い地はフェライトで、黒い細い線はフェライト粒界を示す。フェライト地中の黒い点は非金属介在物である。

この金属鉄はガラス質鉄滓の中に残留したものであるが、この組織レベルの鉄素材であれば鉄器を製作した場合、刃物であれば滲炭して韌性を付加しないことには、炭素含有量が低いため高温加熱で焼入れても硬くならない代物である。

(3) SEMによる金属鉄中の非金属介在物分析

F18 鉄滓に残留した金属鉄中の非金属介在物の SEM (Scanning Electron Microscope : 走査型電子顕微鏡) による調査を行なった。この装置の原理は、試験面に電子線束 (electron Probe) を照射し、ここより発生する反射電子、二次電子、X線等によって諸情報を得ることができる。その結果から試料の組成元素の種類や分布密度、組織及び微細構造などが解析可能となる。非金属介在物の特性 X 線像と共に、介在物組成をエネルギー分散型半導体検出器を使って半定量分析を行なった。それらの結果を Photo, 4 の (その 1) 及び (その 2) に示す。

非金属介在物は走査 X 線像から判るように組成が二相に分かれている。二次電子像の①箇所は、白色裏点がけい素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K)、に集中し、②箇所にはチタン (Ti)、バナジウム (V)、クロム (Cr)、らが検出されている。これは非金属介在物である、基本成分は $\text{SiO}_2\text{--Al}_2\text{O}_3\text{--CaO--K}_2\text{O}$ 系となり、これに微量の MgO 、 P_2O_5 、 TiO_2 、 MnO 、 FeO らの酸化物が加わる。それらの成分割合は Photo, 4 (その 1) に示す。同じく非金属介在物②はチタンスピネル系であり、 $\text{Al}_2\text{O}_3\text{--FeO}$ に TiO_2 、 V_2O_5 、 Cr_2O_3 らが加わっている。この成分割合は Photo, 4 (その 2) に示す通りである。

この様に F18 鉄滓は、残留した金属鉄中に含有された非金属介在物中に $\text{SiO}_2\text{--Al}_2\text{O}_3\text{--CaO--K}_2\text{O}$ 系にチタンスピネルが結合した状態で検出されたことにより、製鉄原料に砂鉄を使った素材であったことが確認できた。

(4) 金属鉄のマイクロ・ピッカース断面硬度測定結果

F18 鉄滓中に残留した金属鉄の組織同定を目的としてマイクロ・ピッカース断面硬度計 (Micro Vickeys Hardness Tester) による硬さの測定を行なった。鏡面研磨した試験に 136 の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その荷重を除した商を硬度値としている。測定結果を Table, 3 に示す。硬度値は 85~91 で平均値が 88.5 である。極低炭素鋼として妥当な数値である。参考までに大里郡台耕地遺跡出土鉄器の硬度値も掲載しておく。鉄中の炭素含有量によって硬度値が変動していくのが判るであろう。

(5) 化学組成

Table, 2 に分析結果を示す。楕円形に分類される鉄滓 (F 8、F 11、F 12、F 16、F 27、F 28) は全鉄分 (Total Fe) が高目で 44~57%、造渣成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は 25.8~41.9 % の範囲に収まっている。他の随伴微量元素は、酸化マンガン (MnO) 0.14~0.27%、酸化クロム (Cr_2O_3) Nil、硫黄 (S) 0.021~0.042%、酸化磷 (P_2O_5) 0.15~0.75%、銅 (Cu) 0.004~0.008

Table 2 埼玉県下古代製鉄遺跡出土の楔形鉄滓、製鍊滓の化学分析結果

符 号	遺 跡 名	遺 構 名	鉄滓分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 Metallic Fe	酸化第 I鉄 (FeO)	酸化第 II鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 けい素 (SiO ₂)	
F-5	関戸足利		鍛鍊鐵治滓	中世～近世	8.05	—	5.60	5.29	57.6	
F-8	"		"	"	47.7	—	45.9	17.09	17.24	
F-11	"		"	"	43.2	—	47.1	9.47	24.54	
F-12	"		"	"	55.6	—	60.9	11.86	18.90	
F-16	"		"	"	55.3	—	56.5	16.28	15.64	
F-18	"		"	"	22.92	—	25.96	3.92	40.54	
F-27	"		"	"	52.3	—	56.4	12.07	16.52	
F-28	"		"	"	63.3	—	53.3	31.6	8.88	
参 考 值	E S 1	石御堂	満1 3—D 上層	鍛鍊鐵治滓	中世～近世	38.60	—	44.26	6.00	20.30
	3	" "	下層	"	"	53.70	—	63.66	6.03	5.30
	4		満4 2-B 上層	"	"	42.80	—	50.70	4.86	16.98
	8		土壤53 2-E	"	"	50.40	—	64.20	0.71	9.32
S-9 A	大 山	D区 b-2号鍛冶址	精鍊鐵治滓	平安中期	57.6	0.14	29.6	49.3	5.1	
DA I 12	台 耕 地	I区 44号住居址	鍛鍊鐵治滓	平安 安	44.10	—	54.1	2.88	21.96	
8D-811	用 土 不 明		鍛鍊鐵治滓	平安もしくは中世	62.1	—	39.5	44.9	6.76	
8J-811	中 山	1号住居址	精鍊鐵治滓	平 安	50.0	—	54.3	11.14	16.75	
28	西 蒲 北	K11 G 5	精鍊鐵治滓	"	51.9	—	53.0	15.3	14.14	
31	"	K13	鍛鍊鐵治滓	"	64.2	—	50.0	36.2	8.56	
33	石 莢	H26号住居址	鍛鍊鐵治滓	"	59.2	—	45.3	34.3	11.80	
S-8	熊 野	4号住居址	鍛鍊鐵治滓	9C中頃	60.2	0.41	55.3	24.0	12.1	
A-831	五 領	2号住居址	鍛鍊鐵治滓	10C初頭	49.2	—	38.5	19.27	22.10	
A-832	"	"	鍛鍊鐵治滓	"	53.9	—	45.3	18.69	19.70	
3 N-6	高 岡	ち—27区 N.234	鍛鍊鐵治滓	8C後半～11C初頭	68.28	0.11	55.35	35.96	13.25	

註

1. 大澤正己 「関戸足利遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『関戸足利』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第40集) 1984
2. 大澤正己 「石御堂遺跡出土の楔形鍛治滓の調査」『石御堂』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第39集) 1984
3. 大澤正己 「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』(埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集) 1979
4. 大澤正己 「台耕地遺跡出土の製鉄関係遺物の金属学的調査」『台耕地』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集) 1984
5. 大澤正己 「用土遺跡出土鉄滓の調査」
6. 大澤正己 「中山遺跡1号住居跡出土鉄滓の調査」『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巣・水久保・猪久保遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集 1982)
7. 大澤正己 「西蒲北遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」『西蒲北遺跡』埼玉県大里郡岡部町教育委員会 1984
8. 大澤正己 「越生町五領遺跡出土鉄滓及び鉄釘の金属学的調査」『越生五領』越生町埋蔵文化財調査報告第2集) 埼玉県立間越生町教育委員会 1984

酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マングン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化磷 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	遊離成分	造成率 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	註
20.03	5.25	2.78	0.23	1.07	Nil	0.060	0.44	0.15	0.020	0.020	85.66	10.641	0.133	1
7.09	8.68	2.11	0.27	0.48	Nil	0.034	0.75	0.15	0.009	0.008	35.12	0.718	0.010	〃
8.88	6.58	1.88	0.20	0.46	Nil	0.032	0.64	0.08	0.011	0.006	41.88	0.948	0.010	〃
3.44	3.22	0.76	0.15	0.18	Nil	0.021	0.31	0.06	Nil	0.004	26.32	0.461	0.003	〃
3.87	5.18	1.14	0.14	0.23	Nil	0.030	0.47	0.32	Nil	0.004	25.83	0.452	0.004	〃
16.84	7.63	3.30	0.26	0.87	0.029	0.022	0.53	0.04	0.021	0.005	68.31	2.894	0.037	〃
6.28	5.57	1.69	0.15	0.60	0.029	0.042	0.50	0.05	0.009	0.008	30.06	0.575	0.011	〃
2.17	2.80	0.46	0.061	0.10	0.021	0.035	0.11	0.11	Nil	0.002	14.31	0.226	0.002	〃
5.86	2.60	0.87	0.15	0.31	Nil	0.023	0.39	0.16	0.011	0.004	29.63	0.768	0.008	2
2.04	0.35	0.60	0.15	0.25	Nil	0.025	0.26	0.12	0.040	0.004	8.29	0.154	0.005	〃
5.14	2.60	1.06	0.10	0.26	Nil	0.020	0.36	0.09	0.010	0.004	25.78	0.602	0.006	〃
3.10	2.07	0.92	0.087	0.088	Nil	0.011	0.30	0.05	0.005	0.034	15.41	0.306	0.002	〃
2.0	0.96	1.2	0.12	3.2	0.051	0.027	0.13	0.338	0.20	0.019	9.26	0.161	0.056	3
4.46	0.084	1.92	0.061	0.24	0.016	0.054	0.21	0.11	0.011	0.005	2.842	0.644	0.005	4
2.27	0.11	0.50	0.073	1.00	0.019	0.18	0.26	0.27	0.053	0.008	9.64	0.155	0.016	5
7.31	0.77	2.30	0.23	3.89	0.01	0.068	0.25	0.03	0.21	Nil	27.13	0.543	0.078	6
3.82	3.15	1.96	0.31	5.57	0.015	0.021	0.74	0.17	0.28	0.004	23.07	0.445	0.107	7
5.29	0.35	0.36	0.05	0.47	0.007	0.067	0.26	0.21	0.02	0.015	14.56	0.227	0.007	〃
6.20	0.52	0.78	0.12	1.23	0.023	0.022	0.45	0.20	0.10	0.005	19.30	0.326	0.021	〃
2.2	1.1	0.78	0.10	2.1	0.022	0.036	0.51	0.10	0.06	0.012	16.18	0.27	0.035	3
5.89	2.04	1.36	0.11	0.80	0.026	0.054	0.42	0.13	0.048	0.008	31.39	0.63	0.016	8
3.78	1.80	0.60	0.077	0.27	0.025	0.079	0.39	0.50	0.016	0.006	25.88	0.48	0.005	〃
3.52	0.01	1.16	0.09	0.74	0.027	0.014	0.12	0.086	0.008	0.008	18.94	0.28	0.011	3

Table 2 に示す他遺跡の鍛錬鍛冶滓の造滓成分が10~20%台であるのに比べると、関戸足利遺跡出土鉄滓が高目傾向にあることが判るであろう。

4.まとめ

関戸足利遺跡出土の中・近世に比定される鉄滓について、鉱物組成と化学組成を調査して次のことが明らかになった。

- (1) 鉄滓は鉄器鍛造工程で鉄素材を加熱した時点で排出される鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類できる。
- (2) 外観的に椀形状を呈するのは、鍛冶炉の底部に集積した滓であるからである。
- (3) 椗形状鉄滓の鉱物組成は、ワスタイト (Wustite : FeO) + フェアライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂) で構成されて鍛冶滓特有の晶癖を示している。
- (4) 化学組成のうち、全鉄分 (Total Fe) が44~57%と高目で、二酸化チタン (TiO₂) が1%以下、バナジウム (V) が小数二桁目以下に数字がくるのは、成分濃度がうすまつた鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）であるためである。
- (5) ガラス質鉄滓に残留した金属鉄中の非金属介在物を SEMによるエネルギー分散分析で調査した結果、チタン (Ti)、バナジウム (V) がスピネルとして検出されたところから砂鉄を原料とした素材が用いられたことが裏付けられた。
- (6) 金属鉄は炭素含有量が0.01%以下の極低炭素鋼に分類できる。
- (7) 鍛錬鍛冶において極低炭素鋼もかなり使用されたであろう。この場合滲炭して炭素量を高めないことには刃物等の韌性を要求される鉄器はできなかったであろう。これの救済には加熱熱処理が施されたであろう。
- (8) 中・近世になると鉄素材の流通はかなり活発となり、鉄素材は製錬炉からかなり遠隔地から搬入された可能性も考えられる。関戸足利遺跡の製作鉄器の種類と共に、鍛錬鍛冶（小鍛冶）に供された素材の製錬炉の追求などが今後の研究課題として残される。